判のしかけ、又は銀子請取掛を内へは銭つかふて歸るなど、親かたのたしかにしらぬ賣がけは、死帳に付捨、さま〳〵にわたくしする事、いかに氣のつく主にても、それ程にはならぬものぞかし。又小商人の小者までもいそがしき中にかけあらましにして、布袋屋のかるた一めん買て、道あるき〳〵八九どうに心覺へするもの、親かたに徳は付ぬ事也。掛乞にも色々の心ざし、よきものすくなし。人は盗人火は燒木の始末と、朝夕氣を付るが算用のかんもんなり。爰に請取普請の日用がしらに、ふるなの忠六といふ男、常にかる口たゝき、町の藝者といはれて、月待日まちに物まねして、人の氣に入ける。此大晦日しまひかね、さる方へ銀五百目申上れば、やすい事と請合給へば、夜に入御見まひ申し、あゝらたのしや、今宵琴の音をきけば、年のよらぬ仙家の心地、當地ひろしと申せども、此御内かたならでは外になし。金銀まん〳〵として、四方に寶藏かくれみのにかくれ笠、うち出の小槌は針口の音、福々旦那と、ひろ敷にかしこまる。やうありそうなる忠六此事かと、五百目包なげ出せば、かたじけなしといはふて、三度おしいたゞき、御蔭でとしを鷄がなく、おいとま申してさらばとて、門口まで出けるが、ちよこ〳〵立歸り、奥様へ有がたがりましたとよろしくたのみたて奉る、腰元衆といふ時、仲居のきちが、何と忠六どの、よろこびの折なればといふ。まひ舞ましよと、目出たいづくしを長々といふうちに、北國より重手代歸りて、只今貳百貫目御くら屋しきへわたすぞ。米は追附のぼると仕合、かねよ〳〵けふ奥にも琴の小うたの所か、さあ銀のせんさくせよといふとき、忠六あがり口に置たる五百目包をとりあげて、是はたくさんなる銀子、何のために捨置事ぞ。高は二百貫目入ぞ、それほど手前に有かないか。なくば手わけして才覺せよ。かねよ〳〵と氣をいらちければ、忠六不首尾せんかたもなく、長居はおそれありといふて、手ぶりで歸りける。

三　小判は寐姿の夢

夢にも身過の事をわするなと、是長者の言葉也。思ふ事をかならず夢に見るに、うれしき事有、悲しき時あり、さま〳〵の中に、銀拾ふ夢はさもしき所有。今の世に落する人はなし。それ〳〵に命とおもふて、大事に懸る事ぞかし。いかな〳〵、万日廻向の果たる場にも、天滿祭りの明る日も、銭が一文落てなし、

(一)銀子請取掛を云々――文意解しがたし、既文あるか。推考すれば「掛銀を請取りながら、内へは取らなかつたと言つて、實は費つて了つて歸る」の意であらう。
(二)死帳――損失になつた金額を記しておく帳面。
(三)かけあらましにして――掛金の取立はいゝかげんにして。
(四)布袋屋――「今時のかるた屋、布袋屋・松葉屋・筐屋」（俳諧引導集）貞享元年刊）
(五)八・九・どう――骨牌の札の名。その札を裏から見ても分るやうに、どこか心覺えになる點を見ておくのであらう。
(六)色々のこゝろざし――種々の考へがあつて。
(七)人は盗人云々――諺。「人は盗人火は燒亡（ジヤウモウ）」にかけて言ふ。
(八)かんもん――肝文。一大事。
(九)日用頭――日傭人足のかしら。
(一〇)富貴那――釋尊十大弟子の一人。辯舌第一と稱せる。忠六がおしやべりなのでつけた渾名。
(一一)町の藝者――町内での藝人。
(一二)申上ぐれば――無心を申上げたのである。
(一三)針口の音――當時の天秤は平衡を得るために針口を小槌で叩いたので、それを打出の小槌に見立てていつたのである。
(一四)廣敷――豪所の上り口にゝゝいた板敷の間。
(一五)としを鷄がなく――「年を取る」に言ひかく。
(一六)よろこび折なれば――「きちの詞。下に「何か一つ藝をして行けの意がある。
(一七)一つ舞ひましよ――忠六がそれをうけた詞。
(一八)御藏屋敷――大名の米藏を管理する屋敷。大名の栄地から産する米や主要物産はこゝに納められたので、諸大名の藏屋敷は皆大阪堂島にあつた。
(一九)米は追付のぼる――二百貫目の代金と引換へに大阪から送つてくる。
(二〇)けふ奥にも云々――この忙しい今日、奥でも音曲などしてゐるべき時でないの意。
(二一)長居はおそれ――諺。素手。
(二二)手ぶり――手ぶら、
(二三)今の世に――下に「金」を補つて見ねばならぬ。
(二四)落する――四段の連體形をかく誤用した例は西鶴には多い。
(二五)萬日廻向――數日間の廻向が萬日の廻向に當るとて法會を催す、その時は衆詣人が群集した。
(二六)天滿祭――大阪天滿神社の祭禮、毎年六月二十五日。

(一)世のかせぎは外になし――生業に勤勉する事は打すてての意、「外になし」は「外に爲し」である。
(二)駿河町見世――駿河町(日本橋通室町の西側)には両替が多かつたので、そこに新吹(新鑄造)の貨幣が積んであつたのである。
(三)よの事――餘の事、他事。
(四)いかに立てがたし云々――大晦日をどう越さうかとても拂へさうもないの意。
(五)取置――處置、やりくり。
(六)しばし小判――下に「と」字を脱したのであらう。
(七)ならく――奈落、無間地獄。
(八)佐夜の中山に云々――遠州佐夜の中山なる光明山の鐘を得るけれども、現世では福徳を得ることゝ、未來は無間地獄に墮ちるといふ俗說がある。
(九)釜の下――地獄の釜。
(一〇)我が男――わが夫。
(一一)誰か…なし――「誰か…あらむ」が正しい。反語をすぐ否定形に結ぶのは西鶴特有の語法。
(一二)わが手前――わが手前を思召して(女房に對して)を恥しく思召しての意。

兎角我はたらきならでは出る事なし。さる貧者世のかせぎは外になし、一足とびに分限に成事を思ひ、此まへ江戸にありし時、駿河町見せに、裸銀山のごとなるを見し事今にわすれず、あはれことしのくれに其銀のかたまりほしや、敷革の上に新小判が、我等が寐姿程有しと、一心によの事なしに紙ぶすまのうへに臥ける。比は十二月晦日の明ぼのに、女ぼうはひとり目覺めて、けふの日いかにたてがたしと、身體の取置を案じ、窓より東あかりさすかた見れば、何かはしらず小判一かたまり、是はしたり〳〵、天のあたへとうれしく、こちの人〳〵と呼起しければ、何ぞといふ聲の下より、小判は消てなかりき。扨も惜やと悔み、男に此事を語れば、我江戸で見し金子、ほしや〳〵と思ひ込し一念、しばし小判顯はれしぞ、今の悲さならば、たとへ後世は取はづし、ならくへ沈むとも佐夜の中山にありし無間のかねをつきてなりとも、先此世をたすかりたし。目前に福人は極樂、貧者は地ごく釜の下へ燒ものさへあらず、扨も悲しき年のくれやと、我と惡心發れば魂入替り、すこしまどろむうちに、黑白の鬼車をとゞろかし、あの世この世を堺を見せける。女房此有さまを猶なげき、我男に教訓して、世に誰か百まで生る人なし。然ればよしなき願ひする事愚かなり、たがひの心替らずは、行末に目出たく年も取べし。わが手前を思しめして、さ

(一三)湯命に及べば――「飢湯せねばなりませんから。」で切れる。
(一四)女房顏を――「女房の顏を」の誤であらう。
(一五)墨染――山城伏見の北にある地名。
(一六)人置――遊女、奉公人等の周旋をする口入屋。
(一七)こなた――あなた。女房を指す。
(一八)がらりに――給金をすつかり前渡しすること。「凡そ色女の給分(中略)わけて見よいのは、かしらに給銀皆取を、がらりといふ也」(好色貝合)
(一九)京町――伏見の町名。
(二〇)今日の事なれば――今日すぐ極めねばならぬ奉公日だから。
(二一)何とござりましよ――私は無調法者ですがどうでせうか。
(二二)なる程――どうあつても。
(二三)一年の手形――一年間奉公するといふ證文。
(二四)手ばしかく――手ばしこくである。口入屋の嬶が「後日拂つても今拂つても同じ事だ、これは世間の通り相場だ」とて一割の周ぞ口おしかるべし。されども此まゝありては三人ともに渴命におよべば、ひとりある躰が後々のためにもよし。奉公口のあるこそ幸はひなれ、何とぞあれを手にかけてそだて給はゞ、末のたのしみ、捨るはむごい事なれば、ひとへに賴みますと、泪をこぼせば、男の身にしては悲しく、とかふのことばもなく目をふさぎ、女房良を見ぬ所へ、墨染邊に居る人置のかゝが、六十あまりの祖母さまをつれだち來て、きのふも申通りこなたは乳ぶくろもよいによつて、がらりに八十五匁、四度の御仕着せまでかたじけない事とおもはしやれ。雲つく樣な飯たきが、布迄織まして半季が三十二匁、何事も乳のかげじやと思はしやれ。又こなたがいやなれば、京町の上にも見立て置ました。けふの事なれば、またといふ事はならぬと云。內義きげんよく、何をいたしますも身をたすかるためで御座ります。大事の若子さまを預りましても、何と御座りましよ。私はなる程御奉公の望といへば、男には物をいはず、すこしもはやくあなたへと、となりの硯かつて來て、一年の手形を極め、殘らず銀渡して、彼かゝ手ばしかく、後といふも同じ事、是は世界が此通りの御定と、八十五匁數三十七と書付のある旋籌を手ばやく取込んだのである。

(二五)八十五匁數三十七―細粒銀の數が三十七で合計八十五匁あるのである。

（一）りんと――實際の取引の場合、貨幣の量目を一分一厘のちがひなくきちんと量るさまにいふ語。
（二）おまん――乳母に抱へられた女の子供の名。
（三）親――親はたけれど子は育つ――諺。
（四）かみ様――「地下人の妻女を上様と云ふ」（色道大鑑）、「人の妻をカミサンと云ふ」（俚言集覽）。但し西鶴時代の用例では、多く後室隠居の母を言つてゐる。
こゝのかみ様は口入屋と連れだつて來た六十餘の母（乳母をつける子の）ことである。
（五）「それは銀が仇、あの娘は死次第」とは口入嬶の詞。
（六）銀が仇――諺。金のために苦しみや災厄をうける意。
（七）大福――大福茶。又大服ともかく。「以二此湯一（此クワカシをさす。）點レ茶、或濃レ鹽梅於茗椀之内一両合家飲レ之、又献二貧客一是謂二大服一。用レ梅高年後面皮生レ皺而欲レ做二鹽梅之皺面一也」（日次紀事）
（八）いわふて――祝うて。

内、八匁五分りんと取て、さあおうばどの身ごしらへまでない事とつれ行くとき、男も泪、女は赤面して、おまんさらばよ、かゝは旦那さまへ行て、正月に來てあぶぞよといひ捨て、何やら兩隣へ頼みて又泣ける。人置は心つよく、親はなけれど子はそだつ、うちころしても死ぬものは死ませぬぞ、御亭さまらばとばかりに出て行。此かみ様世を觀じ、我孫のふびんなも人の子の乳ばなれしはかはゆやと、見歸り給へば、それは銀がかたき、あの娘は死次第と、其母おやがきくもかまはずつれ行ける。程なふ大晦日の暮がたに此男無常發り、我大分のゆづり物を取ながら、胸算用のあしきゆへ江戸を立のき、伏見の里に住けるも、女房共が情故ぞかし、大ぶくばかりいわふて成とも、あら玉の春にふたりあふこそ樂しみなれ。心ざしのあはれや、かんばし二ぜん買置しか棚のはしに見えけるを取て、一ぜんはいらぬ正月よと、へし折て鍋の下へぞ燒ける。夜ふけて此子泣やまねば、となりのかゝたちといよりて、摺粉にぢわうせん入て燒かへし、竹の管にて飲す事をおしへ、はや一日の間に思ひなしか、おとがひがやせたといふ。此男扨も是非なしと、心腹立ちて手に持たる火ばしを庭へなげける。お亭さまはいとしや、お内義様は果報、さきの旦那殿がきれいなる女房をつかふ事がすきじや。ことに此中おはてなされた奥様に似た所がある、

（九）心ざしのあはれや――女房が夫妻共に雑煮を祝はんとて箸二ぜん買つておいた志である。
（一〇）かん箸――かんは羮で雑煮のこと。雑煮を祝ふ太箸。
（一一）といよりて――訪寄りて。
（一二）摺粉――米を粉末に磨り碎いたもの。母乳の代用とする。
（一三）地黄煎――餅の一種元地黄の汁を用ひて練つたからの稱、後には只の水で練つて製した。
（一四）心腹立ちて――相手なしに自分だけで腹が立つこと。
（一五）年徳の神――歳徳神その一年の惠方の神。
（一六）とし神――年徳神に同じ。
（一七）一國一城の所――城下。
（一八）廂の一つ家――廂は「濱廂」などの事であらう。
（一九）至らん――至らぬ。ぬをんとかいた例は多い。
（二〇）いづれふたつ取には――二者のうち一方を選ぶならば、即ち都會か田舍かどちらといふならの意。
（二一）しまうた屋――商賣を仕舞つた家の義。「商ひせ

本にうしろつきのしほらしき所が其まゝといへば、此男聞もあへず、最前の銀は其まゝあり、それをきいてからはたとへ命がはて次第と、かけ出し行て、女ほう取返して泪で手を取ける。

四　神さへ御目違ひ

諸國の神々毎年十月出雲の大社に集り給ひて、民安全の相談あそばし、國々への年徳の神極め、春の事どもを取いそぎ給ふに京江戸大坂三ヶの津へのとし神は、中にも德のそなはりしを忍らみ出し、奈良堺へも老功の神達、又長崎大津伏見、それ〳〵に神役わけて、さて一國一城の所、あるひは船着山市はんぢやうの里々を見たて、其外都にはるかに島住、ひさしの一つ屋までも、餅つきて松たつる門に、春のいたらんといふ事なし。しかし年德も上方へは面々に望み、田舍の正月は嫌い給ふぞかし。いづれふたつ取には、萬につけて都の事は各別也。世の月日の暮るゝ事流るゝ水のごとし。程なく年波打よせて、極月の末には成ける。されば泉州の堺は朝夕身の上大事にかけ、胸算用にゆだんなく万事の商賣うちばにかまへ、表向は格子作りに、しまふた屋と見せて、内證をざる町人をしもたやと云ふ　は、しまうた屋を約めていふなり。（嬉遊笑覽）

（一）入帳――取入記錄の帳簿。
（二）人がましう――人並らしく。
（三）當世女房――女房は只女の義。當世風の女。
（四）大義――心勞。入費のために氣苦勞する。
（五）ゑ枌（サシグレ）――くれは樽板。古くなつた桶（コケラ）をさしかへる事であらう。
（六）石で根繼ぎ――丈夫な事の喩にいふ諺。
（七）德を見すまして――この話は、上の「銅樋」と下の「手紬の不斷着」との双方にかゝる。例の急デンボの筆致から端折つたのである。
（八）臺碓――地に埋めないで臺をつけて動かぬやうにした碓。
（九）赤米――赤味を帶びた下等米（大唐米、タイタウマイ）などの類。
（一〇）目の前の櫻鯛――堺の海で捕れる。櫻鯛、櫻は紅葉に對する。
（一一）魚荷にのぼし――魚荷として京に上し。
（一二）江鮒――「其小者二四寸、在三河中、名二伊奈、五六寸者在二江中、號内名二江鮒」（和漢三才圖會）。鯽（ボラの條）
（一三）磯物――海岸近くでとれる小魚類。
（一四）燈臺元暗し――諺。魚の事と火の歳神が自分の運の分らぬ事とを指す。
（一五）大かたに――大體として。
（一六）見せ付――店の樣子
（一七）惠方棚――歳德神を祭る神棚。
（一八）相宿――他の神樣と同宿。
（一九）何と祝ひけるぞ――どんな風に歳神を祭つてくれるだらう。「ける」と過去形にしたのは例に筆癖。
（二〇）助松――地名。堺附近の松原の名か。
（二一）命が惜しくば――強盜の詞。
（二二）しらり――白り。夜明の狀にいふ副詞。
（二三）つまりまして――金融逼迫で。
（二四）因果物語――鈴木正三ノ著。寶永元年刊。因果應報の物語を集めたもの。但浪人の物語け見當らない。或はたゞ因果話を書いた本の意か。

奥深ふ年中入帳の銀高つもりて、世帶まかなふ事也。たとへば娘の子持てば、疱瘡して後、形を見極め、十人並に人がましう當世女房に生れ付と思へば、はや三歳五歳より毎年に婿入衣裳をこしらへける。又形おもはしからぬ娘は、おとこ只は請とらぬ事を分別して、敷銀を心當に、りかし商ひ事外にいたし置、緣付の時分さのみ大義になきやうに、覺悟よろしき仕かたなり。是によつて棟に棟次第にたちつゞき、こけら葺のやねもそこねぬうちにさし枌したり、柱も朽ぬ時より石で根つぎをして、軒の銅樋數年心がけて、德を見すましていたせし手紬の不斷着、起居せはしからねば是きるゝ事なく、風俗しとやかに見へて身の勝手よし。諸道具代々持傳えければ、年わすれの茶の湯振舞、世間へは花車に聞えて、さのみ物の入るにもあらず、年々世渡りをかしこうしつけたる所なり。よきくらしの人さへかくあれば、まして身體かるき家々は、そろばん枕に寢た間も、のびちゞみの大節季を忘るゝ事もなく、臺碓の赤米を搗の秋と詠め、目まへの櫻鯛は見たがる京の者に見せよと、毎夜魚荷にのぼし、客なしには江鮒も土くさいとて買ぬ所ぞかし。山ばかりの京には、眞鰹も喰、海近き爰には磯ものにて埒を明ける。惣しての事燈臺元くらし。大晦日の夜のけしき大かたに見せ付のよき商人の宿へ、年德の神の役なれば、案内なしに正月仕に

はいつて見れば、惠方棚は釣ながらとゆしびもあげず、何とやら物さびしく氣味のあしき内なれども、爰と見立て入ければ、又外の家に行て、相宿もうれしからず、何といはぬけるぞと、しばらくやうすを見しに、門の戸のなるたびに女房びく〳〵して、まだ歸られませぬ、さい〳〵足をひかせましてかなしう御座ると、いづれにも同じことはりいひて歸しける。程なく夜半も過、明ぼのになれば、掛乞ども爰に集まり、亭主はまだかまだかとおそろしき聲を立る所へでつち大息つぎて歸り、旦那殿はすけ松の中程にて、大男が四五人して松の中へ引込、命が惜くばといふ聲を聞捨てにして逃て歸りましたといふ。内義おどろき、おのれ主のころさるゝに、男と生れて淺間しやと泣出せば、かけ乞ひとり〳〵出て行、夜はしらりと明ける。此女房人歸りし跡にてさのみなげくけしきなし。時にでつちふところより袋なげ出し、在郷もつまりましてやう〳〵と銀三十五匁錢六百取つてまいつたといふ。まことに手だてする家につかはれければ、内のものまでも衒同然になりける。亭主は納戸のすみに隱れゐて、因果物がたりの書物くり返し〳〵讀つゞけて美濃の國不破の宿にて貧なる浪人の年を取かね、妻子さし殺したる所、ことに哀れに悲しく、いづれ死もしさうなるものと、我身につまされ、人しれず泣けるが、掛乞はみな了簡していにました

といふこゝに、(一)すこし心定まりて、ふるひ〳〵立出、さて〳〵けふ一日に年をよらせしと、悔みて歸らぬ事をなげき、餘所には雑煮をいはふ時分に、米買燒(たき)木といふのへ、元日も常の飯たきて、やう〳〵二日の朝雑煮して、佛にも神へも進し、此家の嘉例にて、もはや十年ばかりも元日を二日に祝ひます、神の折敷(二)が古くとも堪忍をなされとて、夕めしなしにすましける。神の眼にも、是程の貧家とはしらず、三ヶ日の立事を待かね、四日に此家を立出て、今宮(三)の恵美須殿へ尋入り、さても〳〵見かけによらぬ悲しき宿の正月をいたしたと、うき物語あそばしければ、こなた(四)も年こしをしてこしめす程にもない事哉、人のうちの見たて、めし(五)あはせの戸の白からず、内義が下女のきげん取て、疊のへりのきれたる家にては、年をとらぬもので御ざる。廣ひ堺中でかゝる貧者は四五人の所へ、不仕合の神棚、われ(六)は世界の商人が心ざしの酒と掛鯛にて、口を直して出雲の國へ歸らせ給へと、馳走して留させられしを、十日(七)ゑびすの朝とく參詣したる人、内陣(八)のおものがたりを聞て歸りける。神にさへ此ごとく貧福のさかいあれば、況人間の身の上、定めがたきうきよなれば、定まりし家職に油斷なく、一とせに一度の年神に、不自由を見せぬやうにかせぐべし。

(一)少し心定まりて――少し心が落ちついて。
(二)折敷――片板（ヘギイタ）で作つた食器をのせる方形の臺。
(三)今宮――大阪今宮の戎神社。西宮と共に名高い。
(四)こなた――「あなたも云々」――「あなたも年來年德神として家々で正月を迎へ、世を送つて來た程にもない事だ」の意。「年こし」は年越。正月を迎ふること。「こしめす」は年數を經られた。「めす」は敬語。
(五)召合の戸――兩方から引合せて附すやうにした二枚の戸。
(六)われ――これは世界の云々――こゝは文脈がつゞかない。大意をとれば「私は商人たちが志として献じてくれた酒と掛鯛として滿腹してゐるあなたも、これを口直しに召し上つて」云々の意。「世界の商人」は富裕の商人、世間で認められてる富商の意か。鯛は恵比須と緣がある。
(七)十日戎――毎年正月十日に西宮今宮などの恵比須に參詣すること。
(八)内陣――神社佛閣で、結界より奥の方、即ち祭壇ある所。

胸算用　大晦日は一日千金　巻四

目錄

一　闇の夜の惡口
　世に有人の衣くばり
　地車に引隱居銀
二　奈良の庭竈
　萬事正月拂ひぞよし
　山路を越る數の子
三　亭主の入替り
　下り舟の乘合噺
　分別してひとり機嫌
四　長崎の柱餅
　禮扇子は明る事なし
　小見せものはしれた孔雀

一　闇の夜のわるロ

所のならはしとて、(一)關東に定置て大晦日に祭り有。津の國西の宮の(二)居籠り、豐前の國はやとものの和布刈、又丹波のおく山家に縁付をする里有。むかしは年のくれに(三)靈祭りして、いそがしき片手に香はなをとゝのへ、神の折敷と麻がらの箸と、取まぜてのせはしさに、其ころのかしこき人、極樂へことはりなしに七月十四日に替ける。今の智惠ならば、春秋の彼岸のうちに祭るべし。末々の世まで何ほど(五)徳の行事もしれがたし。大坂生玉のまつり、九月九日に定め置れ幸はひ家々に鮑燒ものもする日なり。(六)我人の祝儀なれば、客人とてもあらず、年々に此徳つもりて大分の事ぞかし。氏子の(七)耗をかんがへ、神も胸算用にてかくはあそばし置れし。又都の祇園殿に、大年の夜(八)けづりかけの神事とて、諸人詣でける。神前のともし火くらふして、たがひに人貌の見えぬとき、參りの老

(一)關東に云々――この祭は何處のをさすか不明。

(二)居籠り――「祭正月十日、村民自二九日朝一至レ夜閉レ戸不二出入一。謂二之居籠一。亦一異也。」（和漢三才圖會、西宮祭の條）「摂陽群談」にも同様の事が見える。正しくは忌籠（イゴモリ）である。「神道名目類聚抄」には大晦日・夜の事とある。

(三)早稲の和布刈――長門國赤間關和布刈神社の神事として除夜の夜半神主が神前の海に入つて和布を刈る式がある。

(四)靈祭――報恩經に亡者が十二月晦日の午時に來て元日の卯時に歸ると云ふ說があり、王朝には大晦日に魂祭をした證が「枕草子」に見え、室町期には關東地方にその遺風のあつた事が「徒然草」に見える。

(五)徳――德の行くも知れがたし――どれだけ利益があるかわからない。

(六)われ人の祝儀なれば――誰にでもの祝ひ日であるから他から、客に來る人はない。

(七)削掛の神事――「今夜大晦の夜子刻祇園社神前燈燈之外悉滅火、暗中參詣人者レ口而斥二言他人一瑕疵一、假令雖下聞二其聲一知中其人上不レ問レ之不レ恨レ之、是慨悔義而勸善懲惡微意乎。」（日次紀事）。「削掛とは削掛の木を神前で燒きその煙の際く方向によつて丹波・近江二國の豐凶を占ふ。又その火で元日の神供を調へる。

若男女左右にたちわかれ、惡口のさま〳〵云がちに、それは〳〵腹かゝへる事なり。おのれはな三ケ日の内に餅が喉につまつて鳥部野へ葬禮するわいやい。おどれは(一)又人賣の請(二)でな同罪に粟田口(三)へ馬にのつて行くわいやい。おのれが女房はな元日に氣がちがふて子を井戸へはめおるぞ。おのれはな火の車でつれにきてな鬼のかうのものになりをるわい。おのれが父は町の番太(四)をしたやつじや。おのれがかゝは寺の大こく(五)の果てじや。おのれが弟はな衒云(六)の挾箱もちじや。おのれが伯母は子おろし屋をしをるわい。おのれが姉は襠せ(七)すに味噌買に行と道でころびをるわいやい。いづれ口がましう、何やかや取まぜていふ事つきず。中にも二十七八なる若ひ男、人にすぐれて口拍子よく、何人出ても云すくめられ、後には相手になるものなし。時にひだりの方の松の木の陰より、そこなおとこよ、正月布子(八)したものとおなじやうに口をきくな、見れば此寒きに綿入着ずに何を申ぞと、すいりよう(九)に云けるに、自然と此男が肝にこたへ、返す言葉もなくて大勢の中へかくれて、一度にどつと笑はれける。是をおもふに、人の身のうへにまことほど恥かしきものはなし。とかく大晦日(一〇)の闇を、足もとの赤ひうちから合點して、かせぐ(一一)に追付貧方なし。さても花の都ながら、此金銀はどこへ行たる事ぞ、年々節分の鬼が取て歸るものぞ御座ろ。ことに我等は

(一)おどれ――おのれ、他人を嘲る詞。
(二)人賣の請――人身賣買の保證人。
(三)粟田口――京にある刑場。
(四)番太――自身番に使はれる下内(ゲナイ)雜備の夜廻り。一種の賤民とされてゐた。
(五)大黒――梵妻。僧侶のかくし妻。
(六)挾箱持――下男といふ程の意。
(七)襠――脚布、女の腰卷
(八)正月布子――正月用の新しい布子。
(九)すいりやう――推量。あてすつぱう。
(一〇)大晦日の云々――大晦日は毎年來るものに決つてゐる、それを豫め覺悟して、困らぬやうに用心せよの意。闇と赤い(明い)は緣語である。闇には節季に困る意もこめてある。
(一一)かぜく――貧方は貧乏。なし――詮。

(一二)世のすぼりたる――世の中が不景氣になつた。
(一三)氣のつき――退屈。
(一四)うまれ〳〵――生れるとすぐ。
(一五)書付の箱――封印した日附のある銀箱。
(一六)何ぞいちもつなふては――何か心に一もつ(一金み)なくては。
(一七)此仕合そなはりし――生來富裕たる素質をもつた。
(一八)面屋――わかりて――母屋から分れて。
(一九)衣配り――年末に正月の料として、親戚知友又は召使などに衣を贈るをいふ。

近年銀と中たがひして、箱に入たるかほを見ませぬと、世(一二)のすぼりたる物がたりて、三條通りを歸れば、山がたに三星の紋ぢやうちん六つとぼして、車三輛に銀箱をつみ、手代らしきもの二人跡につきて、咄して行をきけば、世界にない〳〵といへど、有ものは金銀じや。此銀子は隱居の祖母への寺參り銀とて、親旦那が分置れ、明暦元年の四月に藏入して又取出すは今晩、此銀箱が世間を久しぶりにて見て、氣(一三)のつきを晴すべし。おもへば此銀はうつくしき娘を、うまれ〳〵出家にしたやうなものじやは、一生人手にわたりてよい事にもあはず、後は寺のものになる程にと、大笑ひして、けふ此銀を出す次(つい)で面に、向ひ屋敷の内ぐらを見れば、寛永年中の書附(一五)の箱ばかりも山のごとし。一代にあのごとくたまるものかよ。惣じて世上の分限第一しはき名を取て、何(た)ぞいちもつなふては、富貴には成がたきに、我等が旦那は萬事大名風にして、一代榮花にくらし其上の此仕合(一七)そなはりし福人、されば今迄は惣領どのに隱居したまへども、二男の家をもたれければ、又氣を替てそこへの隱居の望み、何事も御心まかせにとて、霜月はじめごろより、萬の道具をはこび、けふ此銀がうちどめなり。面屋(一八)よりわかりて、隱居付の女十一人、猫も七ひき、乘物にのりて人並に越れし。此廿一日に、例年の衣(一九)くばりとて、一門中下人どもかれこれ集めて男小袖四

（一）小だち中だち――小裁は小兒の衣服の裁ち方、中裁は本裁と四つ身との中間の裁ち方で、十二三歳位の子供の服。
（二）太夫――芝居の太夫。
（三）攫嫌――丹那の攫嫌のよい折を見はからつて嘆願する。
（四）百錢をよみける――よむは數へること。百文ざしに不足はないかと一一數へて見るけちくさい樣子を嘲つたのである。
（五）年男――師分新年の諸儀式を勤める男。豆をまいたり、若水を汲んだり、神佛に燈明をあげたりする。
（六）有銀と――有る銀と。
（七）兩替の手代――兩替屋の手代。
（八）七つさがり――午後四時すぎ。
（九）追匠――追從。
（一〇）請取手形――金の受取證。

十八、女小袖五十一、小だち中だちの小袖廿七、合て百貳十六、笹屋にて調のへ、それ〳〵に給はりける。此小袖代をもてば、商ひの元手があるぞ。又若旦那よりは、きのふも初芝居がならぬといふて、さる太夫が機嫌を見合なげきしに、金子五百兩かし下さるゝ。京の廣ひ事をしらぬゆへ、掛乞が百錢をよみける。我々が見て此かた、旦那兄弟金銀手にもたれたる事なし。まして我分限の高をしられず、九人の手代まかせなりと語りつゞけて、大きなる家作りに入て、御隱居樣のお銀がまいりましたと、内ぐらに納めける。此家の年男神々へ燈火あげて後、お銀ぐらへも燈明と申せば、旦那指さして笑ひ、さても初心な年男どの、藏に燈明などといふは、纔か千貫目の事也。二十五六も燈明とぼすかと申されし。さても大分有銀と、此家をうらやましく見るうちに、方々より大分の銀箱廣庭につみかさね、兩替の手代らしきものども手をつかへ、此家のおも手代にさま〳〵きげんをとり、何とぞ此銀子ども御くらへおさめ申たきといへば、例年申渡し御ぞんじのごとく、大晦日の七つさがり候へば、銀子いづかたから參りても、うけとり申さぬと、かね〳〵申わたし置しに、夜に入て此はしたがね、事やかましといひて、うけとらぬを、色々わびごと迫匠いひて、三口合して六百七拾貫目渡して、請とり手形おしいたゞきて立歸る。もはや御藏

（一一）庭竈――臺所の土間。
（一二）俳書「五節句」（貞享五年）に、左家にて地方的行事として掲ぐ。京大阪は廢りて奈良に殘れるものか。
（一三）一色にきわめて――看種ときめて。
（一四）八助――鮪の足八本に緣をとる。
（一五）口喰うて一盃――糊口以外に餘裕のない事。
（一六）母――親の續まれて――「續まれ」は敬語。但し「母親に續まれ」とし、受身に見る方が文法的である。
（一七）間錢――手數料。仲介の間に利する錢の意。
（一八）とりあげ祖母――取上婆。産婆。
（一九）けはしき時――急な時。
（二〇）念佛講――講の加入者の遺族に定額の金を送るために結ばれた講。多く老人仲間であつた。
（二一）布――奈良晒。この講から續まれて晒を買つて來るにも利（間錢）をとつたのである。
（二二）死がな目くじろ――死んでくれたらいゝ、そしたら目までくじりとつてやらうといふので、貪欲非道な事にいふ語。

はしめけるとて、大がまのうしろにかさね置ける。此銀は庭にて年をとりける。まことに石かはらのごとし。

二　奈良の庭竈

むかしから今に同じ顔を見るこそおかしき世の中。此二十四五年も奈良がよひする看屋有けるが、行たびに只一色にきわめて、鮪より外に賣事なし。後には人も鮪賣の八助とて、見しらぬ人もなく、それ〳〵に商ひの道付て、ゆるりと三人口を過ける。されども大晦日に錢五百もつて、終に年をとりたる事なし。口喰て一盃に雜煮いはふた分なり。此男つね〳〵世わたりに油斷せず、ひとりある母親のたのまれて、火桶買ふて來るにも、はや間錢取て只は通さず。まして他人の事には、とりあげ祖母呼で來てやるけはしき時も、茶づけ食を喰ずには行かぬものなり。いかに欲の世にすめばとて、念佛講仲間の布に利をとるなどは、まことに死がな目くじろの男なり。是程にしてもあのざまなれば、天のとがめの道理ぞかし。そもそも奈良にかよふ時より、今に鮪の足は日本國が八本に極まりたるものを、一本づつ切て、足七本にしてうれども、誰か是に氣のつかぬ事にて賣ける。其あしばかりを松ばらの煮うり屋に、さだまつて買もの

(一)物には七十五度――物には際限があるといふ意の諺。
(二)手貝の町――奈良の町名。
(三)ひし垣――菱垣。竹を菱形に打違へて結んだ垣。
(四)打さして――碁を打つのを中途で止めて。
(五)裾のかれたる――脚部の物足らずで淋しいさま。
(六)いひぶん――言分、一理屈こねる。
(七)有る程は云々――金のあるだけは支拂する。
(八)ならぬとことわり言へば――支拂が出來ぬと、その理由を言へば。
(九)さし引四つ切――貸借關係の勘定は午後十時限り。
(一〇)いろ〳〵――家々。
(一一)庭いろり――庭側爐裏、庭竈。「設二火爐於庭上一、合家飯席至二両座一、是謂二庭竈一」(日次紀事)

有。さりとはおそろしの人ごころぞかし。物には七十五度とて、かならずあらはるゝ時節あり。過つる年のくれに、あし二本づつ切て、六本にしていそがしまぎれに賣けるに、これもせんさくする人なく、賣て通りけるに、手貝の町の中ほどに、表にひし垣したる内より呼込、鯖二盃うつて出る時、法躰したる親仁ぢろりと見て、碁を打さして立出、何とやらすそのかれたる鯖と、あしのたらぬを吟味仕出し、是はどこの海よりあがる鯖ぞ。足六本づつは、神代此かた何の書にも見えず。ふびんや今まで奈良中のものが、一盃くうたであらふ、魚屋貌見しつたといへば、こなたのやうなる大晦日に、碁をうつてゐる所ではうらぬと、いひぶんしてぞ歸りける。其後誰が沙汰するともなく世間にしれて、さるほどにせまい所は角からすみまで、足きり八すけといひふらして、一生の身過のとまる事、これおのれがこゝろからなり。されば大としの夜の有さまも、京大坂よりは各別しづかにして、よろづの買がかりも、有ほどは隨分すまし、此節季にはならぬとことはりいへば、掛とり聞とゞけて、二たび來る事なく、さし引四つ切に、奈良中が仕舞て、はや正月の心、いろ〳〵に庭いろりとて、釜かけて燒火して、庭に敷ものして、その家内旦那も下人もひとつに樂居して、不斷の居間は明置て、所ならはしとて輪に入たる丸餅を、庭火に燒喰もいや

(一二)ふくき――原本「ふくさ」とあるが、ふくき(福貴)の彫り損じか。
(一三)宿の者――風の者。賤民の稱。南都宿者。今曉寺主法眼井大乘院坊官・二條輕法眼之門戸唱二富々一(日次紀事)
(一四)俵迎へ――大黒は俵を踏まへて居るからいふ。
(一五)さらし布――奈良の名産「曝布出二於和州奈良一布元上品也」。(和漢三才圖會)
(一六)大ぐれ――大暮。大晦日。
(一七)とりやりのさし引――貸借の差引勘定。
(一八)銀荷を心がけて――銀荷を取らうと心かけて。
(一九)大分――大分の金高。

しからずふくきなり。さてまた都の外の宿の者といふ男ども、大乘院御門跡の家來因幡といへる人の許にて、例にまかせて祝ひはじめ、富々富々といひて、町中をかけ廻れば、家ごとに餅に錢そへてとらせける。是を思ふに大坂などにて厄はらひに同じ。漸々夜も明がたの元日に、たはらむかへ〳〵と賣けるは、板にをしたる大こくどのなり。二日の明ぼのに惠比酒むかへとてうりける。三日の明がたにびしやもんむかへとうりける。毎朝三日が間、福の神をうるぞかし。さて元日の禮儀、世間の事はさし置て、先春日大明神へ參詣いたすに、一家一門するふ〳〵の親類までも引つれてざゞめきける。此とき一門のひろきほど外聞に見えける。何國にても富貴人こそうらやましけれ。商賣のさらし布は、年中京都の吳服屋にかけうりて、代銀は毎年大ぐれに取あつめて、京を大晦日の夜半から我先に仕舞次第に、たいまつとぼしつれて南都に入こむ、さらしの銀何千貫目といふ限りもなし。すでに奈良へ歸れば、皆々夜あけになれば、金銀くらにうちこみ置、正月五日よりたがひにとりやりのさし引する事例年なり。此銀荷を心ろがけて、大和の片里にしのびてすみける素浪人ども、年とりかぬる事のかなしさに、いのちを捨て、四人内談して追剝に出しに、みな三十貫目又は五十貫目の大分にて、のぞみほどのはした銀なければ、それかこれかと見

(一)くらがり峠――奈良から生駒山の中腹を越して大阪へ通ずる路にある峠。
(二)心にくし――心が引きつけられる。(重いものを輕さうに見せてゐる。中に何かいゝものがあるに違ひないと思つたのである。
(三)かずのこ――數の子(正月用の)
(四)下り船――伏見の京橋から大阪の八軒屋へ下る船。
(五)春知り顔――正月の近いのを心得た様子。
(六)如在――手ぬかり。
(七)京橋――伏見の船の發着所。
(八)不斷――平常。
(九)早物語――即座に話をこしらへていふ頓作話の類か。
(一〇)思出し念佛――思ひ出したやうな、とつてつけの念佛。
(一一)待つてから――待つたにしたところで。
(一二)腹たちそふなる顏――「腹頂づら。「そふ」は――さう」の誤。
(一三)おやま茶屋――色茶屋、おやまは遊女のこと。
(一四)あいの手――合の手作奏、

合すれども、終に酒手と云かねて、此道かへてくらがり峠に出て、大坂よりの歸りをまちぶせし所に、小おとこのかたげたる菰づつみを、心にくしおもきものをかるう見せたるは、隱し銀にきわまる所とて、おさへて取てにげされば、此男こゑを立て、明日の御用にはとても立まい〳〵と申す時に、四人してあけて見ればかずのこなり。是は〳〵。

三　亭主の入替り

年の波伏見の濱にうちよせて、水の音さへせはしき十二月二十九日の夜の下り船、旅人つねよりいそぐ心に乘合て、やれ出せ〳〵と聲々にわめけば、船頭も春しりがほにて、われも人もけふとあすとの日なれば、何がさて如在は御座らぬと、頓て纜ときて京橋をさげける。不斷の下り船には世間の色ばなし、小うた淨瑠りはや物がたり、謠に舞に役者のまね、ひとりも口たゝかぬはなかりしに、今宵にかぎりてものしづかに、折々思ひ出し念佛、又は長ふもないうき世、正月々々と待てから、死ぬるを待ばかりと、世をうらみたる云分、其ほかの人々は寐入もせず、みなはらたちそふなる顏つきなるに、人の手代らしき男が、おやま茶屋でうたひならしなげぶしを、息の根のつゞくほどはりあげて、あ

(一五)大間の行燈――淀の橋附近の河流に濁があつてそこを航行する場合は危險を防ぐため舟の艫から逆行した。夜間は橋の大間に行燈をかかげて渦の所在を知らせる目標としたのである。
―早淀でござる。あの火の見ゆるが大橋の中の間、中略)あぶない〳〵まつと上で廻せばよいに――(五個津傳情男)。又、淀の御城に尻を向けぬやう逆行したのとも云ふ。
(一六)かせぎければ――かせげば一といふところ。
(一七)足元から鳥の立つやうに――不意に事が起つてうろたへる意の諺。
(一八)働きてから――働いたところでの意。
(一九)何の甲斐なし――何の甲斐あるべき」といふところ。
(二〇)毎年の仕舞――毎年の年末決算。
(二一)當くれ――本年の暮。
(二二)置いたものとつて來るやうな――確實なといふ事の比喩。
(二三)さしわたして弟を――さしわたしは直接の意。轉じて親近、意に用ふ。「さしわたしの從弟」などといの手を口三味線の無拍子に、頭をふり廻してつらにくし。程なふ淀の小ばしになれば、大間の行燈目あてに、船を艫より逆下しにせし時、分別らしき人目をさまして、あれ〳〵あれを見たがよい、人みなあの水車のごとく、晝夜年中油斷なくかせぎければ、大節季の胸算用違ふ事なきに、不斷は手をあそばして足もとから鳥のたつやうに、ばたくさとはたらきてから何の甲斐なしと、我ひとり智惠有顏にいひける。船中の人々耳をすまして、是尤と聞ける中に、兵庫の旅籠屋町の者乘合けるが、只今のお言葉にて、われらが身の上の事に思ひあたりました。浦住居の德には、生肴のつかみどりの商賣して、世わたり樂々としてから、毎年の仕舞には少づつたらず、此十四五年も迷惑して、大津に母方の姨有けるが、わづか七拾目か八拾目か、百目より内の御無心申せしに、年々の事にて姨もたいくついたされて、當くれの合力はならぬといひ切られ、置たものを取て來るやうなる心あて違へば、里に歸りてから年の取やうなしとかたる。又ひとり男は、さしわたして弟をつれて、此たび四條の役者に近付ありて是をたのみにして藝子に出して、前銀かりて此節季を仕舞ふ心がけにてのぼり

いふ。こゝも「さしわたしの弟」又は「さしわたした弟」の誤ではあるまいか。

さしわたしては「直接に」と云ふ意の場合のみ用ひられ、親近の意の場合にかゝる副詞型で用ひた例はないやうである。

(二四)藝子――少年俳優。

(一)太夫子――將來立女形にもなるべき少年俳優。
(二)本子――本式の俳優ともなるべき歌舞伎子。
(三)若衆下地――若衆(色若衆)即ち少年俳優になるだけの素質ある事。
(四)人置――口入紹介業。
(五)筋目――素性。
(六)十年切つて――勤の期限を十年と定める。
(七)小共――子供。
(八)つかひ銀――旅費。
(九)曼陀羅――梵語マンダラの音譯。圓輪具足、壇、道場など譯す、宇宙法界のあらゆる萬德を具備したものの意。こゝはそれを圖にしたもの。剛界・胎藏界などの現剛曼陀羅なる繪幅をいふ。
(一〇)賣をしく――賣るのか惜しくて。
(一一)むつかしければ――面倒だから。
(一二)見通しの――事情を悉く通力で洞察してゐるの意。
(一三)春延の米――延米と云ひ、一時金を立替へて貰つて買込んでおく米である。その代り金を支拂ふ迄の間の利子を見込んで、普通の値段より高く買ふ。春延の米とは正月の米を右のやうに代金後拂ひとして買こむ事。
(一四)肝煎――周旋。
(一五)間銀――手數料。
(一六)借ける――貸しける。
(一七)むごき仕かけ――酷いやりかた。
(一八)年は何様にも云々――年はどうでも取る事が出來次第にとればよい。
(一九)我人――我も人も。
(二〇)手前――振廻しもなる――懐具合の都合も融通も何とか出來る。
(二一)我人のためになり――我にも人にもためになつて。
(二二)内にゐる仕出し――逃げかくれしないで、家に居られる新しい方法。
(二三)見合――見合せ、時機を計る。
(二四)かえり――歸り。

けるに、おもひのほかなる事は、我弟ながらかたちも人にすぐれて、(一)太夫子にもなるべきものと思ひしに、耳すこしちゐさくて、(二)本子には仕たてがたしと、うけとらねば是非なくつれて歸る。さて〳〵世間に人もあるものかな、十一二三の(三)若衆下地の子どもの、隨分々々色品よきを、毎日二十人三十人つれきたりて、(四)人置がさゝやくをきけば、牢人の子もあり、醫者の子も有、さのみ(五)筋目もいやしからぬ人なれども、ことしのくれを仕舞ひかね、奉公に出せしに、(六)十年切て、錢壹貫から三十目までにて、好なる(七)小共取ける、色の白き事、かしこき事、上方者にはとても及びがたし。(八)つかひ銀を損して歸ると語りける。又ひとりの男は、親の代より持傳へし、日蓮上人自筆の(九)曼陀羅を、かね〳〵宇治に望みの人ありて、金銀何程成とも申されしに、其ときは(一〇)賣おしく、當くれ手前さしつまり、はる〳〵うりはらひに參りしに、此人いかなるゆへにや、分別替りて淨土宗になられければ、此名號手にも取られず、思ひ入ちがひまして迷惑いたすなり。外に當所もなければ、宿へ歸りてから借錢乞にせまられ、其相手に(一一)なる事もむつかしければ、大坂よりすぐに高野參りの心ざしを、(一二)見通しの弘法大師、さぞおかしかるべし。又ひとりの男は、春(一三)のべの米を、京の織物屋中間へ、毎年のくれに借入の(一四)肝煎して、此間銀(一五)を取、定まつて緩(ゆる)々と節季を仕舞けるが、壹石につき四十五匁の相場の米を、三月晦日切にして五十八匁に定め、年々(一六)借けるに、諸職人内談して、壹石に十三匁の利銀三ヶ月に出す事は、いかにしてもむごき(一七)仕かけ、年(一八)は何やうにもとられ次第、此米借なと云合せ、折角鳥羽までつみのぼしたる米を、其まゝに預けて歸るといふ。船中の身のうへ物がたり、いづれを聞てもおもひのなきはひとりもなし。此舟の人々、我家ありながら、大晦日に内にゐらるゝはあるまじ。常とはかはり我人(一九)いそがしき中なれば、人の所へもたづねがたし。晝のうちは寺社の繪馬も見てくらしけるが、夜に入て行所なし。是によつて大分の借錢負たる人は、五節季の隱れ家に、心やすき妾をかくまへ置けるといふ。それは手前(二〇)もふりまはしもなる人の事、貧者のならぬ事ぞかし。宵から小うたきげんの人、定めて内證ゆるりと仕舞おかれしや、うら山しやとたづねければ、此おとこ大笑ひして、皆々は大晦日に我人(二一)のためになり、内にゐる仕出しをいまだ御ぞんじなさそふな。此二三年入替りといふ事を分別して、これにてらちをあけける。たがひにねんごろなる亭主入替りて留守をいたし、借錢乞のくるときを見合(二二)、お内義わたくしの銀は外の買がかりとは違ひました、亭主の腹はたをくり出してらちをあくるといへば、外のかけこひどもは、中々すまぬ事に思ひみなかえり(二四)ける。是を大つごも

（一）唐人船――一般の外國船をいふ。
（二）からもの商――唐物商船來品商。
（三）年中のたくはへ云々――一年中の生計を立てる貯へを、一度の貿易で用意しておく。
（四）物前――節季前。
（五）節季候――「節季候、自二今日一乞人笠上掛二貫首藥一、以二赤布巾一覆面、總出二兩眼一、二人或四人相共入二人家一、庭上徘レ躍乞二米錢一、是謂二節季候一、則告二節季歳暮之詞也。倭俗候字代二也字一用レ之、至二廿七八日一而止。」（日次紀事、十二月二十二日の條）
（六）伊勢暦――陰陽家土御門家の暦の稿本によつて伊勢神宮から配布した。
（七）左義長――三毬打の宛字であると云ふ。又どんど（和漢三才圖會、止卒止（ドンド）の條）「凡民間十五日朝敢二取家飾一藁松竹一集二一處一燒レ之、爲二止卒止一。」（廿八九日頃より寺木と稱して長さ一間餘の繩を適宜の間隔を設けて十二ケ所（閏年は十三ケ所）に結び注連飾の如き飾を施して之を臺所の壁にとりつけ、そ

りの入かはり男とて、近年の仕出しなり。いまだはしら〳〵にはしらぬ事にて、一盃くはせける。

四　長崎の餅柱

霜月晦日切に、唐人船（一）殘らず湊を出て行ば、長崎も次第に物さびしくなりぬ。しかし此所の家業は、よろづからもの（二）商なひの時分、銀まふけして、年中のたくはへ（三）一度に仕舞置、貧福の人相應に緩々とくらし、万事こまかに胸算用をせぬところなり。大かたの買物は當座ばらひにして、物まへ（四）の取やりもやかましき事なし。正月の近づくころも、酒常住のたのしみ、此津は身過の心やすき所なり。師走になりても人の足音いそがしからず。上方のごとく節季（五）候もこねば只伊勢（六）ごよみを見て春のちかづくをわきまへ、古代の掟をまもり、極月十三日に定まつて煤をはき、其竹を棟木にからげ、又の年のすゝはきまで置事ぞかし。餅は其家〳〵の嘉例にまかせてつきける。殊におかしきは、柱もちとて仕舞一うすを大こく柱（七）にうちつけ置、正月十五日の左義長のとき、これをあぶりて祝ひける。萬につけて所ならはしのおかしく、庭に幸（八）はひ木とて横わたしにして、鰤・いりこ・串貝・鴈・鳧・雉子、あるひは鹽鶴・赤いわし・昆布・たら・鱈・牛房・大

こん、三ケ日につかふほどの料理のもの、此木につりさげて、竈をにぎあはせ、ずでに大晦日の夜に入れば物もらひども（九）あかくして、土で作りしふびす大こく、荒鹽臺（九）にのせ、當年の恵方の海より潮が參つたと、家々をいはゐ（一〇）まはりけるは、船着第一の所ゆへぞかし。惣じてとし玉は、何國にてもかるひ事に極まりて、男は壹匁に五拾本づつの數（一一）あふぎ、女はせんじ茶を少づつ紙につゝみて、けいはくらしき（一二）事、こゝの總並（一三）なればおかしからず。兎角住なれしところ都の心ぞかし。されば諸國の商人、手まはしはやくして、わが古さとの正月にあふ事を、世のたのしみとせしに、京の細もとでなる糸商賣（一四）の人、此二十年も長崎にくだりして、万事人にすぐれてかしこく、京都を出たち（一五）喰て旅用意、歩行路船路にて、中々錢壹もんも外なる事につかはず、長崎に逗留の内、終に丸山の遊女町のぞかず、金山（一六）が居すがたのりこん（一七）なやら、花鳥が首すじの白いやら、夢にも見ずして、枕に算盤手日記（一八）をはなたず、何とぞして唐人のおろかなるをたらし、よきあきなひ事もがなと、あけくれこゝろにかくれども、今ほどの唐人は日本のことばをつかひおぼえ、持あます銀があるとも、家質（一九）より外に借す事なし。又は歩（一九）にあふ家かふ（二〇）ておくをよい事と合點しければ、各別（二一）なる事は唐さへなし。まして日本の智恵ぶくろは、世俗にかしこく、よい事ばかりはさせぬ

（一）鱈・鹽鱈・鹽鶴・鴈・鳧・雉子――鹽鶴は鹽鶴、鴈は鴈、鳧は鳧、雉子は雉子。
（二）昆布――海産物の類、及鹽節・大根・牛蒡等の乾物を垂れ、正月中家内の雑煮其他に使用し、或は來客馳走の設けに備ふ。（長崎市史風俗篇）
（九）荒鹽臺――末考。荒鹽は粗鹽。粗製の食鹽。下に「を」字を略したのである。或は鹽臺は四方臺の宛字かもしれず。
（一〇）いはゐ――祝。
（一一）扇――數は一種の埃頭語で、すべて數の多い粗末なものに冠する。
（一二）けいはく――輕薄。
（一三）總並――一般にすること。
（一四）糸商賣――糸は生糸のこと。
（一五）出たち――旅に出發する際の食事。「出立」は朝旅宿を立つ時の食をいふ。
（一六）金山――花鳥――共に丸山、遊女の名。
（一七）りこん――利根、氣のきいた。
（一八）手日記――手帳。
（一九）歩に――屋賃。今ふ家――家屋代に當る金の方がその家の利廻よりも割合のよい家。
（二〇）かふて――買うて。
（二一）各別――別なる事――格別に利を得る事。

なり。利發にて分限にならば此男なれ共、ときの運きたらず、仕合がてつばはねば是非なし。おなじころより長崎にくだり、同じ糸商賣する京の人、大分の手前者となり、今は手代をくだして其身は都に安樂にして、しかも物見花見女郎狂ひも相應にして、分限なる人數しらず。これはいかなる事にてかくは成けるぞとたづねしに、それはみな商人心といふものなり。子細は世間を見合、來年はかならずあがるべきものを考へ、ふんごんで買置の思ひ入あふ事より、拍子よく金銀かさむ事ぞかし。こゝのふたつものがけせずしては一生替る事なし。此男は長崎の買もの京うりの算用して、すこしも違ひなく、跡先ふまへてたしかなる事ばかりにかゝれば、算用の外の利を得たる事一とせもなくて、皆銀の利にかきあげ、人奉公して氣をこらしける。毎年大晦日を橋本旅籠屋に定宿こしらへ置、爰にて年をとるが、我等が家の嘉例といふは、大拂の借錢すましかねるゆへなり。同じくは吉例やめて、京の我宿にて年とるやうにいたしきものぞかし。此男つら〳〵世を見合、尤こまへに怪我はなけれども、皆人沙汰せらるゝ通り利を得る事なし　當年は何によらず、我商ひの外なる事に一思案して、銀もうけせずばあるべからずと、心中極めて長崎にくだり、さま〴〵分別せしに、銀でかねもふくる事ばかりにて、只とる樣な事はひとつもなし。とかく來春の小芝居、何ぞ替つたみせものもがな、京大坂の細工人も、手をつくして色々仕出し、何かめづらしからねば、からものにもしも有べしとせんさくして、大かたの物にては錢は取がたしと吟味するに、定まつてよいものは、今まで見せぬ蟠龍の子、又火喰鳥など、いまだ見せた事なし。これは長崎にも稀なれば、自由に手に入がたし。ひそかに唐人をかたらひ、何と異國にかはりたるものはないかといへば、鳳凰も雷公も聞たばかりにて見た事なし。とかく伽羅も人參も日本に稀なるものは唐にもすなくし。ことに銀たいせつとおもへばこそ、百千万里の風波をしのぎ、命を銀と替る商ひにのぼりけるにて、世に銀ほど人のほしきものはないと、合點いたされよとかたりける。これ尤とおもひ、身のかせぎに油斷なく、色々のわたり鳥調へて、都にのぼりしに、みな見せて仕舞し跡なれば、ひとつも錢に成がたく、人の見付たる孔雀はまだもすたらず、漸本銀取返しぬ。是を思ふにしれた事がよしとぞ。

(一)利發にて云々――利發なだけで金持になるものなら。
(二)安樂にして――安樂に暮してゐて。
(三)ふんごんで――踏ん込んで、はまりこんで。
(四)思入れ――豫想。
(五)二つ物がけ――甲に非ざれば乙、乙に非ざれば甲の義で、一か八か、のるか、そるかなどの意に用ひる。
(六)踏先ふまへて――十分見込をつけてから。
(七)橋本――淀の南方八幡の附近の地名。下に「の」字を脱したのであらう。
(八)大拂――大晦日の支拂
(九)小商――小規模の商。
(一〇)我商ひの外なる事――專門の糸商以外で。
(一一)蟠龍――角の無い龍をいふ。本草綱目。但しこれは熱帶產の大蛇をいふのであらう。
(一二)火喰鳥――「食火雞按阿蘭陀人貢二咬嚼巴(ジヤガタラ)國火雞一、彼人呼二加豆和留(カヅワル)肥州長崎或呑レ之、形略類レ雞而大高三四尺、能食二火燼及小石。其糞乃炭或石也」(和漢三才圖會)
(一三)わたり鳥――舶載して來た鳥。
(一四)本銀――元金。

胸算用　大晦日は一日千金　巻五

目　録

一　つまりての夜市
　文反古は恥の中々
　いにしへに替る人の風俗
二　才覺の軸すだれ
　親の目にはかしこし
　江戸廻しの油樽
三　平太郎殿
　かしましのお祖母を返せ
　一夜にさま〳〵の世の噂
四　長久の江戸棚
　きれめの時があきなひ
　春の色めく家並の松

一　つまりての夜市

萬事の商(一)なひなふて、世間がつまつたといふは、毎年の事なり。たとへば十匁に相場極まりて、賣買いたせし物を、九匁八分にうれば、時の間に千貫目が物も買手有、又十匁に買ば、即座に貳千貫目がものも賣手有、是をおもふに大(二)場にすめる商人の心だま(三)各別に廣し。賣も買もみな人々の胸ざんようぞかし。世になきものは銀といふは、よき所を見ぬゆへなり。世にあるものは銀なり。其子細は諸國ともに三十年此かた世界のはんじやう、目に見えてしれたり。昔わら葺の所は板びさし(四)と成、月もるといへば不破の關屋も、今はかはら葺に白土の軒も見え、内ぐら(五)庭藏大座敷のふすまにも、砂粉(六)はひかりを嫌ひ、泥引(七)にして墨繪の物ずき、都にかはる所なし。又灘(七)の鹽やきはつげの小ぐしもさゝで と誦しに、かゝる浦人も今は小袖(八)ごのみして、上方にはやるといふ程の事を、聞あはせ見おぼえ、千本松のすそ形(九)もふもし、當年の仕出しは、夕日笹(一〇)のもよふとぞと、いまだ京大坂にもはし〳〵(一一)はしらずして、中がたのしのぶ小桐の衣裝

(一)商なひなふて――商無うて。
(二)大場――大場所、大都會。
(三)心だま――心。
(四)板廂となり云々――「人住まぬ不破の關屋の板廂荒れにしあとはただ秋の風」(新古今集、後京極良經)
(五)内ぐら――内藏は住宅と軒つゞきの藏。
(六)泥引――金泥を引く。
(七)灘の鹽燒は云々――「芦の屋の灘の鹽燒暇なみ黄楊の小櫛もさゝず來にける」(伊勢物語)
(八)小袖ごのみ――小袖に物好みする。
(九)裾形――裾模樣。
(一〇)笹のもよふ――笹の模樣。もよう。
(一一)はし〳〵――田舍。

きるうちに、はやいなかに京ぞめはしやれたり。むかしもようの肩さきから、染込の郭公の二字、又はぶどうだなの所々に、つるはを赤ぬの染入おかし。見し時は格別ぞかし、何國に居ても、金銀さへもちければ、自由のならぬといふ事なし。ことさら貧者の大節季、何と分別しても濟がたし。ないといふてから錢が壹文おかぬ棚をまぶりてから出所なし。これを思へば年中始末をすべし。日に壹文づつ貰着にてのばしければ、壹年に三百六十文、十年に三貫六百なり。此心から算用すれば、茶・燒木・味噌・鹽万事に何ほどの貧家にても、一年に三十六匁の違ひ有。十年に三百六十目、是に利をもりかけて見るときは、三十年につもれば八貫目餘の銀高なり。惣じてすこしの事とて、不斷常住の事には氣をつけて見るべし。ことにむかしより食酒を呑ものは、びんぼうの花ざかりといふ事有。爰に火ふくちからもなき、其日過の釘鍛冶、お火燒に稲荷どのへ進ぜたるお神酒德利のちいさきに、八文づつがはした酒日に三度づつ買ぬといふ事なく、四十五年此かた呑くらしける。此酒の高、毎日小半づつにして四十石五斗なり。毎日二十四文の錢、つもり〳〵十二匁錢にして銀に直し、四貫八百六十目なり。此男下戸ならば、是ほどに貧はせまじきものと笑ふ人あれば、此鍛冶我家おさめたる貌つきして、世中に下戸のたてたる藏もなしとうたひて、

(一)おかし。見し時は――この所脱字あるか。又「實際そんな衣裳を見ると、格別立派である」との意か。
(二)置かぬ棚をまぶる――諺。まぶるはまもるに同じく、見守ること。
(三)食酒――食事の時に酒を飲む事。
(四)火吹く力もなき――貧窮の甚だしい喩にいふ諺。鍛冶屋の緣語にもなる。
(五)お火燒――前出、稲荷社の十一月八日。
(六)小半――四分の一。即ち二合半。
(七)四十石五斗――一年三百六十日に平均した計算。
(八)十二匁錢――錢一貫匁の相場の意。正味九百六十文が銀十二匁の意。
(九)我家おさめたる貌つき――我家の經濟を仕了せてゐるやうな顏をして。
(一〇)世中に――世の中に。
(一一)下戸の建てたる藏もなし――諺。

また酒をぞ呑ける。既に其年の大晦日に、あらましに正月の用意をして、ほうらいは餝りながら、酒小半もとむる錢なくて、ことのたらざる宿さびしく、四十五年此かた一日も酒のまぬ事のなきに、日もこそあれ、元日に酒なくては年をこしたる甲斐はなしなど、夫婦さま〳〵内談するに、酒手の借どころなく、質種もなく、やう〳〵思案めくらして、過つるあつさをしのぎしあみ笠、いまだ青々としてそこねもやらずありけるを、これ來年の夏までは久しき事なり。たからは身のさしあはせ、これをうりて當座の用にたつるより外なしと、すでに立さかりたる古道具の夜市にまぎれて、世間のやうすを見るに、大かた行所なき借錢負の貌つきぞかし、宿の亭主は賣口錢一割のきほひにかゝつてふり出しける。こよひになつてうるほどのものよく〳〵さしつまつて皆あはれなり。十二三なる娘の子の、正月布子と見えて、もえぎ色に染かのこの洲崎、うらはうす紅にして、中綿もおしまず入て、いまだ袖口もくけずして、これを望はないか〳〵とせりければ、六匁三分五りんづつに落ける。よもや裏ばかりも出來まじ。其次に丹後の細口の鰤を、片身賣に出しける。これもあまらず二匁二分五りんにうれける。其跡から二疊釣の蚊屋出して、八匁より二十三匁五分までせりのぼしけるに、うらずして置ける。是は商ひならぬはづなり、蚊屋大晦日

(一二)寶は身の差合せ――諺。寶は持合せてゐれば身を救ふ料となるの意。
(一三)賣口錢云々――賣價一割の口錢を得られるために威勢よくせり賣を始めたの意。
(一四)洲崎――洲崎形の模様に鹿子を染め出したもの
(一五)蚊屋出して――蚊帳出して。

（一）御免筆――御家流（オイヘリウ）伏見天皇の御子青蓮院尊圓法親王に創まる。その書法を免許されてゐるをいふ。

（二）かゝぬもの――字と揮と双方の「かく」に通ず。

（三）隔て――陶器の破損を防ぐため、重ねた中間に入れる紙片・布片などをいふ。

（四）南京――南京燒。南京地方から舶來した陶器。

（五）無心――金錢を嘆願して乞ふ。

（六）とつこ――獨鈷。

（七）れい――鈴。

（八）こかみ――小紙か。不詳。

迄質におかず持たる身代なれば、たのもしき所ありと笑らひける。そののち十枚つぎの蠟地の紙に、御免筆の名印までしるしたるを賣けるに、一分からやう〳〵五分まで、ねだん付ければ、それはいづれもあまりなる事、紙ばかりが三匁が物が御座るといへば、いかにも〳〵何もかかずにあれば三匁が紙なり、無用の手本書て五分にも高し、たとへいかなる人の筆にもせよ、是をふんどしといふ手じやといふ。それはいかなる事ぞといへば、今の世に男と生れ、是程かゝぬものはないによつて、これをふんどし手とぞ笑ひける。扨又、これはわれもの〳〵と大事にかけて出しけるは、南京のさしみ皿十枚、其へだてに入たる京大坂の名ある女郎の文がらなり。これはといそがしきによみて見るに、皆十二月の文どもは、いとしかはいのおもひをさつて、近ごろ申かね候へどもと無心の文ばかりなり。戀も無常も、銀なくては成がたし。此皿のぬしも定めて大じんといはれて、此ふみ一つが、銀一枚づつにもあたるべし。然れば皿よりは、其反古に大分のねうちありとて、おの〳〵大わらひしける。其跡に不動一體・とつこ・花さら・れい・錫杖・こまの檀の仕廻もの、さて〳〵此不動も、我身上の富貴は祈られぬ物よと沙汰しける。時にくだんのあみ笠出せば、其座に賣ぬしの居るもかなはす、あはれや〳〵此笠、此夏かきるためとて、ふるきこかみにて紙ぶくろして入て、さても始末なやつがうり物ぞと、三文からふり出して十四文に賣て、此錢うけると時、是は此五月に三十六文に買て、何々のせいもん、庚申參りに只一度かづき、其まゝといひけるも、其身の聡のおかし。其夜の仕舞に、歳暮の禮扇の箱二十五、たばこの入し箱ひとつで、二匁七分に買て歸りしに、たばこ箱の下に小判三兩入置きしは、思ひもよらぬ仕合なり。

（九）何何の誓文――「誓つて虚言は言はぬ」といふ程の意。

（一〇）庚申參――庚申青面を祭つてある庚申堂又は庚申塚などに參詣すること。

（一一）宵の年――年越の日の宵。

（一二）五節句切――節句の日が節季になつてゐるからその切に諸事の立直し（整理）をする。

（一三）帳綴ぢ――正月初旬に諸商人が商始めとしてまづ一年中用ひる帳簿を綴ぢて祝ふ事。故例は正月四日（日次紀事）

（一四）棚下し――「商賣の輩蓄へ置きたる物の員數を多少分際何によらず、歳首に改むる事なり。これ今年の賣買する財貨を今市店より取卸すの義なり。」（滑稽雜談）

（一五）取まはし――處置。

（一六）出替り――昔は三月四日が奉公人の出代り時であつた。

二　才覺のぢくすだれ

宵の年のせつなき事をわすれがたく、來年からは三ヶ日過ぎたらば、四日より商賣に油斷せず、万事を當座ばらひにして、錢のないとき肴も買ぬがよし、諸事を五節供切と胸算用を極め、借錢乞のこはい心をすぐに正月に成ける。ことしは今までの嘉例をいはゐ替るとて、十日の帳とぢを二日に取こし、五日にせし棚おろしを三日にして、俄かに身の取まはしかしこく、とかく宿を出るからに、思ひよらぬ銀をもつかひ、物見もの參りにさそはれ、大事の日をむなしうくらす事、無分別とおもひ定めて、商賣の事より外には人とものをもいはず、毎日心算用して、諸事に付て利を得る事のすくなき世なれば、内證に物のいらざるしあん第一と心得て、三月の出替りより飯たきを置ず、女房にまへだ

れさせて、我も畫は旦那といはれてみせにゐて、夜は門の戸をしめ置て、でつちがふみ碓を助てとらせ、足も大かたは汲たての水で洗ふほどに、氣を付けれ共、これかやあをちびんぼうといふなるへし。又それほどにあきなひ事なくていよ〳〵日なたに氷のごとし。何としても一升入柄杓へは、一升よりはいらずと、むかしの人の申傳えし。されは熊野びくにが、身の一大事の地ごく極樂の繪圖を拜ませ、又は息の根のつゞくほど、はやりうたをうたひ勸進すれども、腰にさしたる一升びしやくに、一盃はもらひかねける。さる程に、同し後世にも、諸人の心ざし大きに違ひ有事哉。冬とし南都大佛建立のためとて、龍松院たち出給ひ、勸進修行にめぐらせられ、信心なき人は進め給はす、無言にてまはり給ひ、我心ざしあるばかりを請たまふも、一升びしやくなるに、一歩に一貫、十歩に十貫、あるひは金銀をなげ入れ、釋迦も錢ほど光らせ給ふ。今佛法の畫ぞかし。是は各別の寄進とて、八宗ともに奉伽の心ざし、殊勝さ限りなかりき。すでに町はづれの小家がちなる所までも、長者の万貫貧者の壹文、これもつもれば一本拾二貫目の丸柱ともなる事ぞかし。是おもふに世はそれ〳〵に氣を付て、すこしの事にてもたくはへをすべし。分限に成けるものは其生れつき各別なり。ある人のむすこ、九歳より十二のとしのくれまで、手習につかはしけるに、其間の筆のぢくをあつめ、其外人のすてたるをも取ためて、程なく十三の春、我手細工にしてぢくすだれをこしらへ、壹つを一匁五分づつの三つまで賣拂ひ、はじめて銀四匁五分もうけし事、我子ながら只ものにあらずと、親の身にして嬉しさのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊此事をよしとは譽給はず、我此年まで數百人子共を預かりて、指南いたして見およびしに、其方の一子のごとく、氣のはたらき過たる子共の、末に分限に世をくらしたるためしなし。又乞食するほどの身躰にもならぬもの、中分より下の渡世をするもの也。かゝる事にはさま〳〵の子細ある事なり。そなたの子斗をかしこきやうにおぼしめすな、それよりは手まはしのかしこき子共有。我當番の日はいふにおよばず、人の番の日もはうきとり〳〵座敷はきて、あまたの子共が毎日使捨たる反古のまろめたるを、一枚々々しはのばして、日毎に屏風屋へうりて歸るもあり。是は筆の軸をすだれのおもひつきよりは、當分の用に立事ながら、これもよろしからず。又ある子は、紙の餘慶持來りて、紙つかひすごして不自由なる子共に、一日一倍まましの利にて是をかし、年中につもりての德、何ほどといふ限りもなし。これらはみなそれ〳〵の親のせちがしこき氣を見ならひ、自然と出るおのれ〳〵が智恵にはあらず。その中にもひとりの子は、父母の朝

(一)あをちビ貧乏――扇で扇ぎ立てるやうに貧乏がまとひついて離れぬこと。
(二)一升入る柄杓云々――人々の器量にそれぞれ分限あるをいふ諺。
(三)熊野比丘尼――熊野神社から出す牛王の護符を賣歩いた比丘尼。後には一種の私娼となつた。
(四)龍松院――東大寺龍松院の公慶上人。貞享二年勅許を得て大佛殿復興のため諸國を勸進して廻つた。
(五)釋迦も錢程光る――諺
(六)八宗――諸の宗派の意。元來は、倶舍・成實・律・法相・三論・華嚴・天臺・眞言を八宗と云ふ。
(七)奉伽――奉加。寺社のために金品を奉ること。
(八)長者の一萬云々――「長者の萬燈貧者の一燈」の諺による。
(九)各別――格別。
(一〇)師の坊――手習師匠
(一一)指南――敎へること。指南車(支那古代の羅針盤、十八史略、周)の故事より出づ。
(一二)子細――理由。
(一三)子斗――子ばかり。
(一四)當分の用――すぐ金になる。
(一五)餘慶――餘計。
(一六)一日一倍まし――一枚貸せば明日返す時は二枚にしてうけとり、一日遲れる毎にその倍數をとる。
(一七)せちがしこき――理財にこまかい事。

夕仰せられしは外の事なく、手習を精に入よ、成人しての其身のためになる事との言葉、反古には成がたしと、明くれ讀書に油斷なく、後には兄弟子どもすぐれて能書に成ぬ。此心からは行末分限になる所見えたり。其子細は一筋に家業かせぐ故なり。惣じて親より仕つゞきたる家職の外に、商賣を替て仕つゞきたるは稀也。手習子どもも、おのれが役目の手を書事は外になし。若年の時よりすゝどく(一)、無用の欲心なり。それゆへ第一(二)の手はかゝざることのあさまし。その子なれども、さやうの心入、よき事とはいひがたし。とかく少年の時は花をむしり紙鳶をのぼし、智惠付時に身をもちかためるこそ、道の常なれ。七十になるものゝ申せし事、ゆくすゑを見給へと、いひ置れし師の坊の言葉にたがはず、此者共我世(四)をわたる時節になつて、さま〳〵にかせぐほどなりさがりて軸すだれせしものは、冬日和の道のために、草履のうらに木をつけてはく事仕出しけれども、これもつゞきて世にはやらず。また紙くづあつめしものは、ちやんぬりのかはらけ仕出して世にうれども、大晦日にもともし火ひとつの身だいなり、又手ならひばかりに勢を入れたるものは、物ごとうとく見ゑけるが、自然と大氣に生れつき、江戸まはしのあぶら、寒中にもこほらぬ事を分別仕出し、樽に胡椒一粒づつ入る事にて、大分利を得て、年をとりけるに、おなじお

(一)すゝどく――機敏で。
(二)第一の手は云々――第一であるべき手習を專心にしないのは道にはづれてゐる。
(三)其子なれども――そなたの子ではあるが。
(四)我世をわたる――自分が一家を立てる。
(五)ちやん墜――油が漏らぬやうに瀝青(チヤン)を土器に墜つたのである。
(六)とも火一つの身代――貧乏世帶、燈火と油土器とは緣語。
(七)物ごとうとく――この「うとく」は悠々たるさま。
(八)おなじおもひつきにても――「同じ思ひ付きにても」で、兩方とも油に關する考案であるから、かういつたのである。

もひつきにて油がはらけと油樽と、人の智惠ほどちがふたる物はなかりし。

三　平太郎殿

古人も世帶(九)佛法と申されし事、今以て其通り也。毎年節分の夜は、門徒寺に定まつて、平太郎殿(一一)の事讃談(一二)せらるゝなり。聞たびに替らぬ事ながら、殊勝なる義なれば、老若男女ともに參詣多し。一とせ大晦日に節分ありて、掛乞厄(一三)はらひ、天秤のひゞき、大豆(まめ)うつ音、まことにくらがりに鬼つなぐとは今宵なるべし、おそろし。さて道場(一四)には太鼓おとづれて、佛前に御あかしあげて、參りの同行を見合けるに、初夜の鐘をつくまでに、やう〳〵參詣三人ならではなかりし、亭坊(一五)つとめ(一六)過て、しばらく世間の事どもをかんがへ、されば今晩一年中のさだめなるゆへ、それ〳〵にいとまなく、參りの衆もないと見ゑました。然れども子孫に世(七)を渡し、隙のあきたるお祖母たちは、けふとても何の用あるまじ。佛のおむかひ船が來たらば、それにのるまいといふ事はいはれまじ。おろかなる人ごころふびんやな。あさましやな。さりながら只三人にきかせまして さんだんするも益なし。いかに佛の事にても、爰が胸算用で御座る。中々燈明の油錢も御座らねば、せつかく日をたゝいても世の耗なり、面々に賽錢取返し

(九)世帶佛法――「世帶佛法腹念佛」とつゞけても云ふ。佛法も念佛もつまり衣食の爲だと云ふ意の諺。
(一〇)門徒寺――眞宗寺。
(一一)平太郎殿――常陸の百姓で、親鸞上人に歸依した事が、親鸞傳說として傳へられてゐる。
(一二)讃談――說教。
(一三)暗がりに鬼繫ぐ――奧底の知らぬ氣味の惡い喩にいふ諺。何か隱れてゐるかわからぬ。
(一四)道場――佛道修行の場。こゝは佛像を安置し說教する所。(たとへ住職のゐない所でも道場といふ)
(一五)亭坊――寺のあるじ住職。
(一六)つとめ――勤行。
(一七)世を渡し――身代をゆづること。

(一)下向――歸宅。寺から歸る故にかくいふ。
(二)からまされ――氣をとられ。
(三)各きとく千萬――皆縁の信心は奇特の至だ。
(四)ふるい事ながら――これは大晦日にいろ〳〵衆略を凝らす事を指す。
(五)御祖母返せは――「何々返せ」は迷子をさがす時の呼聲。こゝは「御祖母返せ」と云ふは」の意。
(六)我等が仕出し――私の新案。
(七)ふしよう――不祥。ことは不運・因果の意。
(八)太夫殿――伊勢の御師のこと(前出)

て下向(一)して給はれ、皆世わたりの事共にからまされ(二)、參詣もなき所に、各きど(三)く千万。爰を以信心、如來もいそがしき中に足をはこび給ふを、そんにはせさせ給はぬ也。金の大帳に付おかせられて、未來にて急度算用し給ふなれば、かならず〳〵捨たるとおぼしめすな。佛は慈悲第一、すこしもいつはりは御座らぬ、たのもしうおぼしめせ。時にひとりの祖母泪をこぼし、只今の有がたひ事をうけたまはりまして、扨も〳〵我心底の恥かしう御座ります。今夜の事信心にて參りましたでは御座らぬ。ひとりあるせがれめが、つね〳〵身過に油斷いたしまして、借錢に乞たてられまして、節季〳〵にさま〳〵作り事申してのがれまし(四)たが、此節季の身ぬけ、何とも分別あたはず、私には道場へまいれ、其跡にて見えぬとなげき出し、近所の衆をたのみ、太鼓かねをたゝきたづね、これにて夜をあかして濟すべし。ふるい事ながら、大晦日の夜の御祖母(五)を返せは我等(六)が仕出しと思案して、世のふしよう(七)なればとて、あたりの衆におもはぬやつかいかくる事、是大きなる罪とぞなげきける。又一人は生國は伊勢のものなるが、人の縁ほどしれぬものはなし、爰許に親類とてもなきに、大坂旦那廻りの太夫(八)どのにやとはれ、荷持をいたせし時、此所の繁昌見まして何をしたればとて、ふたり三人の口を喰事、心やすき所と見たて、幸はひ大和がよひして小

(九)とも過ぎ――夫婦共稼ぎ。
(一〇)我も耳がある程に――お前も耳がある以上は。
(一一)女の手業――女のなすべき仕事。
(一二)食――飯、めし。
(一三)黄柄茶――黄枯茶。淡い藍色を帶びた黄色。
(一四)名ごりじやぞ――名ごりぢやぞ。片身の品、思出の品だぞ。
(一五)所をされば――所を去れば。「去れば」は「去りたれば」の意。
(一六)手ぶり――手ぶら、から手。
(一七)神のおしき――神の折敷、三方。
(一八)山草――竈桑。
(一九)引上ぐる神――諺に「捨つる神あれば引上ぐる神あり」

間物商ふ人の死跡に、ふたつになる男の子あつて、かゝも色じろにたくましければ、とも過(九)にして世をわたり、行末は其子めにかゝる事をたのもしくおもひ入聟していまだ半年もたゝぬに、道をしらぬかよひ商ひに、すこしの錢もみなになし、極月はじめごろより何がなと渡世しあんするうちに、女は子を愛して我も耳(一〇)があるほどに、人のいふ事をよくきけ、小男でも本のとゝさまは利發にあつたとおもへ、女の手わざの食(一一)までたきて、女房は宵からねさせ置て、我は夜明がたまでわらんじをつくり、われは着ずに女房子どもには正月布子をこしらへ、此黄(一三)がらちやのきるものも其時の名ごり(一四)じやぞ。何に付てもなじみほどよきものはなし。もとのとゝさまこひしやと、なけ〳〵といふときは、さりとては入聟口おしく、勘忍ならぬ所なれども、是非なく日をかさね、我ふるさとにすこし貸置たる銀子もあれば、これを取あつめて此節季仕舞と、はる〳〵くだりける甲斐もなく、其ものどもはみな所をされ(一五)ば、又手ぶり(一六)にてやう〳〵けふの夕食前に宿へ歸りしに、何とか才覺いたしける、餅もつき薪も買、神のお(一七)しきに山くさ(一八)の色めきければ、世はなげくまじ、又引あぐる(一九)神も有て、留守のうちに手廻しよく、内證仕舞置けるとうれしく、無事で歸りたるいとへば、女房もいつよりは機嫌よくして、先足の湯を取もあへず、鰯鱠を片皿に、赤いは

しの燒ものにて心よく膳をすへける程に、箸とつて喰かゝる時、伊勢の銀ども(一)は取てござつたかといふ。不仕合いふを聞もあへず、そなたは手ぶりでようも〳〵戻られた事じや。此米は壹斗を二月の晦日切に約束して、われらが身を手(二)形に書入て、九拾五匁の算用にして借ましたよ。世間は四拾目の米喰とき九十五匁の米を喰事、そなたのどんなるゆへにかゝる仕合。持て御座つたものはふんどし一筋、何もそんのまいらぬ事、夜に入ば闇うなります、足もとのあかいうちに出て御座れと、喰かゝつた膳をとつて追出す時、近所のもの共あつまりて、是は御亭さまの、めいわくながら入聟のふしやうに出ていなしやるが男の本意じや。又よい所も御座ろと、口々に追出しければ、あまりかなしくて泣れもせず、明日は國元に歸る分別いたしましたが、今夜一夜のあかし所なく、我らは法華宗(四)なれ共、是へ參りましたと身のさんげする事、哀れにも又おかし(五)。又ひとりの男は大わらひして、我身の事はとかふ申がたし。宿(六)にいますれば方々よりいけておかぬ身なり、どなたへ申して錢十もんかり所はなし、酒は呑たし身はさむし、色々(七)無分別年を越べき才覺なし。近ごろあさましきおもひつきなから、こよひは道場に平太郎殿の讃談參り群集すべし、其草履雪踏を盗み取て酒の代にせんと心がけしに、こゝにかざらずいづかたの道場にも人ぎれなく、

(一)燒物――魚鳥の肉を炙り燒いたもの。

(二)手形――證文。「身を書入れる」。返濟し得ぬ時奉公するの規約である。

(三)足元の明い中に――諺にかけていつたのである。

(四)法華宗――法華宗の者は特に頑固であるから、この場合、よく〳〵と思はせる。

(五)おかし――をかし。

(六)いますれば――居ますれば。

(七)色々無分別――「いろいろ無分別して、今は」と補つて見る。

(八)人ぎれ――人影。

ほとけの目をぬく事も成がたしと、身のうへをかたりて泪をこぼしける。亭坊も横手をうつて、さても〳〵身の貧からは、さま〳〵惡心もおこるものぞかし。各もみな佛體なれども、是非もなきうき世ぞと、つら〳〵人界を觀じ給ふうちに、女けはし(九)くはしり來て、姪御さま只今安々と御平產あそばしました、御しらせ申ますといふ。程なく其跡より、箱屋の九藏、今のさきに掛こひと言分(一〇)いたされまして、首しめて死れまして御ざる。夜半過に葬禮いたします。御くろうながら野墓(一一)へ御出たのみますといふて來る。取まぜてかしましき中に、仕たてもの屋より、縫に下されました白小袖を、ちよろりと盗まれました。せんさくいたしまして出ませずば、銀子(一二)たてまして、御そんはかけますまいとことはり申に來る。東隣から、御無心なれども今晩俄かに井戸がつぶれました。正月五ヶ日水がもらいましたいと申きたる。其跡から一旦那(一三)のひとり子、金銀をつかひすごし、首尾さん〳〵にて立のくを、母親の才覺にて御坊さまへ、正月四日まで預けにつかはしける。是もいやとはいはれず、うき世に住から師走坊主(一四)も隙のない事ぞかし。

四　長久の江戸棚

(九)けはしく――あわただしく、烈しく、急に、などの意。

(一〇)言分――喧嘩口論。

(一一)野墓――野中の墓、又は火葬場。

(一二)銀子立てまして――辨償しまして。

(一三)一旦那――信徒中第一の主要な人。

(一四)住むから――住む以上は。

(一五)師走坊主――忙しい時にも拘らず閑なものの喩に云ふ。

（一）岡附――貨物を陸路によつて運びつけること。

（二）玉ぶり――男兒の正月の玩具として用ひられるもので、槌につけた紐を振り又は柄持つて毬打（ギチヤウ）の如く玉を打つて遊ぶもの。

（三）はま弓――破魔弓、正月の遊戯に用ふ（前出）

（四）半切――半切桶。底の淺い盥狀の桶をいふ。

（五）瀬戸物町――日本橋に近く、魚河岸の北、この邊り鳥類の賣店が多かつた。

（六）屋敷模様――武家屋敷好みの模様をいふのであらう。

（七）明らかう――「明らかに」の彫損じであらう。

天下泰平、國土萬人、江戸商ひを心がけ、其道々の棚出して、諸國より荷物船路岡（一）着の馬かた、毎日數万駄の問屋づき、こゝを見れば世界は金銀たくさんなるものなるに、これをもうくる才覺のならぬは、諸商人の生れて口おしき事ぞかし。さるほどに十二月十五日より、通り町のはんじやう、世に寶の市とは爰の事なるべし。常のうりもの棚は捨置て、正月のけしき、京羽子板、玉ぶり（二）、細工に金銀をちりばめ、はま弓（三）一挺を、小判二両などにも買人ありけるは、諸大名の子息にかぎらず、町人までも萬に大氣なるゆへぞかし。町すじに中棚を出して。商ひにいとまなく、錢は水のごとくながれ、白かねは雪のごとし。富士の山かげゆたかに、日本橋の人足、百千万の車のとゞろくに開なしたり。船町の魚市、毎朝の賣帳、四方の海ながら、浦々に鱗（うろこ）のたねも有事よと沙汰し侍る。神田須田町の八百屋もの、毎日の大根、里馬に付つきて數万駄見えけるは、とかく畠のありくがごとし。半切（四）にうつしならべたる唐がらしは、秋ふかき龍田山をむさし野に見るに似たり。瀬戸物町（五）麹町の雁鴨、さながら雲の黒きを地にはへたるがごとし。本町の呉服もの、五色の京染、やしき模（六）やうのちらしかた、四季一度にながめ、すがたのはなの色香ぞかし。傳馬町のつみ綿、みよしの丶雪のあけぼのの山々、夕べにはちやうちんつらなり、道明（七）らかう、

（八）代々――橙。

（九）錢をよむ――錢勘定する。

（一〇）りんだめ――厘秤。秤の中厘毛の小量をはかるべきものをいふ。盤等子（レイテング）の最も小さいものである。

（一一）世は廻り持――諺。

（一二）常盤橋――常盤は松の緑語。

大晦日の夜に入て、一夜千金家々の大商ひ、殊に足袋雪踏は諸職人万事買物のおさめにして、夜の明がたに調へに來たり、一とせ江戸中の棚に、せきだが一足、たびか片足ない事有。幾万人はけばとて、かゝる事は日本第一、人のあつまり所なれば也。宵のほどは一足七八分のせきだ、夜半過には壹匁二三分となり、夜明がたには一足貳匁五分になれ共、買人ばかりにしてうるものなし　一とせ掛小鯛二枚十八枚匁宛せし事も有。代々（八）ひとつ金子貳歩づつせし、高ふて買ぬといふ事なし。京大坂にては相場ちがひのものは、たとへ祝儀のものにしてから、中々調ふべき人心にはあらず。爰を以て大名氣とはいへり。京大坂に住なれて、心のちいさきものも、其氣になつて錢（九）をよむといふ事なし。小判を（一〇）りんだめにてかける事なし。かるきをとれば又其まゝにさきへわたし、世（一一）は廻り持のたからなれば、ひとりとして吟味する事にはあらず。十七八日までに、上方へ銀飛脚の宿を見しに、大分の金銀色もかはらず、上りてはくだり、一とせに道中を幾たびか、金銀ほど世に辛勞いたすものは外になし。是ほどに世界に多きものなれども、小判一兩もたずに江戸にも年をとるもの有、されば歳暮の御使者として、太刀目錄・御小袖・樽さかな・箱入のらうそく、何を見ても萬代の春めきて、町並の門松、これぞちとせ山の山口、なを常盤（一二）橋の朝日かげ、豊

かに靜かに萬民の身に照そひ、くもらぬ春にあへり。

元祿五壬申年初陽吉日

書肆　京二條通堺町　上村平左衛門
江戸青物町　萬屋清兵衛
大坂梶木町　伊丹屋太郎右衛門
板行

織

留

解題

元祿七年の刊行で、大本六卷六冊本、文の行數十二行。柱の文字は「世の人心」とある。

序に難波西鶴と署名し松壽の印章がある。

題簽は「繪入織留」また「西鶴おりどめ」とあり、その下に小書して卷一・卷二には「本朝町人鑑」、卷三以下には「世の人心」とある。內題も卷一・卷二は「西鶴織留本朝町人鑑」、卷三以下は「西鶴織留世の人心」とある。そのうち卷三と卷五との文字は「世農人心」である。挿繪は蒔繪師源三郎と云ふ。

序があつて西鶴と署名し、その下に松壽の印章を捺してあるが、これは彼の筆ではあるまい。門下の北條團水の序もある。その日附は元祿七年戊卯月上旬と見える。

奥附は

元祿七甲戌年三月吉日

江戸　万屋清兵衛
大阪　雁金屋庄兵衛
京　上村屋平左衛門

再版本の奥附は

正德二壬辰年五月吉日

大阪書林　岩岡屋德兵衛
油屋　大塚屋權兵衛
油屋　與兵衛　開板

團水の序によれば前作「日本永代藏」に「本朝町人鑑」「世の人心」を合せて三部の書と名づくべき意圖が作者にあつたとくふ。「商職人に関するに日用世をわたるたつきに心を得べき稱鑑たるべきもの」としての著述であつた。しかるに稿半ばにして病歿したので書肆の乞ふにまかせて、それを取合せて一部としたのがこの「織留」であると。

「本朝町人鑑」は「永代藏」の續篇と見られるやうな素材を取扱つてゐる。才覺また正直を核心として致富への過程を示すと共に、貧者がその貧に處して靜かに世間を眺める心境をも捉へてゐるのは「永代藏」の繼承と云つてよい。又大晦日を題材とするものは「胸算用」の系統であるが、こゝには生活苦を脱して新生面を拓くに至るものが多い。要するに前二作の補遺であると共に新境地の提撕にまで進んでゐる。

「世の人心」の主題は「金」を中核にした點になくして、人心推移の世相に對する省察が重心をなしてゐる。この傾向は從前の著作にもあらはれてゐるけれど、こゝでは、それを樞軸としてゐる。

(一)風はかたちなうして―出典未考。たゞ松籟の事のみいへるか。
(二)花はいろあつて―「桃李不言、下自成蹊」をもじつた語か。
(三)まなこにさへぎる――「まなかひにかゝる」と同じで、こゝは眼に映ずるの意
(四)おもふ事いはねば――諺「おぼしき事云はねば、げにぞ腹ふくるゝ心地しける云々」(大鏡)
(五)よしなし事――世俗の些事。
(六)くれは鳥――「呉織―(クレハトリ)で「織留る」の縁語。「名づけ難波」はなの頭韻。

序

(一)風はかたちなふして松にひゞき花(二)はいろあつて物いはず、(三)まなこにさへぎることは心にうかひ、(四)おもふ事いはねば腹がふくるゝといふは、むかしやつがれがちいさき腹してつたなき口をあけて、世間のよしなし(五)ごとを筆につゞけて、是を世の人心と名づけ、難波のくれは(六)鳥、織留る物ならし。

難波　西鶴　松壽

生涯のうち、述作する所の(一)假名草子。(二)棟に充、牛に汗して世にはびこる中に、日本永代藏。本朝町人鑑。世の人心。これを三部の書と名づく。尤商職人の閲するに、日用世をわたるたつきに(三)こゝろを得べき(四)鑑たるべきものにして、永代藏は其功なりて後、町人鑑・世の人心半書遺して、(五)過し酉の葉月に此世を去ぬ。されば兩部の名のみにしてむなしく三部の闕たらんには、ぬしの本望もかなはず、かつは卷て紙虫の家ともならば、珠を(六)淤泥にかくすにひとしからんと、書林の某の歎きに應して、兩部の書殘されし、半宛を、とり合せて一部となし、かれにあたふるついで予に序を乞、此書の功のおはらざるにわかれしを思ひ出て、涙を墨にして筆を添侍りぬ。

元祿七年月戌卯卯月上旬

難波俳林

圓水誌

滑稽堂主

(一)假名草子――假名交りの草子。こゝは所謂「浮世草子」を指す。

(二)棟に充ち、牛に汗し――其爲レ書、處則充二棟宇一、出則汗二牛馬一（柳宗元「陸文通墓表」）書籍の多きを喩へた詞。

(三)こゝろを得べき――心得ておくべき。

(四)鑑――鑑は吉凶をトふもの、鑑は物を照らすもの、即ち模範とすべきもの（唐書劉蕡傳）

(五)過ぎし酉――元祿六年八月十五日、西鶴歿。

(六)游泥――游は泥。「游泥生蓮花」（蘇軾）

(七)北條團水――團粹とも書す。西鶴門下の俳諧師。又、鳳城と冠す事あり、京都兩替町通二條上ル町に住む、後、東洞院に移つた。俳諧の歿後、その廬を守る事七年といふ。正德元年正月四日歿、四十九。彼の小說は「晝夜用心記」（寶永四年）、「日本新永代藏」（正德三年）、「本朝智慧鑑」（同年）を代表作とする。

かやもかなそとぞ。かつハ巻て紙屋乃紙も切ハ
殊と潔淑よかくとに云しかれと書林集
の頼ゆよ遊しく面白乃書法されハ宛
をそろ合せく一紙とかしかれはあるふつい
て序よ序と乞書れ切乃おりさるに口れ
ーと思ひあく淑と墨よりて華城深侍良
元禄七年
戊卯月上旬　雑波俳林
周水誌

西鶴織留本朝町人鑑

目録一

一　津の国の かくれ里
四十石貧乏侍おらく
よくとく古狐の大明神

二　弓矢とる種乃杉草
徳のうけ愛宕屋敷の義理
庶を つくりく山となる小判

西鶴織留本朝町人鑑

目　錄

㊀　津の國のかくれ里
　四千七百貫目は聞耳のとく
　上々吉諸白大明神
㊁　品玉とる種の松茸
　謠のうけ賣庄屋殿ぶ機嫌
　灰もつもりて山となる小判
㊂　古帳よりは十八人口
　娌とる時から淺黄着物
　挑灯に釣鐘かけあはぬ事
㊃　所は近江蚊屋女才覺
　數百人はごくむ千貫松
　勢田に馬はあれど牢人心

西鶴織留本朝町人鑑

一　津の國のかくれ里

神武此かた世の人艶女に戯れ、無明の眠の中に其家の亂るゝ事數をしらず。近年町人身體たゝみ、分散にあへるは、好色買置此二つなり。損銀他銀年々相積りて才覺の花もちり、紅葉の錦紙子と成、四季轉變の乞食に筋なし。是をおもふにそれ〳〵の家業に油斷する事なかれ。爰に津の國伊丹諸白を作りはじめて家久しく、毎年の勘定銀五貫目延もちゞみせず、うまれつきたる小男の仕合と、月日をおくるうちに、子ども成人をして、然も惣領よろづにかしこく、親の古風とは替り、當世仕出しの衣服に身をかざり、是より女郎ぐるひにそまり我里より忍び駕籠をいそがせ、都の島原通ひつのれば、すこしの望姓殘りすくな

(一)かくれ里――仙郷・異郷の意なれど轉じて遊里の意にも用ひらる。又理想郷の義で、人に知られぬ富裕の里の意である。しかし「津の國」のとあるので、ここは「豊島郡池田の北にあり、所傳云昔此地長者あり萬寶家に充滿ちて、不兄と云ふ事なしと雖もも終に亡失せて名のみ隱里と云へり云々」(攝陽群談)とあるのに據るべきであらう。

(二)無明の眠――煩惱の境に彷徨する、即ち享樂にうつゝをぬかしてゐる中にの意。「過去世煩惱之惑覆二於本性一、無レ所二明了一、故曰二無明一」(大藏法數)

(三)分散――破産。

(四)買置――投機的な商品の大量買入。又は浪費の意。

(五)花――紅葉――錦――緣語、錦の對として紙子とつゞく。

(六)乞食に筋なし――乞食になるには筋目(格式ある素性)はない、誰でもなれる。

(七)諸白――麹も米もよく白げた米で釀す酒。

(八)五貫目――一貫は千匁、(約六十匁が金一兩)

(九)當世仕出し――當世の流行風姿。

(一〇)島原――「島原傾城町松原通大宮の後より西の野へ出て道あり、是都の未申の方に當れり(京羽二重)「寛永十五年島原陣の頃、今の朱雀野に移さる、これによつて此里を島原とは名づけしとなり」。(好色由來揃)。西國の島原の城郭一方口なるになぞらへて愛もかく名付けしにや」(人倫訓蒙圖彙)

(一一)望姓――望姓(モトデ)、商望姓(アキナヒモトデ)(易林本節用集)

く成て身上あぶなく、二親なげきて異見するに、とゝならず。（一）有時約束して丸屋の七左衛門かたに太夫の吉野揚置、つねよりけわしく（二）六枚肩にてのぼりけるに（三）丹波口にて夜半の鐘、とかふするまに八つ（五）門明て、宵より夢見し客、名殘惜さは朱雀（六）の細道うたひ連て歸る。我は今來て、太夫が待兼貌見るも、戀にふかき所の籠れり。先お行水よ白粥よ、柚味噌（七）酒（八）麩の跡から岩花のお吸物出して、鴨の板燒（九）は火鉢をすぐにお座敷へ出すぞと、勝手は煙立つゞき、亭主は置炬燵を仕掛、女房は濃茶立てお氣晴しにとあげける。引舟（一〇）女郎に髮撫付させ禿に足のうらをさすらせ、吉野に手の指をひとつ〳〵引せ、餘所のなげぶし（一一）はこちの肴にして呑かけ、此榮花（一二）大名もならぬ事、願くは我聲（一三）聞と、京中八十二人の末社（一四）出口十七軒の茶屋までも、霜夜に裸で起て旦那の御上京なされたと嬉しがる程物とらせたし。兎角ほしきは金銀ぞかし、算用なしに遣ひ捨（一六）ば、此遊興のおもしろさかぎりあらじ。目前（一七）の極樂とは爰の事、寢間の佛と、三つかさねのふとんの上に樂枕して吉野とひとつふたつ物いふうちに、門の戸けわしく（一八）明て、お宿より御狀（一九）がまいりましたと、隣の床の客へとゞけるに、何事かといふ聲して是は目出たや金銀抓取の內證、江戸の手代より申越した、關東筋大風ふきて（一八）八木俄あがりなれば、是より大坂にくだりて西國米大分買込、あがり（一〇）請たらば、

（一）有時――ある時。
（二）けわしく――忙しく、性急に。
（三）六枚肩――六人で駕籠を舁ぐ。二刻に十里半の道を走る。代三十六文。
（四）丹波口――島原から丹波街道への路。
（五）八つ門――午前二時に開門、（午後十時に閉門すると）それを「四つ門」といふ。
（六）朱雀の細道――「通ひなれにし朱雀の野邊の露はものかはわが涙」（「松の葉」五―古今百首なげぶし）
（七）柚味噌――柚の實を柄の方にて穿ち中味をぬき去り、味噌（蕎・胡麻・胡桃・栗など）を詰め、火にかけ煮沸するを食す。
（八）酒麩――「もみふ」の事か。「酒にて麩をよくもみて、だしたまりにて申事也、又千梅平がつををも入れ、古酒にても申候」（「料理物語」）
（九）板燒――魚鳥の肉を平たくし板につけて燒く。
（一〇）引舟――太夫を大舟に喩へ、これに附添ふ「かこひ」格の女郎を云ふ（好色由來揃）

（一一）なげぶし――眞享元祿頃流行唄の一。明暦の頃柏屋又十郎抱河內の創めしもの（「一目千軒」）。元來江戸弄齊の節をなほして歌ひ來るとかや音聲しめやかに調子は低きよし」（「松の葉」）
（一二）此榮花大名もならぬ事――かゝる榮花は大名でも出來ない事。
（一三）我聲聞と――我聲聞けと。
（一四）末社――幇間。大盡を大神（本社）に喩ふるに對す。
（一五）出口十七軒――島原の入口、大門の傍の茶屋を云ふ。出口北向の茶屋十九軒（色道大鑑）。二十軒（朱雀遠目鏡）
（一六）捨ば――「捨なば」の意にとるべし。
（一七）目前の極樂――諺。
（一八）けわしく――荒々しく。
（一九）八木――米のこと。（既に百錄抄などに見ゆ）
（二〇）あがり請く――買入の商品の賺賣する。（その對語―さがりを請く）
（二一）根引――遊女を請け出す事。

太夫を根引（二一）にして、我等が奥樣にする事ぞと、此たびの仕合を祈れ、夜が明次第に爰を立ぞと、今すこしの別れ惜み床をはなれかねける。時に伊丹の人、此事を聞耳立て、いまだ帶もとかぬに起別れ、おもしろき最中をおもひ捨、我里に失念したる事ありとて、首尾かまはず立歸り、早駕籠いそがせ伏見より飛脚船かりて、其日の四つ（二二）前に大坂の北濱（二三）へつきて、問屋をひそかにかたらひ、米大分買こみけるに、はや晝よりあがりて、只一時のうちに三拾八貫目丁銀（二四）にてもうけ込、此思ひ入（二五）に油買込、又四拾四貫目あがりを請て、機嫌よく伊丹に歸り、親仁に小判の山を見すれば、世間に金のめづらしき時分なれば、是長者の心なり。さるほどにたま〳〵あひにのぼりし女郎（二六）を捨て、身過大事にして利を得たる所、分限に成べきはじめなり。其後は江戸酒（二七）・借銀。田畠を求め棟高ふ作りて住なし、心よき春をかさね、元日の嘉例とて父親は胸前垂して蓬萊（二八）を丸盆に組付、代々（二九）伊勢海老なしにいわゐける（三〇）。母親は芋大こんばかり雜煮を盛ならべ、

（一一）四つ――十時。
（二二）北濱――米市のあつた處。
（二四）丁銀――銀貨、一枚四十三匁內外。
（二五）思ひ入――見込み。
（二六）さるほどに――それはさうと。
（二七）江戸酒――江戸へ廻す酒。
（二八）蓬萊――蓬萊飾。三方に米・熊斗鮑・海老・勝栗・昆布・野老・蘰桑を盛る。
（二九）代々――橙。
（三〇）いわゐ――祝ひ。

（一）有銀――元（モト）金。
（二）五十日――七七日過ぎた後である。
（三）内藏――家つゞきになつた藏。
（四）惣領――長男。
（五）買入より――買入れた時、以來の意。
（六）是次第――兄の意向に任せる。
（七）身體――身代、財産。
（八）見る物――こゝは「天秤のかけひき（金の目方の交渉）帳面の整理記入など見る者。見るやうな人物ではない、即ち商人の素質のない男だの意。
（九）御一家の御堂――本願寺派の寺。津村御堂、難波御堂などの名が「摂陽群談」に見える。
（一〇）見とゞけぬ者――大それた者。
（一一）四座――能の四座から出た詞か。こゝは家元の意。
（一二）新座池――新在家。連歌の宗匠花の本の稱。泉國泉南郡山直郷は宗祇以來の宗匠の居住地。京では鳥丸通と東洞院との間、出水と長者町との間の地に里村家が居た。
（一三）梅翁――西山宗因。

餅の入のを忘れたる年より、仕合よしとて今に其通りなり。扨親仁の書初に、毎年さだまつて遺言狀をしたゝめ、箱入にして封印付、持佛堂の下へおさめをかれしが、そも〳〵は有銀五百七拾目也。年毎に書增て四十二の春より八十三歳にて相果られしに、五十日に一門集り、書置狀を開き見るに、財寶の外に四千七百拾九貫目、内藏三所に入置れ、此銀子の大分に成事、一とせ惣領が米油の買入よりの分限なれば、殘らず兄に渡して、弟ども是次第に身體をまかすべし。殊に末子は町人の家業成、天秤のかけひき帳面見る物にはあらず。其仔細は一生美食を好ず、世に時花うたをうたはず、鬢付も髮結次第にかまはず、夜ありきをする事なく、人の無常を觀じ長ふもない世界に、善心なくては人間と甲斐はなしと常住の身の取置、うつけ者のやうに見えて又かしこき所あれば、よき娘ありて旦那の多き御一家の御堂を聞立、銀三百貫目付て養子にやるべし。又中男子が義、親の目にも見とゞけぬ者なり。さしあたり利發、万事を人の跡に付事にあらず。惣じて音曲鳴物、四座の直傳をならひ請、連歌は新座池へ立入、俳諧は難波の梅翁を里にむかへ、立花は池の坊に相生迄習ひ、鞠は紫腰をゆるされ、茶の湯は金森の一傳、物讀は宇津宮に道を聞、非所に二つまで打なし、楊弓は一中がかりに大金貝の看板、十炷香は山口圓休に聞覺へ、有職

（一四）池の坊――立花の宗匠、頂法寺六角堂の別當のこと（人倫訓蒙圖彙）。もと聖德太子が山城某池の邊に觀音堂を作り小野妹子をして守らしめ挿花の法を授けたと云ふ傳說がある。
（一五）相生迄――奥免許までの意。相生は松。「相生の心のもとは、松の心なり是本にて二またを云ふなり」（ウケツ〈〉のつかひやう秘事。云々）（諸藝小鏡）
（一六）鞠――蹴鞠。近江朝に始り平安末朝以後盛んになる。家元には、飛鳥井、難波兩家がある。紫腰は上達したもので總紫裾紫の袴を許された。
（一七）金森――金森宗和（飛彈高山城主、名は重近）その父可重が金森流の祖。
（一八）宇津宮――宇都宮逝庵、名は的、字は由的。周防岩國の人。京の高倉通樸木町に住む。寶永六年歿、年七十七。
（一九）棊所――棊所預本因坊を云ふか。京都寂光寺中の本因坊に居た日海上人が算妙と名のる、その繆統を云ふ。

（談林の俳諧を學ぶの意）

（二〇）二つ――二子（右上・隅・左下隅）。即ち本因坊宗匠に二目をおくだけの腕前の意。
（二一）楊弓――長さ二尺八寸、矢は九寸。
（二二）一中がかり――一中のやうに、似通ふさま。一中は都一中。
（二三）大金貝――大金書。（大弓の術語）「大弓の上手の人百本に九十以上中るを大金書。七十以上を金書と云ふ、黑きぬり札へ名を記し（俚言集覽）四炷香――香三種（試聞したもの）と客香一種を順序なく開かせ、十回行ふ。圓休は源五衛門と同人か。
（二四）十炷香――香の一法。
（二五）葉山――岩井――未考。
（二六）彌七――あふむ――當時の帮間の代表的人物。
（二七）文作――即席の地口。
（二八）おかし中間――をかし仲間。幇間連中又は遊蕩仲間の意。
（二九）虎落――「曲り」の轉。詐欺强請の常習者。
（三〇）銀本・筒――共に賣本主のこと。
（三一）手を拂ふ――無一文。
（三二）一歩――一分判金。重さ約一匁二分、四つを以て小判一兩に當る。
（三三）物好――趣向をこらすこと。

ふむが物まね、おかし中間のする事までも口拍子にまかせ、かゝる器用人の有事此所の外聞と皆人もてはやせば、其身渡世の事をかつてしらず、殊に肝大氣に生れつき、當座に思案なく金銀手にもたせ置ば、おそろしき虎落どもにかたられ、新田金山芝居の銀本博奕の筒にかゝり、何ほどあつても手を拂ふものなり。既に七歳の春の比はじめて小判壹兩盗て紙鳶の糸を買、はや九歳のときちいさき前巾着の中に一歩二十三入てさげける。子どもの時より、錢も白銀もぬすみ大膽ものなれば、兎角商賣さす事無用なり。住所京大坂のうちに物好に座敷を作り、妾女一人小性ひとり、男女ともにめしつかひ七人、我ともに八人。

の道者にしたひ、此外琵琶琴は葉山、小哥は岩井嘉太夫ぶし、彌七が文作、あ

一生擬ひ世帯(一)にして、毎月六百(二)めづつ晦日に相渡し、此上に奢一銭にてもかまふまじ、我相果て命日なれば迚、精進にてもするものにあらず。此たび病中にも世間のおもわくばかりに、跡(四)や枕に夢程の間もあくびして、次の間にてうきも世咄し、もまた親仁もよい年なれば、尊い所へまいられたがましで御座る。長いきにひとつも徳のない事、目がかすめば花がさくやら、耳が遠ければ郭公もきかず、歯がぬけたれば肴に味なく、足がよはれば座敷に杖突、娌子にあかるゝ身と成、一日もしやばふさぎ、薬代のつゐへぬうちに、此世の埒が明かなと四五度いふ事聞ける。是悪人に極れども、親の因果は是さへふびんに、身の行する。の事共を書置にのせけると、さりとは跡恥かしき親の心入、是人間と形を見へる甲斐なし。されば世上にかゝる心ざしの悴子多し。天命つきずしてあるべきや。親分限なれば不孝者も隠れてしれず、親貧なればすこしの悪も包み難し。貧福の親の違ひ、そんとくの二つ也。富貴の家にうまれ出るは前生の種也。兎角人は善根をして、家業大事にかくべし。池田伊丹の賣酒：水より改め米の吟味麹を惜まず、さはりある女は藏に入ず、男も替草履はきて出し入すれば、軒をならべて今のはんじやう、升屋丸屋油屋山本屋。酢屋大部屋大和屋満願寺や、賀茂屋清水屋、此外次第に榮て上々吉諸白、松尾大明神のまもり給へ

(一)擬ひ世帯――あてがひ扶持。
(二)銀六百め――小判一両を六十匁とすれば十両となる。
(三)世間のおもわく――世間てい。
(四)跡や枕――あとあひに寝る。足の方に寝る。介抱看病のさま。
(五)もまた――最早、すでに。
(六)尊い所――佛のゐる所。祿樂。
(七)しやばふさぎ――邪魔者。「しやば」は娑婆。
(八)薬代のつゐへぬ――薬のつひえぬ。
(九)埒が明く――きまりがつくの意。
(一〇)跡恥かしき親の心入――亡父の心入に對して恥かしい息子の孝子。
(一一)池田伊丹の賣酒――「坂東武將軍家の御前酒は萬願寺屋九郎右衛門より造り出せり、熊野田村の米を清水をもつて、元来とし改めて造り出せるなり」（播陽落穂集）
(一二)さはりある女――穢を忌むのである。
(一三)入ず――入れず。
(一四)松尾大明神――山城國葛野郡松の尾大宇山田。酒屋の守り神。
(一五)榻葉――酒ばやしは榻葉を以て作り軒に下げ、榻は杉を以て作る、杉と酒とは縁が深い。
(一六)枝とならさぬ――榻の縁にて枝と云つたのである。枝をならさぬは太平の象である。「太平世風不搖枝」（西京雑記）
(一七)品玉――手品。
(一八)神國の日月云々――「日月は四州を廻り、六合を照すと雖も正直の頂を照すべしとあり、殊更に此國は神國なれば神道に違ひては一日も日月を戴くまじき謂れなり」（神皇正統記）
(一九)すぐなる道――直なる道、正しい心。
(二〇)恐るゝ人――天道を恐るゝ人。
(二一)我物喰ば竈將軍――自分のものを食べてゐれば大威張であるとの誹。「かまど將軍」は一家の主人の意。
(二二)賣僧――商賣する僧、商僧（下學集）。こゝは不正な行爲する坊主の意。
(二三)文作事――ふづくりごと。たばかりごと。
(二四)白化――しらばくれ、そらとぼけ。
(二五)ほうかし――放下師。鞠蹴・ざゝら、小切子など弄び、歌ひ舞ふ坊主。
(二六)辻談義――道の辻、門邊にて法文を唱へ物を乞ふ者。
(二七)ひだるい――空腹。
(二八)勸進――寺社へ寄進すること、轉じて喜捨すること。

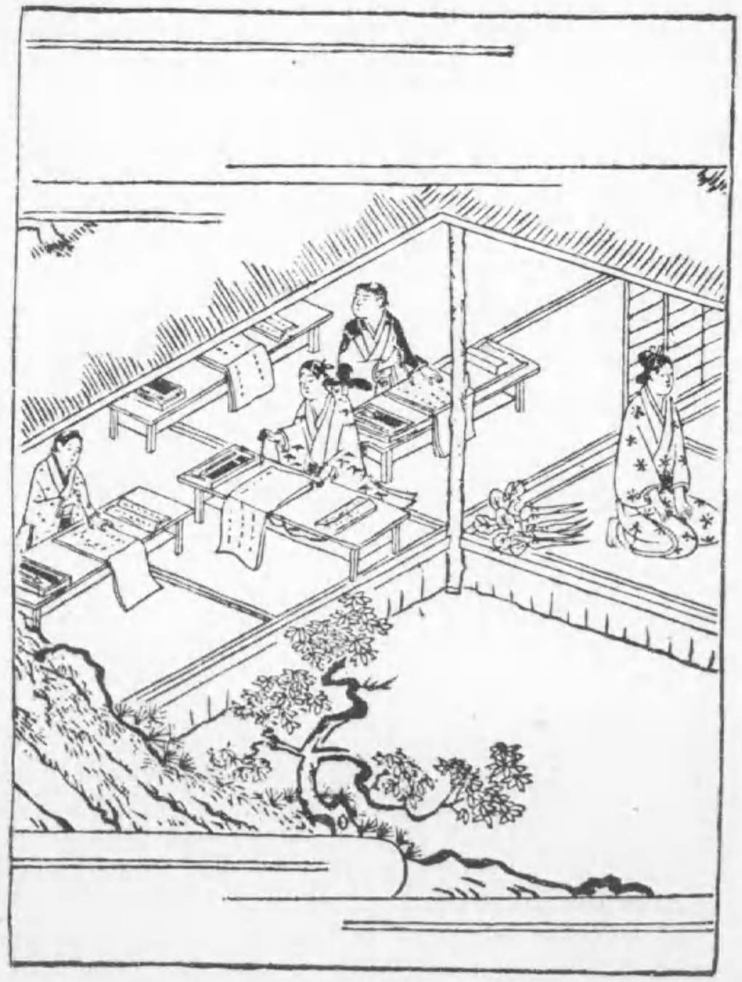
ば、千本の榻葉(一五)枝(一六)をならさぬ時津の國の隠里かくれなし。

二　品玉(一七)とる種の松茸

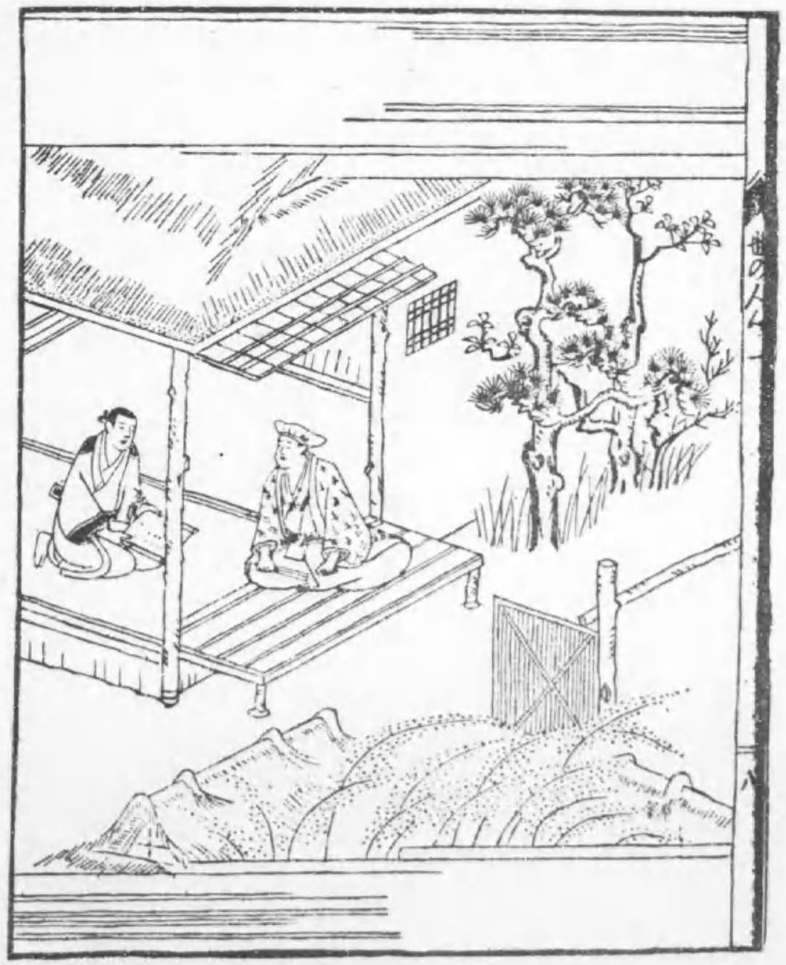
神國(一八)の日月まことを照し給へば、世に萬人の心すぐ(一九)なる道に入て、正直の頂をさげ、恐るゝ(二〇)人には禮儀をたゞし、順ふものにはあはれみをかけ、我物喰(二一)ば竈將軍といへど、京も田舍も住なせる町人、其所所の作法ひとつも漏る事なかれ。むかしの人間は、かしこき人はすぐれ、又愚なるはあらはれて、鈍智のふたつ各別の相違ありしに、今時の人は相應の智德をもつて產れ、習はずして其道々をしれる貌つき、見た所のうときはひとりもなかりき。此時に出ける賣僧(二二)・かたり(二三)・陰陽師のたぐひ、大かたの文作事(二四)にては合點せぬ時世になりぬ。只白化(二五)にほうかしまでも、品玉とる種の行所をさきへ見せ、辻談義(二六)も佛のまねの口をあき、つまる所は喰ねばひだるい(二七)〳〵といふにぞ、ありのまゝなる法師とて、人皆勸進(二八)をとらせける。萬事に僞りなき御代の掟をまもりけるためしには、よ

ろづの賣掛、あるひは當座借の金銀、手形なしの事なれば、借請ぬといふとても、むづかしき出入なるに、心覺の帳面ばかりにて請拂を濟しぬ。此以前舟着の問屋に世間並にすぐれて銀拂ひの惡き人あり。大節季の夜に入り、さもいそがしき中にて、人の手代に銀八百目渡しけるに、請取帳に名判をしるし其銀子を袋にいれずに歸る。跡にて亭主取隱し後日の汰沙にもいよ／＼渡したといひきれば、此手代身のせつなさのあまりに、湯玉のごとくなる泪を溢し、諸佛諸神をせいもんに入、不念を詫言すれど中々聞いれざれば、手代是非なく賴みし淨土寺にまいり、親かたへいひわけに、銀ゆゑの自害。扨はとらぬに極めて、世上よりいひ立、次第に商賣うすく成、內儀幾人か平產せしに手のなき形をあらはせ、一とせ道頓堀にて見せ物にせし、德利子の万太郎は其の人子にて、世に恥をさらし、つゐには此家目前に絕たり。無理なる欲はかならずせまじき事ぞかし。ならねばなるやうに、世わたりはさま／＼有。然ども望姓持ぬ商人は隨分才覺に取廻しても、利銀にかきあげ皆人奉公になりぬ。よき銀親の有人はおのづから自由にして、何時にても見立の買置、利得る事多し。唐秬の根の南の方へ高ふはゞあらはるゝ年は、二百十日の風碓をも吹ちらすと、東方朔が傳書にも見合、今年は俵物買とし思入はありながら、ない物は銀にて、さる程に

（一）當座借――現金借。
（二）手形なしの云々――證文のない事だから借りた覺えはないと云はれると、中々面倒な訴訟事（出入）となるけれど。
（三）せつなさ――せつないこと。「セツナイ」と云ふは切字也、セツナイのナイは助語なり、切ナルト云ふ事なり」（俚言集覽）
（四）せいもん――誓文。神佛に誓ふ。
（五）不念――不注意。
（六）賴みし――賴みにしてゐた。歸依してゐた。
（七）淨土寺――攝津住吉社の東にあり、眞言律宗、堀河帝勅願の寺。
（八）扨はとらぬに極めて――それでは手代は請取つて居なかつたのが事實だつたと。
（九）いひ立――言ひ立てたので、評判を立てたのでの意。下に「その問屋は」次第にとつづけて見る。
（一〇）手のなき形――手形の意をこめてゐる。
（一一）あらはせ――あらはし。
（一二）道頓堀――正和年中安井道頓が興せし地（大阪市史五）



（表の丁九・裏の丁八）圖の居閑野小里遠　同



茸松の種ると玉品　話二第　一卷　留　織

せはしの世や。(一九)節季々々は六十日の立事夢のごとし。正月の掛鯛の(二〇)山草すこしかるゝとおもへば、はや蓬賣(うま)聲軒の花菖蒲、今も所々に見ながら、灯籠出す暮に胸も踊て、(二一)蓮の葉の食(かし)ぬくもりもさめぬに、又菊の酒屋の書出し見れば、おもひもよらぬ醉の出るもおかし。世に住付(二二)屆とてぬり臺に小鮹(すゞめ)魚一連、又は干鱈(ひたら)(やまず)二十居て取遣するは、今年は栗が高いと見えて算用づくの人心さもし。九月を過て大暮までは百日にあまれば、すこし爰にて息をするとおもへば、常の物(二三)前と違ふて、大分の拂ひかた、心當ほど商(二四)ひしてから、たらぬ所見えて、日比言葉で目を掛らるゝ門徒(二五)寺の手前(二六)よしに、此行先の師走には、銀子五百目御借給はれと、機嫌のよき時女房どもに言出せければ、何と三百目にても仕舞(二七)れぬか、其内分別してお取(二八)越の寄銀次第、御用に立事もと、盃持ながら呑もきらず(二九)かみもきらぬ返事を、無理に旦那(二〇)のお影といひかけ、それより毎日のけい(二一)はく

(一二)徳利子の万太郎――「延寳年中攝州大阪に生れながら兩手のなき者あり、足を以て用を辨じ、且字を書き弓を射る、芝居に出て錢を乞ふ、予もまたこれを見る、按ずるに手のなき人は俗に呼んで缶兒(とくりこ)と名づく」(和漢三才圖會)。予とは寺島良安で、道頓堀の萬太郎を觀たものらしい。

(一三)かきあげ――(利息の方に)すつかり取られる。

(一四)人率公――他人のためにはならないこと。

(一五)利益となつて自分のため。

(一六)唐臼云々――「俗傳蜀黍根高露二出於地上一則其歲有レ蝗」(和漢三才圖會)

(一七)東方朔――漢武帝の名臣、名は曼倩、博覽强記の人。殊に長壽仙術の人とは風雨天候を占つた易書。

(一八)俗說が有名である。傳書

(一九)節季――こゝは五節句の前日をさす。俱一三月節句前、五月節句前、九月節句前、十月晦日、暮と是を節季と云ふ。「十月晦日は中拂と唱ふ。何れも諸勘定取引あり」(浪花聞書)

(二〇)山草――しだ、うらじろ。

(二一)踊て――節季で胸のわく〳〵するのと盆踊とにかけた詞。

(二二)付屆――義理合上の付屆。

(二三)物前――物日の前、即ち節季前。

(二四)商ひしてから――商をしたところで。

(二五)門徒寺――一向宗、本願寺派。

(二六)手前よし――金廻りのよい和尚。

(二七)仕舞れぬか――節季を越す事はできないのか。

(二八)お取越――報恩講、(十月)、一向宗の佛事)――前出。

(二九)かみもきらぬ――嚙もきらぬ、不徹底な意を持たせてゐる。

(三〇)旦那のお影――さうお仰るのも私が檀那であるお蔭ですの意。

(三一)けいはく――追從・お上手を云ふこと。

（一）はいつくばひ――這ひつくばふ。平伏して機嫌をとる。
（二）まいりたるよし――この下に「云ひて贈り」の詞を補ふ。
（三）霜前――十月頃、霜のりる前。
（四）土くれ鳩――鴿（ドバト）。
（五）つと――苞、みやげ。
（六）家――亥子、十月初亥の日。玄猪。
（七）自身番――町内の家主常に交代して警備に當る。
（八）相濟し申し――「申しませう」の意にとる。「申しましてとの約束」とでもつゞくべきところ。
（九）人が聞ねばこそ云々――人が聞いて居ないからこそ、かゝる事も云へたものであるが、いかにも殘念な事であるものゝ、やはり「此度の御恩わすれ難し」と口に出して御禮を述べ。
（一〇）手づまる――手詰る。
（一一）せつかくかせぎて――折角稼ぎても、の「も」の字を補ふて次につゞける。
（一二）奈良草履――「草履、小林村、世呼奈良草履（五

茶のたばこのと馳走して、五日に一度づつかるひ遣ひ物してはいつくばひ、初松茸壹斤四匁五分する時、調へて嵯峨の親類どもよりまいりたるよし、霜前に土くれ鳩を態とつとにして山家からくれましたと申遣し、孫子の豕を祝ひおふくろさまの御法體に丸頭巾を進上申、自身番の夜半替りを勤め、棚から落て猫けがしたまでにかけ付、餅春にも夫婦まいりてかゝは大釜の下を焼ば、男は水風呂に水を汲込、一代にした事ない骨をおり、十二月二十日比より、御無心申かけし銀子の事を頼み奉り、やう〳〵大晦日の夜四つの鐘の鳴時、利足は一分半の手形を極め、何時成共御用の時分すましかね候はゞ、ひとりある娘を遊女町へ賣て相濟し申しとの約束。人が聞ねばこそ、無念ながら、此度の御恩わすれ難しと、内のものどもにまで禮を申、そこ〳〵に年をとりて、明る春の四日に棚おろしの勘定をして見しに、わづか五百目の銀子借ふとて、目に見えぬ費はのけて置て、八十四匁六分五リンが物をつかひける。まことに貧者の手づまる事、かゝる物入のありけるゆへぞかし。其年より夫婦内談して、兎角銀がかねをもふくる世なれば、せつかくかせぎて皆人のためぞかし。外聞を捨て身のたのしみこそ老先のたのみなれと。奈良草履屋を二足三文に仕舞て大坂を離れ、女房の在所住吉の南遠里小野に身を隠し、夕暮よりは油を賣、すこし手を

（一）はいつくばひ――這ひつくばふ。平伏して機嫌をとる。
（二）まいりたるよし――この下に「云ひて贈り」の詞を補ふ。
（三）霜前――十月頃、霜のりる前。
（四）土くれ鳩――鴿（ドバト）。
（五）つと――苞、みやげ。
（六）家――亥子、十月初亥の日。玄猪。
（七）自身番――町内の家主常に交代して警備に當る。
（八）相濟し申し――「申しませう」の意にとる。「申しましてとの約束」とでもつゞくべきところ。
（九）人が聞ねばこそ云々――人が聞いて居ないからこそ、かゝる事も云へたものであるが、いかにも殘念な事であるものゝ、やはり「此度の御恩わすれ難し」と口に出して御禮を述べ。
（一〇）手づまる――手詰る。
（一一）せつかくかせぎて――折角稼ぎても、の「も」の字を補ふて次につゞける。
（一二）奈良草履――「草履、小林村、世呼奈良草履（五

讃内志、大和國葛上郡、土産の條）
（一三）二足三文に仕絆――格別の安價に賣拂ふ。「今の物の置の安きを二足三文といふ諺はもと金剛の價より出たり……、金剛は草履の類なり」（骨董集）
（一四）遠里小野――「住吉の南の在所を云ふなり」蘆分船）。「待宵は遠里小野の油うり曉方の皮香のこゑ」（夫木抄）
（一五）油――種は緣語、油の産地遠里小野にかゝる。
（一六）牛の角文字――「い」の字。
（一七）兼平――謠曲の曲目。元清作。今井兼平の粟津原で討死した事蹟を作る。二番目物。
（一八）小原御幸――同右、元清作。後白河上皇が寂光院に建禮門院を訪ぬること。この曲は「外」でない。三番目物。
（一九）源太夫――同右。氏信作。熱田源太夫社の由來。金春流にのみ演ぜられる鵲能。
（二〇）外百番――貞享元祿頃、未刊の謠曲を前集の外百番として刊行した。

書を種として所の手習子ども預り、我まゝそだちの草を苅、野飼の牛の角文字よりおしへけるに、謠しらねば迷惑して日毎に大坂へ通ひ、むかしの友にならひて又里の子におしへけるに、やう〳〵兼平一番覺へしに、小原御幸の源太夫のと、外百番をこのめば、師匠のしらぬとはいひ難く、是さへ一日のばしに、なに成とも望次第にうとふて聞せうといふうちに、節用集に見えわたらぬ難字を庄屋殿より度々たづね給ふに、一度にても埒をあけぬば何とやら首尾あしく、はじめは麥秋、綿時、新米の初尾とてくれければ、商ひしたよりまし成と思ひしに、ひとり〳〵寺をあぐれば又かなしく成て、明暮渡世を分別するに、錢三十づつもうくる事の何にてもなかりし。有時宵に燒たる鍋の下に其朝まで火の殘りし事、是は不思議と、燒草に氣を付て見しに、茄子の木犬蓼の灰ゆへに、火の消ん事をためして、是は人のしらぬ重寶と思ひ付、手振で江戸へくだり、

（二一）節用集――林宗二著（明應年中）。日用の文字熟語をいろは順とし、十三門に分類す。
（二二）麥秋――麥の色づく頃、初夏。
（二三）綿時――綿を摘む時八月頃。
（二四）まし成と――ましてあると。
（二五）寺をあぐ――卒業する。
（二六）かなしく――窮迫する。
（二七）何にてもなかりし――「何にもなかりし」と同意。
（二八）茄子の木――「茄灰、埋火によくもつものなり、懷爐などに入るゝに妙なり」（俚言集覽）
（二九）犬蓼――「犬蓼之葉、燒爲レ炭、爲二懷爐之炭一、佳勝二於茄葉之炭一、能保レ火」（三才圖會）
（三〇）手振――から手。

（一）雪月―十二月の異名。
（二）通り町―江戸の本通り、日本橋通町を中心として北は筋違橋より南は新橋邊までを云ふ。
（三）たのしや―富豪なる家。
（四）駿河町の三谷―駿河町は日本橋通室町の西側で兩替町につゞいた横町。三谷は金銀包通用人として嘉永四年兩替商組合再興の頃まで續いた豪家（江戸總鹿子。元祿當時の江戸富豪十人衆の一人。（日本經濟史）
（五）下々の見る事もなく―下々の者は中々、お目通りする事もできない位の身分になつたとの意。
（六）柳櫻を―「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」（古今集、春。素性）
（七）灰―煙は緣語。灰より富士は「煙もつもれば山となる」の諺を利かせてゐる。
（八）横に車―「横車を押す」の諺。無理を押し通すの意。「のいて」は「退いて」。
（九）月夜に釜をぬかる―諺。不用意の甚だしきこと。

銅細工する人をかたらひはじめて、懷爐といふ物を仕出し、雪月比より賣ける程に、是は老人樂人の養生、夜づめの侍衆の爲と成、次第々々にはやれば、後には御火鉢御火入の長持灰として看板出し、大分うりて程なく分限に成り、通り町に兩替店出して、何万兩とも藏入の奥をしれる人なく、林勘兵衛といふ名はひそかにしてのたのしや也。むかしよりいひつたへし駿河町の三谷をはじめ其外の兩替ども、こがねの山を見せるに中々あひもおとらず、諸大名の御用何ほどにても事をかゝず、家榮へて今妻子は下々の見る事もなく、上野の花見駕籠、隅田川の舟あそび、柳櫻をこきまぜて、都の心になりて一生の安樂する事も、うき世帶の時、男によくつかへて勘忍をせし身の上、天是をあはれみ給ふなり天下の御めぐみをなをありがたし。わづかの灰より分限になりて、富士の煙の絶る時なくたしかなる福人也。

三　古帳よりは十八人口

富貴は惡をかくし貧は恥をあらはすなり。身體時めく人のいへる事は横に車のいて通し、世を暮しかぬるものゝいふ事は、人のためになりても是をよしとは聞ず。何に付ても金銀なくては、世にすめる甲斐なき事は今更いふまでも

（一〇）大節季の闇―「世の定めとて大晦日は闇なる事、天の岩戸の神代この方知れたる事なるに」（胸算用）
（一一）堺筋―北濱一丁目と日本橋とを貫く町筋、塗物家具の店が多かつた。
（一二）年わすれ―一年の勞を忘るゝために催す歳末の酒宴。「十二月。下旬の内に年忘れとて父母兄弟親戚を饗する事あり」（日本歳事記）
（一三）いはれざりしに―いはれざるに。「云ひ得ないのに」の意。
（一四）日借の小判―一日借の小判。
（一五）二日切の手形銀―二日を期限として借る手形銀。
（一六）二割―日借、二日切の借金、共に二割と云ふ高利なのである。
（一七）請込―借受ける。「込む」は實力以上のものを負ふ意がある。
（一八）革袋―財布。革製の袋である。
（一九）掛硯―掛子のある箱で、硯墨・水入をその上に入れ、蓋をして提げるやうに作つてある。

なし。諸町人其合點はして居ながら身の一大事をわすれ、いつも月夜に釜をぬかれ、借錢乞と無理の口論、大節季の闇とは元日よりはやしれけるぞかし。今の世に商ひ事なきと人毎にいへり。是は大きに算用違ひ、むかしとは各別諸商賣多し。其ためには大坂の堺筋に、椀折敷重箱よろづぬり物屋ありしが、親の代寛永年中の古帳出して見るに、壹年の賣物七貫にたらず、此利あいにて上下六人口を過て、それ〳〵の正月きる物、餅も世間並につきて、萬の請拂ひも極月二十五日より二十八日までにしまひ、晦日には年わすれとて隙なる年寄友達をよびあつめ、小鴨の汁に鰤の燒物にて振舞ひ、酒のうへの大笑ひ、すこしも心にかゝる事もなく内證しまはれけるに、今我代になりて、親仁の時よりは商大分にしまして、毎年四十貫目餘の賣帳、人も其時とはまして十八人口になれば、以前より世に商事のないとはいはれざりしに、年々手づまり、兩替屋より日借の小判、二日切の手形銀、二割の利銀をかまはず先請込て當座拂に埒をあけ、門は禮者の通るまで天秤をならし、やう〳〵仕舞て嬉しやと、革袋枕に殘る物とて惡銀ばかり十八匁、戸棚掛硯には錠もおろさず、錢さしの塵もはかず、掛乞の呑捨たるはたばこ盆じだらくに、ともし火かはらけの中に燃入、我身を覺ず鼾をかき、夜の明がたまで目のあくものはなかり。母親隱居の戸をあけて

（一）半季居云々――半季位奉公してゐるもので、當家のき慣を知らない。
（二）身いはぬ――身祝ひ。
（三）向ひ殿――向ふの家。殿は敬語。
（四）日野絹――「上州絹の事。もと近江の日野から出し、絹を上方にては日野と云ひ、上州絹はそれに似たるゆゑ、これをも日野絹と云ふ」（萬金産業袋）
（五）おしきせ――お仕着。雇人に與へる時服。
（六）算くづし――三筋づつ縱横に石疊みにした模様。算木を崩したやうであるから、かく稱する。
（七）すはる――据ゑられる。置かれること。
（八）雪踏――「昔日尻切と云ふもの、千利休作意として、雪の比茶湯の時露地入のために草履の裏に牛革を付させ用ふる也。即ち雪を踏と義を取て名つけたりと云ひ傳ふ也」（堺鑑）
（九）用いふ事――用事を云ひつけること。
（一〇）親かた――主人。

下女をおこし、大豆がらにて鍋の下へ燒付、膳たてするも貌ふくらかし、久七に若水汲といへばお家ひさしき人にくませよ。半季居は御作法しらず、餅が煑たら身いはぬに喰ふといふ。手代も主の事をかまはず、久七に足をもたせ、ひとり目の明まで我を起すな、向ひ殿の若い者は我等よりは三年おそう奉公して、はやことし日野絹のおしきせ脇指までもらひしに、いかにしても算くづしの布子で立ならぶもはづかし。晝の内は門へは出ぬぞといふ。小者めまでも同じやうに口をたゝき、ことしはゑびす殿ににくまれたかして、鹽鯛なしに雜煑すはるといふ。その外の下人ども、絹帶を木綿帶のふそく、又は雪踏のかはりに皮草履、少の事に機嫌わるく、用いふ事も餘所に聞せ、大勢の人をつかへる甲斐はなし。是親かたのすべき事せざるゆへと、母の親元日そう〳〵泪をこぼし、すぎゆかれしつれあひの事思ひ出して、持佛堂の香花を取、長生しての後悔と、大聲あげてなげかるゝに、いづれも目覺しておどろきける。是不孝第一なり。母のかなしみ其身の事にはあらず、我子を人にあなどらせ、世間の外聞かたゝ口惜きとばかり、思ひつめられしは女心には道理千万なり。親の時より次第にしたる見世にて、今大分の商ひ事ありながら、何とて節季々々に手づまり迷惑する事ぞといへば、母親爰はいひ所と、男のごとくひざを立て疊

（一一）しにせたる――基礎を確かに、手堅くしたの意。
（一二）茶の下――茶釜の下の意。
（一三）加賀米――下等な米。「加州能州米爲飯多殖而味劣矣」（和漢三才圖會）
（一四）はしらかし汁――走らかし汁。手輕にこしらへた汁。
（一五）朔日二十八日――毎月一日、十五日、二十八日は式日、又は禮日と稱して祝つた。
（一六）あらためず――詮義しない。
（一七）紫革足袋――女用。天文から慶安の頃まで行はれ、天和にはすたれたものらしい（骨董集參照）
（一八）花をやる――華奢を極める。
（一九）おかた――御方。妻。内儀（物類集呼）
（二〇）ひつかへし――衣服の裏廻しに、表の地と同じ布を用ひること。
（二一）役者のきそふなる――「鑢ふ」か、「着さう」か。
（二二）百品染――とり〳〵の色で彩つた染方か。
（二三）すき通り――透（スカ）し。

をたゝき、我等が世帶の時は、雀のなかぬうちに鐵漿を付て髪を結、下女が水汲うちに茶の下へ燒付、米炊間に寢床をあげ、でつちに行燈掃除させて、其油紙にて煙管を琢せ、其跡にて敷居の溝をぬぐはせ、捨る所は塵籠、角々までも氣を付、芝居近くへの使には朝飯より前にやり、遊女町の近所へやる時は用事俄にいひ付て、帶も仕替させず鼻紙入を取まはすまもなく、庭よりすぐにつかはし、ひとつ釜の加賀米にはしらかし汁、鰯菜も、同じやうに居りて主下人のへだてなければ、朔日二十八日に膾せぬ事もあらためず、精進日には香の物にて、朝夕お主のお蔭と箸箱をいたゞき、風の吹日さむからぬも新しき綿入の布子ゆへと、衣裏のよごるゝをもいとひ、万事おろかにせざり。我等もふだんは花色染のもめんきる物に、紬の帶一筋にて姿を作り、娌取振舞の時も淺黄にちらし菊の絹の物、しゆちんの帶に紫革足袋にて花をやりしに、今是のおかたの常住の風俗を見るに、肌着に白小袖をはなさず、中には鹿子上には黑羽二重のひつかへしに、藤車の紋所を確程にして付て、役者のきそふなる袖口、百品染の白じゆすの帶を、腰の見えぬほどまとひ、すき通りの瑁瑇のさし櫛を銀二枚であつらへ、銀の笄に金紋を居させ、さんごじゆの前髪押へ、針がね入の七響

（二四）銀二枚――銀一枚は　丁銀一枚（四十三匁）。

（一）御所白粉――白粉の名であるが、もと御所方で用ひられたのによるものか。
（二）引敷――腰にあてゝ敷くもの。腰當ともいふ。
（三）壺打のやうじ――壺打の揚枝。房揚枝の類。
（四）臺天目――高杯のやうな臺にのせた天目茶碗。
（五）棧敷――「御臺左右二方並正面高架床、是謂棧敷」（雍州府志――芝居）
（六）針を藏につむ――諺。いくら多くあつても足りないの意。針は御物師の緣。
（七）我男――夫。
（八）ひざや――緋紗綾。緋色のさや。
（九）全盛所――晴れの場所即遊里。
（一〇）隔屋――「隔屋（へヤ）部屋」（易林本節集）。「隔屋住のうち」は部屋住のうちでもの意。
（一一）よぶ――「よばれる」で、嫁入のこと。婚から云へば、嫁を呼ぶ」のであるが、こゝあたりは嫁を主として見る。
（一二）さられては――離緣せられては。
（一三）手前よろしき――富裕な。
（一四）むかしの形見覺して云々――もとの美しき容姿か一段と見劣りするやうになつて、夫の愛も薄らぎ、遊蕩するので。
（一五）伏見町――大阪船場にあり、北濱から六筋目の町。「呉服屋が多かつた。（難波丸）
（一六）仕合のあるが中に――以上のやうな緣談があつて、いかにも幸運な嫁入口が多かつたのに。
（一七）跡からはげる――後で本當の事がわかるの意。「はげる」は塗物の緣。
（一八）念佛講の同行――念佛仲間の講中、連衆である。
（一九）氣がつきて――精根がつきる。氣苦勞するの意。
（二〇）打敷――佛壇用の卓案に掛ける布帛。
（二一）天蓋――佛具にて幡寶蓋の類。
（二二）何か氣にかゝる事なし――何か氣にかゝる事あるべき。（何も氣にかゝる事なし）
（二三）是のたはけ――夫を指して云ふ。「たはけ」は

を掛て、素貌でさへ白きに、御所白粉を寒の水にてとさて二百へんも摺付、手足に柚の水を付てたしなみ、灯燈にむらさきぶとんをかけ、茶繻子の引敷、延の鼻紙に壺打のやうじ取添、たばこの火に伽羅を燒かけ、せんじ茶を臺天目にてはこばせ、手もとに源氏物語、いたづらに氣を移す事を、年中の仕事にして、花見紅葉の駕籠、芝居の替り〳〵に棧敷をとらせ、中居腰元お物師つれて、針を藏につみたればとて、たまる事にはあらず。諸事に付て内證の奢より身體をつぶしぬ。おかたは我男ひとりに見する姿を遊女のごとく作り、男は又一代連そふ女にない物もある貌して萬隱し、うちの肌着に不斷ひざやの下帶かく事、人のしらぬ費なり。傾城ぐるひするには、我も人も全盛所なれば、風俗作るもことわり也。是さへ今時はかしこく、つねの衣類にて通へど、揚錢の濟事をよろこびける。されば人の花娌といふは、親にかゝりの隔屋住のうち、又はよぶと其まゝに世帶請とるも、わづか一とせのほどは、たがひに堪忍しあいて男の氣を取、御隱居におそれ、下人下女が身のうへもよしなにいひなし、もしさられては大事と只心ひとつに此家の榮へ行末を祈りしに、程なく總領產れて、尤手前よろしき人は乳母を取てそだてさせけれども、はや女の身もちおのづから自墮落に成て、俄にふるめき、むかしの形見覺して戀も餘所に成ければ、女房は殊にりん氣つのり、はたちにたらぬ口から言葉荒して、親里よりつれたる女をあいてにして、我身は果報のすくないものじや、伏見町のごぶく屋からもいふてくる、天滿の酒屋からも人を賴み是非よびたいといふたに、仕合のあるが中に、こんなぬり物やへかたられて、跡からはげる事を、念佛講の同行平野屋の久齋樣にだまされた。是程氣がつきては頓て死ぬる間はない。金入りの鳳凰の小袖は打敷、花車の縫の袷は天蓋幡にしてお寺へあげて、手道具は燒て捨て、うき世の塵も灰も殘らぬば、何か氣にかゝる事なし。ひとりある子も疱瘡せねば命も定めなし。あれが事さへふびんにおもはずと。其後は鼠の喰物も取おかず、麻袴の皺の寄次第、亭主の留守には夜食好みして、大かた是のたはけが歸る時分じやと、油火の灯心をほそめ、御所柿の皮をしれぬ所へ捨させ、なんの事もない座敷を家鳴がするといひ出し、人の心をなやませ此家の衰微をよろこぶ。女の心其時々に移り替りおそろしき物ぞかし。其男の身にしては寢覺うるさく、後にはする程の事目にあきて暇書て埒を明ける。世に女房さるほど身體つく。目に係ると同意。
（一六）暇書て――暇狀（離緣狀）を書いて。
（一七）女房さるほど云々――妻を離緣すれば財產を失ふに至るの意で、長者になるためには禁制である。「長者教」（寛永年間）の「貧乏神十八御子」の五番目に「女房さり五郎四郎」とある。
「馬鹿」。
（二四）御所柿――大和國葛上郡五所村の產。やゝ扁平で方形の果實。
（二五）目にあきて――自に

（一）挑灯に釣鐘――諺。つり合はぬ縁談を云ふ。
（二）たふれける――倒しける。或は「身代たふれける」
（三）むつかしう――事が面倒になる。
（四）上京――三條以北。中長者町は室町から油小路まで。
（五）手間とり――手間賃をとつて人に雇はるゝ者。
（六）蚊屋――蚊帳屋は三條東洞院から京極邊までにあつた（正月捕）
（七）目廣き所――見るもの多い所。
（八）次第に――「次第に重りて押もわけられず」と補うて見るべし。
（九）黒木――皮のついたままの木、薪。
（一〇）のみしれたる姿――「飲み痴れ」か。薄ひたんぱのやうな踏躙とした姿。人を押しわけて縫ひゆくさまを云つたのであらう。刊本「のらしれたる」ならば百姓くさい姿と解せられるが、原本のミに從ふ。
（一一）本綿の二布――黒木

のさはりなる事なし。女も又二たびの緣付、かならずはじめにはおとるぞかし。兎角世間の外聞かまはず、聟は目下成を取てよし。娌も又我よりかるきかたよりむかへてよし。挑灯に釣鐘かけあはぬ事すれば、内證の火の消るにほどちかし、此椀屋もよい舅に万事まねて身上をたふれける。

四　所は近江蚊屋女才覺

娌入道具の品々世間にすぐれて念を入ければ、かぎりもなくむつかしう國土の費になる事多し。上京中長者町の仕立物屋の弟子、手間とり、針筋を揃て薄絹の蚊屋を縫けるに、都は目廣き所ながら、立とまりて是を見る人、次第に押もわけられず、黒木賣くる女の難儀、爰通りかぬるのみしれたる姿を笑はれける。木綿の二布糊こは〳〵としてやう〳〵我身を隱すもあるに、此蚊帳を見れば四角に赤地の唐織を菊の花形に切あはせ、紅ゐの大房に匂ひ玉をむすびさげるりさんごじゆの餝り銀の鎰金の輪、小緣ひとま〳〵に鈴の音なし、乳毎に五色の房を付、裾におし鳥のたはふれをさまざま縫せ、岸の柳に雪をもたせ冬川の氣色見てさへ涼しきに、あの中に寢は夏をわするべしと浦山敷、爰は内裏ちかくなれはいかなる高家の御物好、皆人極樂と聞およびし佛樣の寢所も、何と

（一二）匂ひ玉――玉の形した匂袋。紐のついた絹袋に香類を入れたもの。「床近み目にかけ物の心にて、匂ひ袋は蚊屋の隅々」（重頼）
（一三）小緣ひとま〳〵――布の織目々々。
（一四）高家――名族を云ふ。
（一五）浮世御座――石疊のやうに模樣を織り出した蓆。
（一六）婿に――この上に「かゝる調度を持つた娘の」字を補つて見る。
（一七）よき種蒔て――「蒔きてのみならむ」と補つて見る。「繊草」は種蒔の緣でつづけた詞。
（一八）貳貫六百目――これは銀。一兩六十匁替とすれば金四十三兩一分强。
（一九）赤根染――茜草を原料として染める。加州石川郡山田の産を上とす。
（二〇）一疊づり云々――「それでは」と上の「小い氣」をうけて「一疊釣の蚊屋に人つたやうで身の置所もないではないか」の意。
（二一）八幡――近江愛知郡の地名。

賣の女の腰卷を暗に指して云ふ。

してこんな事あるべし。扨も是はとおどろきける。時に亭主此中へ入、手枕してゆるし給へしばしかりねの夢。是に浮世御座長枕、婿に成人の果報は、前の世によき種蒔て、今はへ出る戀草のはじめ、町人にもかゝる嫁入蚊屋、公家も大名も大かたの楽は成まじ。此一釣に貳貫六百目入ける。いかに分限なればとて是は奢の沙汰といへり。面々の身しのぐためなれば、近江布の蚊屋に赤根染の乳緣付しを釣ても、無理に蚊がはいりもせずと、ちいさいきからいへば、一疊づり程になりて身の置所なし。そも〳〵近江蚊屋の出所は八幡の町より仕出して是諸國に廣まれり。中にも扇子屋といふ人、むかしはすこしの酒片見世に米商賣しけるが、内義才覺にて手づから釣かけ桝を持て、米酒にかぎらずわづか一升買する程の貧者には、利德かまはず斗よくして手びろう見せける。ほとなく一國によき事いひふらして、在々所々山家のすゑまでも、此町の市に立人歸さに、此家の兩口よりくんじゆして、萬を調へて歸れば、一日に錢の山白銀の洞も出來分限。後には大かたの咳氣には、藥の代に爰の諸白にて直しぬ。其家

（一七）よき種蒔――「蒔きてのみならむ」と補つて見る。
（一八）貳貫六百目――
（一九）赤根染――
（二〇）一疊づり云々――
（二一）八幡――
（二二）釣かけ桝――桝の隅から對角線に他の隅に鐵を張り渡したもの。米を量る時、その準に滿たして升掻を用ひる。
（二三）市に立人――市で商賣する人。凡倭俗毎物、多楽二所、賣レ元、買者亦楽會、是謂レ立レ市」（雍州府志）
（二四）兩口――米と酒との兩店。
（二五）くんじゆ――群集。
（二六）咳氣――風邪。

（一）吹付けるやう――心搭へしないのに自然、集つて來るを喩ふ。「吹く風」「涼しく」「扇」「風」はそれ〳〵縁語。

（二）江州の布高宮買とりて――「江州の布を高宮より買とりて」高宮は近江國犬上郡にあり。

（三）千駄――馬一駄は四十貫目の重量をいふ。（徳川禁令考）

（四）廣敷――臺所茶の間につゞいた廣間。

（五）によごの島――女護島。

（六）玉に疵――この諺から玉を娘の名に見立て、すぎ・たけと名を出したのである。

（七）六尺――駕舁人足。

（八）毘沙門――百足は毘沙門天の使と門の俗説。鞍馬は愛宕郡鞍馬山の鞍馬寺で毘沙門天を祀る。延暦年中藤原伊勝の創建る。（雍州府志）

（九）正月物――正月用の衣類調度。

（一〇）こしらへし――準備する。

（一一）しかじ――併し。

（一二）北野の千貫松――北野は山城葛野郡北野天神のある地、千貫松は枝ぶりのよい老松で、武者小路通に

富貴に成時は、諸事吹付けるやうに心涼しく扇に家の風ぞかし。其後は江州の布高宮買とりて國々に出見世、殊更京都四條東の洞院の店には、毎年縞布ばかり千駄づつ賣拂ひける。疊の表は大坂に見世出し、次第に大商人と成ぬ。是より年々仕出しの蚊屋、何程といふつもりなきに、世界の廣き事おもひやられける。毎日蚊屋縫女八十人餘、乳縁付る女五十人、大廣敷にならびたるはさながら是によごの島のごとし。されども是程の中に、都めきたる娘はひとりもなかりき。玉に疵すぎに出尻、だけが口の廣さ。朝夕の食事とて飯櫃にくるましかけて、六尺三人引てまはり、手盛の扨子百足のあしのごとし。鞍馬毘沙門もかゝる臺所をまもり給ふべし。年中の事なるに、それ〳〵の人つかふ智恵もあるものかな、二度の仕着もひとり〳〵の願ひ、染色紋所まで付てとらせける。此外手代あまたなれば、はや八月より正月物をこしらへし、萬事は手まはし次第なり。是迚もやう〳〵旦那といはれて親子四五人の口を過る外なし。しかじ一人のはたらきにして數百人をはごくむ事、大かたならぬ慈悲ぞかし。此心の德ゆへ下々も草木もなびきて、むかしより住なれたる庭に、枝ものふりたる松有。北野の千貫松淡路の萬貫松にもおとらず、是ちとせの眺めなり。されば人の渡世ほどさま〳〵なる物はなし。片田舎にさへかゝる人もありけるに、萬屋

（一三）淡路の萬貫松――萬貫松も千貫松と同義。淡路雲屋附近の繪島の龍松の事か（淡路名所圖會）

（一四）千貫――千貫は千貫目。

（一五）割物――算盤の割算。

（一六）見せに來る――銀の性合を鑑別して貰ひに來るのである。

（一七）我一分の外――自分一人前の事以外に。

（一八）勝手あしく――家計が不如意で。

（一九）所――住む所、即ち京。

（二〇）質――資本。「質（モト）、商之モトデ」（易林本節用集）

（二一）千本通――「本名朱雀通、北は鷹峰に通じ、南は九條に至る。其南は魚羽に至り伏見淀に通ず。是則洛陽西の究意なり」（山州名跡志）

（二二）四五年――四五年かつてもの意。

（二三）在所――田舎。

（二四）きも入――肝入。周旋する。

（二五）六拾目――周旋料。縁組の仲人は、持參金の十分の一をとるが普通であつた。

當る西笹屋町大宮の西天道の宮の町にあつたと。（京羽二重）

甚平とて出生京の寺町通三條にてそだちければ、腹の内より都の水を呑、諸人のかしこき事を聞なれ、身過は何にしても五人三人は世をわたるべき事なるに、やう〳〵女夫の口をすぎかねしは口惜き事ぞかし。然も此男、手は帳の上書する程なり、算用はむつかしき割物も埒をあけ、銀は兩替より折節は見せに來る事有、何にても一分別させて事のすまぬといふ事なし。長口上あざやかに、すこし料理も心がけ、うたひも人の跡にはつかず、碁將棋も人の相手になりかねず、我一分の外人の役にも立ける。されども勝手あしく、所にて商賣成がたく、春は慰み本、夏は扇子、秋は踊道具、冬は紙子、其時〳〵の物を仕込、此二十年ばかりも江州にかよひ商ひ、宿には一とせを二十日ばかりも女房共の貌を見る事ぞかし。京にはやる咄しに哥を習ひ覺へ、商ひする御機嫌取に、夜晝あそびものに成つて、つまる所は夫婦の口を喰て通るぶんなり。幾年か貳百目の質、のびもちゞみもせず年を越けるに、千本通に母かたの姨ひとり過して暮されしが、いとしや頓死いたされしに、我ならで跡弔ものなければ、此時の物入に銀三十目あまりつかひしが、隨分始末しても四五年此銀もふけかねて、何とぞむしかの貳百目に成事を願ひしに、旅宿の亭主に賴まれ、在所へ養子をきも入て、思ひの外なる銀六拾目禮をとりて、一代の仕合此たびこよろこび、極

月二十五日に江州八幡を立て京都に幸の道づれ、爰の問屋より拂ひがね、持てのぼる人、是程慥成事なし。道中いそぎけるに、草津の宿の矢倉といふ所は姥が餅の名物、勢田矢橋の追分なり。近付の茶屋にしばし休みて氣色を見るに、鏡山の曇晴て松に風絶、海に浪の音なくけふこそ渡し舟の乘日和といへば、甚平中々合點せず。おの〳〵は御勝手次第、我等は歩行路へまはり行。其子細は人の命に替なし、殊に金銀の荷物を定めなき舟につむ事なし。兎角大事の身なれば、渡しはいやに極めける。問屋若い者腹立して、はる〳〵道づれ爰までまいりて、此日和に何の氣遣かあるべし。我等は小判千三百兩持て此渡しに乘ける。此身其方の身とて何程の替りあるべし。大分の銀持、身を大事にかけ給へといひ捨て、矢橋のかたへ行ける。茶屋甚平に申せしは、いつも舟にのる人が何とて此天氣に用心し給ふといへば、此たびは仕合よく五六拾目も銀子のばしければ、身が大事におもはれて、いかにしても船に乘れぬと、胸おちつけて勢田にまはる。大津のもどり馬はあれど是にものらず行程に、石山の晩鐘聞頃粟津野を行に、松原より牢人らしき男貳人出て、近比無心ながら今時分の事なればよく〳〵さしつまりたる事とおぼしめせ、年取物を申請るに荷物に手をかけしに、色々詫ても聞いれねば、是非なく肌に付たる銀取出し、貳人に八十目ばかりとられて、扨も物うきひとり旅。身の程うらむより外はなし、我一生何程かせぎても、銀三百目より内の身體に極る所を覺悟して世を渡りぬ。

（一）是程慥成事なし云々――これほど確實な信用ある道づれはない。その人と道中を急いたがの意。

（二）草津――近江國栗田郡にあり。「草津より大津まで三里半六町……、やくら、追分これあり。」（東海道名所記）

（三）姥が餅――「草津の姥が餅仕出せしは札の辻なりしが、矢倉とて矢橋のわたりへ行く所に、幔幕の看板出して餅賣りしより、根本となりて繁昌しぬ。」（商人職人懐日記）

（四）追分――追分道。

（五）鏡山――近江の歌枕。蒲生郡鏡宿の南。「曇晴ては一鏡」の縁語。

（六）定めなき舟――危い舟にのせる事はできない。

（七）渡し――渡船。

（八）氣遣かあるべし――ある「べき」と云ふところ。次の「替りあるべし」も「べき」である。

（九）乘ける――「ける」は誤法。

（一〇）大分の銀持――問屋の若者が甚平を冷嘲した詞。

（一一）のばしければ――財産を延ばしたから、こゝは「もうけた」からの意。

（一二）もどり馬――大津へ戻る馬。從つて賃金も安い馬。

（一三）石山――石山寺、良辨の草創。

（一四）粟津野――近江國滋賀郡膳所村。

（一五）牢人――浪人。

（一六）年取物――暮と正月との費用。

西鶴織留本朝町人鑑

目錄　二

㊀　保津川のながれ山崎の長者
仕合と猿の口より金目貫
商ひの元手に片壹枚

㊁　五日歸りにお袋の異見
梅は二代もなれどかなしきは老母
國にひろがる一卷唐織

㊂　今が世の楠の木分限
無用のなゝつ道具
本でへらさぬ評判

㊃　鹽うりの樂すけ
島のさいふ書付相違なし
かくれなき都の聖人

㊄ 當流のもの好

猩々變じて出る目出たき御代
世間にかくれなき小川屋のながれ

西鶴織留本朝町人鑑

一、保津川のながれ山崎の長者

本朝は天照大神元年より今元祿二年の初春まで、二百卅三万六千二百八十三年。此國豊に續てなを君が代の松はひさしきためし、富士を常住の蓬萊山、不老門のひがしに武藏野の滿月、外天のひかりに同じからず。御紅葉山の木すゑ千秋の色をまし、万歳の海龜さゞ浪靜にすめる、江戸は天下の町人北村奈良屋樽屋をはじめ、諸國の惣年寄・金座・銀座・朱座・此外過書の舟持世上に名をふれて、是皆町人の中の町人鑑といへり。時に都の嵯峨の角倉は其家榮て長者のご

（一）二百卅三萬云々――この紀元年數の所據は不明である。「比古婆衣」の日本紀年暦考に神代の年數を考證してあるが、それによれば元祿二年までは二百三十四萬四千六百二十五年となる。

（二）不老門――支那皇城の門の名。こゝは富士山を蓬萊山に見立てたので、直ちに不老門とつづけて、不易の姿を喩へたのである。

（三）外天のひかり――他國の空とは違つて光り輝いてゐる。

（四）御紅葉山云々――江戸城内の紅葉山。即ち將軍家の繁榮をいふ。「紅葉山に千秋の色まさりて、久方の日影……月むさしのに廣く清み……」（「日玉鉾」）

（五）北村奈良屋樽屋――江戸の町年寄、本町一丁目ならや、市右衛門、樽屋藤左衛門、北村彦右衛門。一、金座、本兩替町後藤庄三郎。一、銀座京橋末吉孫九郎。一、朱座、新橋淀屋太夫。「江戸鹿子」諸職名匠諸商人の部）

（六）金座――德川幕府の金貨鑄造所。御勘定奉行の管轄。長官を御金改役と云ふ。後藤光次の子孫の世襲。江戸本町一丁目に役宅を置く。

（七）銀座――銀貨鑄造所。御銀改役は大黒作兵衛の子孫の世襲。江戸の銀座は京橋の南。

（八）朱座――官の監督の下に朱及朱墨の製造賣買を掌つた所。

（九）過書の舟持――過書船過所船。「過書船、淀河筋運送の舟、三百石を積むべし」（嬉遊笑覽）。「過所とは關の切手なり、關の切手持たる舟を過所船と云ふなり、今はその名ばかり殘れり」（南留別志）

（一〇）町人鑑――町人の手本

（一一）角倉――了以、通稱七。江戸初期の貿易商、土木家。慶長年間高瀨川を開鑿す。慶長十九年歿、年六十一。而して當時は角倉與一、木村源之助が淀川過書船の司配をしてゐた。（京羽二重）

（一二）其家榮て長者のごとし――「俳諧當世男」（延寶四年刊）に「たゞ見て造る船つき賬ふ、いやが上富を重ねし角の倉」とある。

とし。然も二十餘人の子實、(一)いわ井の水の高瀬川に、すぐなる道橋のわたり初して、此流れに一(二)棚舟をかよはせ、俵物薪をのぼし、洛中のたすけと成、竈の煙にぎはへり。又保津川のながれは丹波の龜山につゞきて、嵯峨まで二里あまりの所、近代切ぬきの早川、是を自然と乘覺て船人ちからも入ずして、岩角よけて瀧をおとし、ひだりは愛宕右は老(四)の坂、此山間の詠め松島をちかふして見るぞかし。有時山崎寶寺のほとりに、油のうけ賣して山家がよひの商人、此舟に乘てくだりしに、猿(六)飛といふけはしき所を、むらざる數かぎりもなく渡りしに、二疋つれたるこけざる(七)が栗の梢を傳ひ、此川をわたりかねたる風情見えしに、折ふし狩人のまはり來て鐵砲にねらひよれば、先に立たる猿の身をもだへて鳴さけび、跡なる猿に指をさしておしへければ、狩人笑つていかにおのれが身をたすけむやと火蓋を切ば、あはれや二疋ともに落けるを立寄て見しに、一疋は玉は當り又一疋は身に子細なくて手に一尺あまりの木のきれを持ける。是を不思議と見るに、ふびんや目くら猿なるが、泪を溢(八)しころされし猿の事をなげくありさま、是がためには子猿と見へける。親(九)に心をつくし年ひさしくはごくみけるとおもはれ、早船をさしとめ各是をかなしみしに、狩人は彼目くら猿も即座にたゝきころす(一〇)を、山崎の商人錢二百文に買とり我里につれ歸りて、二

(一)いわ井の水――「千代のためしを松蔭の、岩井の水は藥にて、老を延べたる心こそ、猶行末も久しけれ」（謠曲養老）を參照。「いわ井」には「祝ひ」の意もこめてある。
(二)一棚舟――船棚（せがひ）ある舟。船棚とは、船側にある緣の如き板を云ふ。（和訓栞）
(三)近代切ぬき――これも了意の開鑿である。
(四)老の坂――葛野郡大江山の右、丹波街道。
(五)山崎寶寺――山崎乙訓郡大山崎村祝陀落山寶寺。行基の開創。（山崎合戰の時秀吉の本陣をおいた所。）
(六)猿飛――嵐峽の名勝の一。「叫猿峽、舊名猿飛」（雍州府志、九）
(七)こけざる――汚い猿。（九州方言に殘れりと）
(八)溢し――原本「洒し」
(九)親に心をつくし――子猿が親猿にである。
(一〇)たゝきころすを――叩き殺さんとするを。

どせあまりも飼置隨分いたはりける。その年のくれになりて、此油賣わづかの事に仕舞(一一)かねて、借錢のかたへ有物をわたして身體たゝむ談合を夫婦ひそかに極めて、朝(一二)は所を立のく十二月廿七日の夜ふけて、猿にも人間にいふごとく、浮世とて我かく成行ば、獨ある子をさへすつる時節なれば、汝は此家に殘し置、自を恨む事なかれと、せめて春までの喰物あるにまかせて、節分の煎大豆のあまりに黑米すこし手もとに置て、夜の中に爰を出て行用意して、火爐(一三)のあげに子を入、片荷に小鍋ひとつ、繼々の袋に粉麥小豆など取まぜ、女は持佛堂を明て珠數取出して手にかけ、辻(一四)のぬけたる葛笠を被き、住なれたる我宿の名殘、誰かは爰に世帶せん。おもへば惜き香の物桶かくなるべきはしらず、此夏の瓜茄子鹽の辛い物を喰ふとて無用の水の飲置、兎角に欲過たる事はせまじき物と、をかぬ棚(一五)までまぶりて鐵漿壺をうち洒し、見る程萬こゝろにかゝれば、すこしもはやく家を出給へと、泣出せば、男も泪ぐみ、さりとは無念(一六)成世間や、聞ばこれほども京には町人分(一七)として、壹萬八千貫目の借銀、十年切の年賦にして利なしに濟すも有、此家の年中の豆腐の通ひ(一八)に〆八百三拾丁、此代七貫七百六十貳文の拂ひ、家に應じて諸事の物入大分なり。我等は此豆腐の錢(一九)を持ばゆるりと年を取けるに、扨も是非なきに仕合とひそかに立出るを、最前の目くら猿、女

(一一)仕舞かねて――節季を越しかねて。
(一二)朝――翌朝。
(一三)火爐のあげ――炬燵の櫓。
(一四)辻――笠の頂のところ。
(一五)を（置）かぬ棚までまぶる――諺。初めからない筈のものを求めさがす。「まぶる」は見廻すこと。
(一六)無念成世間や――無念なる世間や。
(一七)町人分――町人の身分。
(一八)通ひ――通帳。
(一九)錢――銅錢で、寛永通寶をいふ。元祿二年頃は錢一貫文が銀十三匁内外の相場。

（一）かたし目貫――單に目貫の片方。また刀の目貫の作方の作りの異つたもの。
（二）幸若――義滿の頃、越前の城主桃井直常の孫直詮（幸若丸）が叡山の稚兒であつた時、寺僧の慰みのために始めたと云ふ。
（三）山中にて云々――猿太刀の傳說は明でない。「殊勝な所幸若の舞、群猿もしかたの山の道とめて〻大矢數」とあるので、當時の俗傳らしい。
（四）夜ぬけ――夜逃げ。
（五）世をかざり――世間體をつくろふのと、後の松飾にかけた詞。
（六）ゆがみなり――門松の曲つたさまと、漸くにして年の瀨を越したこと。
（七）しめさせける――油を締めさせるのである。
（八）正直の頭――諺。
（九）關の明神――「關戸明神、在山崎南方關戸云々」（雍州府志）
（一〇）和光の影――和光同塵の語（老子）より出づ。光輝をかくして俗塵に交るの意であるが、こゝは明神

房の裾にすがりてなげく風情。人に別るゝこゝちに貌を見かへれば、此猿口うちより虎のかたし目貫を取出し、內義に手わたしいたしぬ。男是を見れば金三匁あまりのむかし目貫なり。是はやさしき心ざしの嬉しや、昔日舞大夫の幸若越前より都にのぼる時、山中にてむら猿舞を望みて後、太刀を一ふりほうびに出しける、是猿太刀とて幸若の家に傳へり。今又是を我にあたへしは天の道にかなへり、是にて節季の仕舞はなる事ぞと又分別替りて、夜ぬけの事は沙汰なしにして、彼目貫を兩がへして、買掛のかたへすこしづつ渡して世をかざり、松もゆがみなりに年を越て、明の年は商賣に油斷なく、それより次第に家榮て、後には手前にてしめさせけるに、おのづから正直の首に付る髮の油もよく、關の明神へ燈明あぐれば、和光の影淸く、十四五年のうちに山崎の長者なとり、內藏にはよろづの寶寺、うち出の小槌は目前の油槌と心得て、楠の木分限といふ物に、ちく〳〵延て朽る事なく、ひとりの男子も十六になりぬ。渡世の智惠付に、年玉の扇箱をのせたる片一枚に、錢二文添て是をわたし、汝が工夫にて商ひの元手にせよといひ聞せける。一子しばらく思案して、一錢にて紙調へ一錢にて糊を買、くだんの片を張立、黑星を書付て鐵砲的の角に仕立見せけるに、親仁中々同心せず、おもひつきはよき細工なれども、是は賣の遠き物也。

の德を示す燈影をいふ。
（一一）寶寺――山崎の寶寺。この寺の什物に打出の小槌なるものがある（山州名跡志）
（一二）楠木分限――楠の芽の如く伸びてゆく資產家、しかも手堅いもの。
（一三）ちく〳〵――少しづつの意。
（一四）朽る――楠木の緣語。
（一五）片――杉、檜の薄板。
（一六）的の角――菱形の的「角」は格。「倭俗鳥銃謂鐵砲、正鵠謂格」（雍州府志）
（一七）位牌知行――親ゆづりの知行（俚諺）。
（一八）百――百文。「利を掛けて」はその利息で兩掛屋に預けること。
（一九）大名借の銀親――大名へ金銀調達の兩替屋。當時京の兩替屋は預金に利子をつけて、預金を募集し大阪のは無利子であつたと。（竹越氏、日本經濟史）
（二〇）壹貫目の銀云々――年一割として三十年の元利合計は、一七貫四四九四〇

是を二つに割て、袴の腰板にせよとのをしへにまかせ、京の羽織やの見世によりはじめて錢六文に賣て歸り、それより我と才覺して富貴になりぬ。親の讓の金銀にて身を過けるは、武士の位牌知行取て暮すに同じ。されば人出生してより毎日壹文づつを溜て、百より一割の利を掛て、六十歲の時は六拾貫目になりぬ。是をおもへば万事に始末をすべし。銀子を借て利銀のかさなるをおもへば、是よりよき事はなしと思案して、銀壹貫目有時山崎の親の跡を捨置、京にのぼり、大名借の銀親へ賴みて、是を預け置しに元壹貫目の銀を一分の利にして、三十年其まゝにかし置けるに、元利合て貳拾九貫目九百五十九匁八分四厘一毛になりぬ。此丁銀箱入にして請取、是より次第に借掛て、程なく千貫目持と成、それより一代のうちに七千貫目慥に有銀。廣き都に三十六人の歌仙分限の內に入ぬ。そも〳〵親の手前より片壹枚錢二文もらひしを、かく長者になる事、町人の鑑也。洛陽分限袖鑑の第二十八番目に、山崎屋と見えしは此人の事なり。子孫つゞきて棟をならべ、門の松を飾り、目出たき春をぞかさねける。

三となり、年一割二分（月一分）とすれば、二九貫九六四（對數による）となり本文に近くなる。
（二一）歌仙分限――分限者三十六人を三十六歌仙に擬ふ。
（二二）洛陽分限袖鑑――京都の資產家を一覽にした本であらう。
（二三）產土產（にも見ゆ）

（一）六分にまはれば――六分の利廻になれば。
（二）百年目――あきらめの詞。仕方がないの意。
（三）借屋の出入――貸屋についての紛擾・訴訟。
（四）帳切銀――家屋敷を賣買する時に買値の四十分の一（寛永十一年後は二十ノ一）を上納する金をいふ。帳面銀とも云ふ。
（五）年寄――町内の有力者で、町の世話役。
（六）五人組――一京阪は自地の町人と家守とを混じて五戸相保するを五人組といふ。二（守貞漫稿）
（七）賣券狀――家屋敷賣渡の證文。
（八）利銀――家賃分に云々――貸銀の利子として家賃をとるから十四年目には元銀を取返した上、地は我所有となる。
（九）心せはしく――經濟の逼迫する。
（一〇）内證にも云々――貸家についてのいさくさは訴訟になるからの意。
（一一）勝手――經濟的。
（一二）西國――西國米。
（一三）緣付――緣談緣組。
（一四）緣付仲人が十分の一（手數料として）を取るによつて。
（一四）かたり半分――大體として詐欺行爲であるの意。
（一五）男のかたに――男の方で僞をいふ段になると……。
（一六）頼み――申込み。
（一七）言入――結納。
（一八）乞つめらるゝ――手きびしく請求される。
（一九）手形銀――證書を入れて借りた金。
（二〇）五日歸り――里歸り。
（二一）品あしく――儀禮を粗略にする。
（二二）文作り――ごまかす。
（二三）杉原――杉原紙。播州杉原の產。
（二四）お乳――お乳の人、乳母。
（二五）歸り〳〵――歸るとすぐさま。
（二六）おふくろ――嫁に行つた娘の實母。
（二七）まだも――まだしもせめての意。
（二八）敷金の事は是非もなし――これ以下「母の言葉をひとつも忘れな」まで、母が娘に云ひふくめる詞。
（二九）鹿子の物――絞り又は染めたもので、衣服であ

二　五日歸りにおふくろの異見

六分にまはれば大屋敷買ふて、借屋賃取程慥成事はなし。火難ひとつの氣遣、それは百年目。十四年には本銀取返し、地は永代の寶ぞかし。近年分限者ども、我名代にして家を求めても、借屋の出入をむつかしく、たとへば百貫目にても、其高に應じて帳切銀さへ才覺すれば、何程にても銀子取替、家の主となし、年寄五人組の連判にて賣券狀の上に、利銀は家賃分にして是たしか成借物なり。又借人の心せはしく然も内證にも濟事にあらねば、町所へ外聞を包にもあらず、何が勝手に成事ぞといへば、西國を引請て新問屋する人、又は請判に立人、あるひは在郷より敷銀の付養子又は娌をよび入る思案にて、先居宅見せかけにして、自然とよい事をしすましたる者も有。今時の緣付仲人十分一取によつて、大かたはかたり半分なり。娘の親のかたには僞りいふにしてから、二十二三までも振袖着て置て、十七の八のと年を隱す分にて別の事なし。男のかたに僞いふからは、頼み言入の絹卷物包銀も當座借にして、婚禮調ひ敷銀を請取るといなや、乞つめらるゝ手形銀を濟し、はや五日歸りより物毎に品あしく、仲居お物師もけふまでの約束と祝儀のすくなきにふそくいひて、娌御の乘物より先に立て歸る。里へのみやげ物に菓子屋へ相重取に遣はしければ、前々の銀子大分なれば、又其上には掛商ひならぬといふ。看屋からはある鯛をないとておこさず、やう〳〵紙屋を文作り、何にも角にも杉原を進上物に娌をおくれば、介添お乳は歸り〳〵不首尾ひとつ〳〵おふくろにつげて、まだもあしもとあかいうちに御分別をあそばし、荷物取返しにといふ、女の身のかなしさは爰也。はや自由ならぬ事ぞ、世の聞えもよろしからねば、何事も沙汰なしにして、歸しざまに、敷銀の事は是非もなし、衣裝手道具を借といふて質に置れては取返しなし、何事も母人に問ねばなりませぬと、小袖一つも借事なかれ。もし姑がつらく當らば、此方へ見舞にくるたびごとに、二つ三つ鹿子の物をしれぬやうに風呂敷に包ませ、幾度にも長持を明がらにして、緣を切合點に身を取まはしたがよいぞ。とかふするうちに身持になればむつかし、子ない時に餘の男を持替へたがよい。男に飽るゝ仕掛は、朝寢して髪結ず、氣がつきて立ぐらみがするとて、晝も高枕して物いはず、剃日廿八日にも無理に貌つきをして見せ、鱠燒物も口にあはぬとてせゝり箸して、いそがしき中に汁粥を好み、一門

（三〇）緣を切合點に――離緣を辭期するやうに。
（三一）仕掛――企み。
（三二）氣がつきて立ぐらみがする――衰弱して眩暈がする。
（三三）せゝり箸――少し箸をつけるだけ。

（一）阿頗形氣――低調。
（二）退屈――嫌氣がさす。
（三）物言――いさかひ、言爭ひ。
（四）女旱――諺。女の少いこと。
（五）お物好成當世娘――身嗜みの華美な現代風の娘。
（六）風俗の惡い――容姿の惡い。
（七）新地――大阪堂島新地。
（八）濱――河岸。
（九）所務わけ――遺産分配。
（一〇）至極して――道理に叶つた、もつともな事。
（一一）内證の勘當――里への出入をさしとめられる事か。
（一二）手せんじ――もと墮胎藥を煎ずることであるが轉じて、自分を苦しめることと（特に女の身の上に云ふ）。こゝは下種（げす）働きに身をおとすこと。
（一三）帷子時――帷子着る時、夏季。
（一四）ときあけ物――解分物。「昔は今の如く四季折々の衣服なく綿をぬきて給とし、またときはなして解分衣と云へり今云ふ引ときも也」（近代世事談）
（一五）物毎後には合點の行事あり――凡ての物事は後になつて、成る程と氣のつくものである。「行事」は「ゆくこと」
（一六）當座のがれに質を置――當座のがれに質を置く事、はだめな事でと補つて見る。
（一七）生平――きりあさで織つた布。近江犬上郡高宮の名産。
（一八）加賀――加賀絹。
（一九）家質――家屋を抵當にして金を借る。
（二〇）手まはし――融通。
（二一）各別――格別。「格別であるが、それと異なり」と補つて下につゞける。
（二二）加判して云々――家質には五人組と名主（年寄）の連判が必要であつた。
（二三）口をたれ――自分を卑下して口をきく。
（二四）思ひ入れ――氣持、態度。
（二五）町代――町役人。年寄の下にて事務をとる。
（二六）手形仕替――期限が來ても支拂ができぬので證文を書きかへる。
（二七）賣出しも殘らぬ程――自分の持物一切を賣つて金に換へても、家質の代金ほど出ない程になる。「殘

つきあひにも阿頗形氣（一）に見られ、三日に一度づつかゝさま見舞といふて歸れば、後にはいか成男も退屈（二）して物言（三）する時、御氣に入ぬ女房を一日も見て御座るが惡い、さらりと埒の明事じやに、世界に女旱（四）はせず、お物好成當世娘（五）が何程にても御座る。わたくしが横ぶとりて風俗（六）の惡いは拾貫目の敷銀と、今でも阿爺樣のお果なされましたれば、新地（七）十間口の家、然も濱（八）にて裏に借藏迄建つゞきしを所務（九）わけに取ます、此家と銀とで見てもらひますと我まゝに言つのり、まことのつまりには此方から埒明て、せかずとも黑髪の先すこし切てなげ付、近所へひゞきわたるほど泣出し、人集めして其まゝ立歸れ。親の身として世帶を大事にかけよといふべき物を、男惡みして戻れと惡事をいひふくめけるは、よく〳〵聟のしかたのよろしからざる故也。女の大事爰ぞ、母が言葉をひとつも忘れなといへば、娘も是を至極（一〇）して其心に成て男の方に歸るに、一日づつ夜をかさね、なつかしげなる心たがひに通ひ、いかに親の御意なればとて、又男を持替るも人の本意にはあらずと、母の手前を背て、内證（一一）の勘當かまはず男とひとつになつて、身の裸になる事は扨置、後には手せんじ（一二）する事、世にあるならひぞかし。昔の名殘に有程の小袖ひとつ〳〵質に置あげ、人の帷子（一三）時にふる袷を身にかけ、世上に綿入れ着時、ときあけ物（一四）に風をしのぎ、世に有時の形

はなかりし。物毎後（一五）には合點の行事あり。貧者になつて當座（一六）のがれに質を置、請返すといふ時節なければ、當銀に賣捨て渡世をすべしと、年久しき小世帶人の語りぬ。兎角年々つもりておそろしきものは質屋の利銀ぞかし。生平（一七）の着ふるしひとつ、加賀（一八）の茶小紋の夏羽織、此二色をそも〳〵は元銀七匁五分借て、秋より明る年の夏まで預け、元利揃て毎年請出し、置たり取たり十九年に拾七匁一分の利をすまし、近年は次第に元銀さげてやう〳〵五匁五分づつ借て今にあづけける。又家質（一九）の事も、よき商ひを見掛け手まはし（二〇）のために借人は各別（二一）、親代より其宿賃にて世を暮せし人、子の代に成て無用のつゞくり普請、又はおのれに過たる萬事の奢より内證さしつまりて、同じ軒をならべて我物喰ば何か恐るゝ事もなきに、加判（二二）してもらへば五人組年寄に口をたれ（二三）、はや町中の思ひ入替りて町代（二五）も外程には腰かゞめず、髮結もおそくまはり、心掛りの事ども（二四）いと世間咄さへひかへて、おのづから人のまじはりうとし。此家質置時より、何して濟すべき分別なしに借ければ、程なく利銀ひとつ書込手形仕替（二六）て、年をかさねしうちに、賣出し（二七）も殘らぬ程に成て、其切（二八）を過れば借主より催促せられ、埒

（二八）其切――其期限。

持殘すこと。

のあかぬ事に幾度か町内へやかましき事を聞すれば、最前はいとしやと悔みし年比別して語りし人も、後にはうとみて借かたのせりたつるやうに内證いひて、是非なく家を渡せば老母ひとしほなげきて、此町に井戸のひとつもない時より此屋敷を求めて、二代も手のかゝらぬやうにとて、ふしなしの六寸角、此年まで此大黒柱にもたれかゝつて、水もらひにくる者にかみさまとて腰をかゞめさせ、茶事の座敷へも三番とさがらず、つれあいの影にて人にもてはやされしに、ひとりもひとりから〻と悴子が一心わるきゆへ、今となつて穴のはたを覗かゝり、葬禮は此家から花をふらしてうき世のかどで、中戸の上の高い玉の輿の自由に出るやうにと、こんな事まで氣を付てをかれし所を、別るゝ事のかなしやと、明藏を詠め、しやくし掛を引はなち、庭に豊後梅の花落比なるに、是もうらめしそうに、毎年五月には三斗四五升も取けるに、思へば惜やと枝々をたゝきおとし、此木我なみだ枯いかしと。無理なるしかた、女心には道理千万といへり。さぞ離れがたき心底思ひやられし。一子覺悟のあしさにかゝるうきめを見せける。しかし人の身體智惠才覺にもよらず、其まはりあはせにて、其家たゝむ時は他國して二たびかせぎ出し、古里に歸り妻にも錦をかざらせてこそ本望なり。女房に心ひかれ其所にて指をさゝれ、幽なる住ゐするは人間には

（一）最前――以前。
（二）別して――特別懇意にした。
（三）せりたつる――迫立る。督促の急なるさま。
（四）内證――この「内證」は家賃を置いた男の經濟狀態。そこで貸主が催促するので、遂に「是非なく家を渡せば」となるのである。
（五）六寸角――此家の大黒柱の大さ。
（六）三番――客の席次である。
（七）ひとりもひとりから――誘。人は一人一人皆逐ふもの。こゝは親とは似もつかぬ愚息であるの意。
（八）穴のはたを覗かゝり――年老いて死期の近づくこと。
（九）中戸――店庭から中庭に入る戸口。
（一〇）明藏――空藏。
（一一）豊後梅――花も實も大なる梅。
（一二）此木我なみだ――「此木、我涙によりて枯れよかし」の意である。
（一三）身體智惠――「身體は智惠才覺にもよらず」である。身體は財產。
（一四）まはりあはせ――運。
（一五）指をさゝれ――後指をさゝれ。嘲られ。
（一六）西濱――大阪北濱の南、西横堀。
（一七）ふりかへて――商賣を換へる。
（一八）身過なるべき所――生活のできる所。
（一九）薩摩の國の城下――鹿兒島。
（二〇）今ねたと聞えて――今寢たばかりらしく。
（二一）身上――世帶。
（二二）田の浦――鹿兒島のうち、磯濱へゆく途中。
（二三）祇園――田の浦の八坂神社。
（二四）絹一卷――一卷は一疋。

あらず。其頃大坂の西濱にて商賣せし人、數年おろかなく渡世大事にせしに、さま〻ふりかへてもおもはしからず。いまだ此身無事のうち遠國に立越、身過なるべき所を見立、老の樂しみは金銀成と思ひ極めて行に、中國路は上がたにちかければ、諸事都に替る事なし。四國のうちもおもはしからず、九ヶ國のうちを殘らず廻りて、薩摩の國の城下につきしが、長々の路錢につきて、旅寐の宿を借べきたよりもなく、和泉屋町大小路といふ所は船着に近く、何時によらず米味噌鹽を賣ために、ともしび家々にいまだ寐ぬ宿も有。せめて餅屋をたづね、門の戸をたゝきて餅買といふ。夫婦ながら今ねたと聞えて、鼠のあるゝを追まはしけるが、かゝが聞付て餅はいくらがのといふ。五文がの賣てくだされといふ。亭主が聲して、寐からは五文や十文がのは賣らぬとて其跡は返事もせず。扨も此所かせぎて見たき湊也。五文が餅を賣賣ぬからは商事のありあまると見へたりと、身上爰に極めて、一日暮しに年をかさね、わづかの油賣より資仕出して次第に家榮へ、是と申も佛神の御めぐみ成と信心ふかく、田の浦といふ所に祇園の立せ給ふ是に日參して祈ぬ。此濱の氣色、諸木岩組常に替りて古代より仙家有と言傳へり。ある夕暮に參詣けるに、十四五成艶女の近寄、懷よりふるき絹一卷取出し、母を養ふたよりにいたせば、是何程に成共求て給は

（一）それまでもなし――絹はいらない。たゞ上げようと銀を手渡したのである。
（二）見る人――鑑定者、目利き。
（三）小蔓――金襴襞涙の名。
（四）祇園女御――史上、白河院の寵姫として有名である。こゝは祇園のあたりで逢つた艶女の素性の明らかでないため、雲上のゆかりの人に見立てたのである。
（五）黄金八十枚――黄金一枚（判金一枚）は大判金（十兩）のこと。八十枚は小判にして六百兩になる。小判は大判に對して七兩二分替。
（六）兼好――徒然草の著者在俗時代は北面の士で、左兵衛尉であつた。
（七）北面――院附の武士。
（八）錢に文字ある云々――世事に疎い事をさす。
（九）短尺――短冊。
（一〇）菲に打入て――菲に恥る。「開菲双六好みてあかしくらす人は、四重五逆にもまされる惡事」とある。徒然草の文を思はせる。この邊り兼好を出し、榎倉正を聯想せしめる榎木原某を云々するなど、凡て「徒然草」に據つてゐる。
（一一）三百六十日――菲盤の目を一年の日數に喩へて云ふ。
（一二）松など灯連て――「つもゞりの夜いたう暗きに松ども灯して夜半すぐるまで人の門叩き走りて云々」（徒然草）
（一三）辨慶の借狀――「義經公旅宿古迹・川邊郡尼崎城下にあり、末家傳曰、元暦年中源義經公西國に赴き玉ふ時旅宿處也、疾風日を經て穩かならず、武藏坊借狀以て大豆十二石を貸ふる末家と云へり。」（攝陽群談）
（一四）借手形――借用證書。義盛と嵯峨の百姓との事は未考。
（一五）七道具――「辨慶の七つ道具と云ふことを世にも云ひ傳へ、繪にも鐵熊手・大槌・大鋸・鉞・つく棒・さす又・もぢり・たばねて背負ひたる體を畫く也云々」と、（貞丈雜記）――は義經記によつて彼の持物を考證してある。
（一六）身躰ならず――金廻りが悪いの意。
（一七）義盛は始末云々――

わるき人の迷惑、今の世に替る事なし。留守つかふて戸をたゝかれたるありさま、松など灯連て夜の明るまで酒屋で御座るといふ聲、せはしき人の心を書殘せり。又武藏坊辨慶が馬大豆八斗の借狀尼崎にあり。伊勢三郎義盛が嵯峨の百姓に五百貫の借手形もあり。これらは義經につかへて、然も辨慶は祿重けれども、無用の七道具をこしらへて身躰ならず。義盛は始末して手前のよろしきといへり。世に貧福の二つは是非なし。昔日京に吉文字屋といふ家、ひさしき手代二人、數年親かたのためにわたくしなく、内外ともに勤めければ、主人にそなはる仕合せとはいひながら、此二人がはたらきゆへ、有銀壹万貫目と惣勘定を仕立て、正月初帳に移し見せける。親かたも兼ての願ひ、一万貫目に叶へば此うへに望なしと、身のよろこびなしてけふより諸事をつぎの手代にわたさせ、先兩人は別家を持せ、一日替りに出入奉公と定め、よき所家屋敷普請まで して銀貳百貫目づつとらせ、兩方とも兩替見世を出しける。元より道をしりたる事なれば、借人の取まはし、小判の買込、錢の賣置、一りんもそんずるといふ事なく、年々分限になる事、其身才覺ばかりにあらず。是皆旦那より袈姓も れと云。心ざしふびんに、それまでもなしと折節有合せの銀廿匁あまり渡せば、只は申請じと是非絹を置て歸る。然れば取て戻り、見る人に見せければ是小蔓といふ唐織、世に稀と云。其後彼女の許を尋ね返しに行どしれ難し。扨は祇園女御のあたへ給ひし果報とて、都の人に黄金八十枚に代なしより、次第に分限と成、子四人それ〳〵に棟を並べ、世渡りは雫も洒ぬ油屋と家名其隱なし。財寶の外隱居分とて有銀三千貫目。大坂より爰に來ての住家、人皆見および、其身一代のはたらき、是町人の鑑ぞかし。殊更正直を本として、すゑ〳〵目出度はそなはりし仕合せなり。是を思へば商の道をしれる人の、うか〳〵と身を持くづし、びんぼう神とあひ住して世を果る事、人の本意にはあらず、合點して見給へ。

三　いまが世のくすの木分限

吉田の兼好（八）がひがし隣に同じ北面（七）の侍ひ、榎木原信道といへる人屋形ならべ住ける。いかに禁裏の役人なればとて五十餘歳迄錢（八）に文字ある裏表をも見しらず、然れば短尺（九）の上下をも覺えず。公家にも俗にもならず男、明暮菲（一〇）に打入て三百六十日（一一）の立事をわすれ、大年の晦日には借錢に乞たてられ、其時代も覺悟

（一八）仕合――幸運。
（一九）出入奉公――通勤すること。
（二〇）取まはし――貸人先のやりくり。
（二一）伊勢三郎に因み伊勢者の節儉なるを利かした諧謔である。

（一）沙汰――評判。
（二）おのれら――お前達。評判ゝ立てた手代どもに對する主人の呼かけ詞。
（三）其仔細――其の理由。この下に「一人は我が世になつて此のかたに」と補ひつゞけて見るべし。
（四）物入――失費。
（五）女房の頼みをやりける宵――「頼み」は既出。もと「申入」であるが、こゝは「約束・結納」程度までの意。夫とたのみ妻とたのむしるしである。
（六）延まじ――殖えまい。
（七）高ぐくり――概括的に査定すること。
（八）世間にさしたる――世間で評判する。
（九）おひたをさるべき――負債のために倒される。
（一〇）智有云々――「智仁勇者、天下之達德也」（中庸）
（一一）粟田口神明宮――山城愛宕郡「在日岡村下粟田惠比須谷」（雍州府志二）
（一二）粟栖野・小野・山科・勸修寺――すべて山城、宇治郡山科村の字名。
（一三）勸修寺――こゝは宇治に近く茶を賣る店などがあつた。
（一四）盆に鯖もすはらず――盆に鯖を膳に上せる事ができない。「此月（七月）賞二鯖魚一双一。稱二一挿一」日次紀事）
（一五）粟菊酒――「今日良曦者三繧色小袖一、互相賀飲三菊酒一、食三蒸栗一云々」（日次紀事、九月九日）
（一六）内證の樂介――内實の樂々としたのを樂介と擬人法にしたのである。
（一七）折ふしは――丁度この時は。
（一八）我人物前とて――我も人も、即ち誰もが物前（物日の前、節季の前）とて。この物日は九月九日の節句を指す。
（一九）御所染――「寛永の頃、女院の御所にて好ませられ、多くの絹を染めされてに賜はる。此染京田舍にはやりて御所染と云ふ（近代世事談）
（二〇）中立賣――一條の南の通、烏丸から千本通まで。
（二一）御服所――貴族へ御出入する呉服屋。「呉服屋、中立賣西洞院後藤縫助」（人倫訓蒙圖彙）

らひしゆへなり。一人はいまだ十ヶ年の立ぬ内に、はや五百貫の身躰になりぬ。又壹人は親かたに渡されし二百貫目今に延ず、やう〳〵渡世をして暮しぬ。此兩人の内證を聞合せ、同じ銀子を請取りても手まはしによつて、あの如く成物ぞと、指ざしせぬばかり手代仲間にて沙汰しける。親かた此事を聞付て、何か愚智のおのれら、身すぎにかしこき者の事を評判いたしけるぞ。あれなればこそ今に本銀へらさず世をわたりぬ。其仔細は我世になつて此かた、仕合つゞきて一つもさはる事なし。又壹人は世帶持て其としより、人の氣つかぬ物入相つゞき迷惑しける何のかんがへもなく人の身上を沙汰いたす事、おのれらが了簡のおよぶ所にあらず。此もの女房の頼みをやりける宵より、あら氣のどくや、最早いかほどかせぎたり共銀も延まじと高ぐくりにおもひしなり。なんぢらも知るごとく、舅は八百貫目と世間にさしたる分限者也。娘は年わかくしかも町でも沙汰する程の器量よし、われしらずの物入有とは、あたまからしれたり。舅は年中壹分の利相にしても八拾貫目の男なり。聟は漸二拾貫目、たとへば大勢の敵を、小勢にてふせぐに勝利を得る事はなし。つゐにはおひたをさるべき事なれど、楠にもおとるまじき商ひの軍法者なればこそ、いまだ本銀にて城郭を堅めけるは、よき大將ならずやといはれけり。手代ども聞て、寔に一生一萬貫目の身體となられける。天晴よき大將、智有仁有勇有と、みな〳〵たのもしく奉公を勤めける。

四　鹽うりの樂すけ

粟田口神明の宮のほとりに、軒端に手のとゞく笹葺の庵をむすび、夫婦すみ佗て六十餘歳まで子のなきものゝゆくすゑのかなしさは、女房は男の手業の沓を作りて、窓のくれ竹に結添、大津にかよふ馬かたに賣て渡世のたよりとなしぬ。男は毎日京に行て、計鹽を商賣してやう〳〵けふを暮し、明日の身のうへをかまはず、宿に歸れば栗栖野小野の萩柴を折くべて、山科の里芋に勸修寺のせんじ茶して、樂しみ是に極めて、世にある人の榮花もうらやむ事なく、只年中を夢のごとく正月に餅もつかず、盆に鯖もすはらず、九月の節句ちかづけども栗菊酒の用意もせず、取集める掛銀もなく、人に濟する借錢もあらず。扨もかろき身躰、外より見ての苦しみ、内證の樂介各別ぞかし。折ふしは九月八日、我人物前とて足音つねとは替り、被きたる御所染すがたの京女蔦も、とりなりかまはず道いそがしき世間はゞかりなく、中立賣の中程にいづれの御服所とは

（一）拾五六―拾五六間か。
（二）棟あげ――上棟式。
（三）面客――表客。主賓。
（四）島臺――「洲濱の臺に三の山を作り、松竹鶴龜などをの作り、その下に肴を盛る」。（貞丈雜記）
（五）七盃機嫌――盃の數を重ねた上機嫌。
（六）あらためて――儀法通りに吟味する。
（七）鬼門――陰陽家では鬼星ある方角を鬼門と云ふ。即ち東北の隅を指す。
（八）五百八十――末長きを祝ふ意をこめた數。
（九）作事――建築。
（一〇）火ふくちからもなし――提灯の緣、貧困の喩へ。提灯の緣にて火ふくと云ふ。
（一一）きら――雲母（きら）。
（一二）さしづ――指圖、世間の評價。
（一三）おさかきたご――義播きだこ（屏風）。「をさかき」歳を作る人。「竹をもつて品々に組むなり、長緣・打樋・棟等、品々の職人かはれり」（人倫訓蒙圖集）。こゝはその仕事で手にたこ

しらず、表口拾五六立つゞきたる屋普請、けふ棟あげの祝儀とて、幕うちまはして金屏毛氈色をあらそひ、庭には樽肴持つどひて帳付隙もなく、臺所の役人それ〴〵にうけたまはり、一門の女中花をかざり、面客は松竹の島臺まはして酒宴はじまり、さま〴〵の藝づくしいづれも七盃機嫌の大笑ひやむ事なし。番匠は烏帽子裝束をあらためて、白幣をかざし鬼門よける弓矢をそなへ、拍子をそろへて棟の槌をうちそめ、万歳樂と言葉をかさね。五百八十の餅を蒔ば、是を拾ふ人大通もせばかりき。立とゞまりて見る人ごとに、かゝる作事をして世をわたるこそ長者なれ。あのごとくして子孫に渡したき願ひなきは一人もなし。財寶に望みなき人は、何となくうち眺めて通りぬ。立とまる程の人は皆人のたからをかぞへて、殊更内藏に目を付けるは、何の用にも立ぬ欲なり。此あるじも二十年以前までは、提灯のはりがへして、火ふくちからもなかりしが、何から分限にならぬといふことなし。すこしの事に氣をつけて澁面にきらを引て、雨夜のちやうちんといふはじめて、今七千貫目持と世間のさしづに違ひなし。おさかきたごの手せし人にもあらねば、都にもむかしは大かたに吟味して、歴々の緣組せし事、いふもくどけれども兎角世は銀のひかりぞかし。彼鹽賣ばかりは家作りの望みもなく、よき聲して小歌にひやうし踊をおもしろくしばら

の出來た人の意。「たご」は「だこ」である。
（一四）奥島――奥縞。「桟留縞、幅三尺九寸、丈三丈二三尺、もやう赤糸入の立縞を谷に奥島と云へり」（萬金產業袋）
（一五）もらかし――貰はせる。與へる。
（一六）こまがね――細銀、小粒の銀。
（一七）所をふれて――住所を人々に知らせて。
（一八）西行櫻の町――室町通三條下ル町。この町は祇園祭に黑主山（西行櫻の山）の山車を出す故に云ふと。
（一九）ことはり――事理。眞實の事情。
（二〇）欠落――逃亡。
（二一）雖儀、鹽賣京に――「雖義にて、鹽賣の京に」と助詞を補ふて見る。

く眨て、見物皆々立のきける時、奥島のさいふを拾ひあげて、是おとしたるぬしはなきかといへば、年の比五十あまりの法體の人、我おとしけるにもらかし給へといふ。成程返し申べし、しかしうたがふにはあらねど、中には何が入けるぞといふ。こまがね百目ばかりありといふ。鹽賣大きに眼色かへて、年にこそよれ、扨もさもしき心底なり。中は金子なれば其方の物にはあらず。是おとしたる人我宿にたづね給へと、まぎれなく所をふれて歸りぬ。その夜室町通西行櫻の町菱屋といふ絹屋の手代たづねて、小判百二十兩西國問屋より請取、主人の手前迷惑仕る段々ことはり申せば、百二拾兩との書付に相違なしとて、何のをしげもなふくれける。手代泪を流しよろこぶ事のかぎりもなく、外の手にわたらばよもや我には歸るまじ、すぐに欠落の身を、二たび京都に歸る祝儀とて、そのうち小判五兩禮物に置ければ、鹽賣中々是を請ず。是は其方の金子にあらず、主人の物の我にわけらるゝゆへなし。申請る事思ひもよらずと、たび〳〵返せば、是非なく取て京に歸りぬ。此手代其恩をわすれずして、それより後は、雨風雪の日の難儀、鹽賣京に出かねる日は、人を賴み置、定まつて鹽を二斗づつ買につかはしければ、鹽屋は天のあたへとよろこび、彼手代がはたらきとはしらずしてすぎぬ。厚恩をわすれぬ心から、手代も其後は我世の仕合せ

（一）書繪小袖――「衣服に畫をかくは古よりあることなれど、是は墨繪をかきたるが流行りしなり」（嬉遊笑覽）
（二）氣ずい――氣隨、氣まま。
（三）粟田口――三條通白川橋の東を云ふ。
（四）物好――風趣ある。
（五）王城の忝さ云々――王城は天子の居ます城。即ち都の意。當時京に限り、大名の通行に際して町人も土下座しなくてもよかつた。
（六）おの〳〵不思議を立――皆の者が不審を立てて。
（七）あしだ――足駄、高下駄。
（八）そもやそもや――一體全體、どうして〳〵。後に否定の語が來る意味を强めた詞。
（九）名利の千金云々――人は利慾のかたまりだとの意。この詞「俗づれ〳〵」にも出づ。
（一〇）善根――こゝは慈善事業の意。
（一一）うちば――内端、消極的な企劃。

續きて、近年書繪小袖を仕出し、俄分限となりぬ。其頃又上京に隱もなき名醫の有けるが、名人はかならず、氣ずいにして、御所方への御出入をむづかしと、是も粟田に引込、靜なる片原町に物好の生垣奥ぶかに住なし、爰も東海道なれば諸大名の下上りにも、王城の忝さは、高腰かけて鼻歌うたへど誰とがむる事もなし。此法師有時夕立しての後、下駄はきながら我門に立て遠見せられしが、彼鹽賣夕ぐれに京より歸るをみて、内ににげ入給ふを、おの〳〵不思議を立、あの鹽賣などに何としておそれ給ふぞと尋ければ、あれは今の世の聖人なり、聖人にあしだはきながら對面するもおそれあり、又ちかづきならねば下駄ぬぐまでもなし。とかく御目にかゝらぬがよいと申さるゝ程に、あのものを聖人とはいかなる事ぞといへば、それをしらずや、今の世金子を拾ふてかへす事が、そもやそもや、廣い洛中洛外にも又あるまじ。是程の聖人唐土も見ぬ事と仰られける程に、いづれも尤と合點して、此鹽うりにおそれ侍るとなり。

五　當流のものずき

名利の千金は頂を摩るよりもやすく、善根の半錢は爪を離すよりも難し。されば今の世の萬人、身過の家業是さかんの時、諸事をうちばにかまへ、利欲を

（一二）うさつて――消失する。
（一三）子細――こゝは原因根據の意。
（一四）大森・小川――未考。
（一五）間鍋――酒の燗する鍋。
（一六）蓬萊の山――こゝは正月の緣語として持出したのである。
（一七）當座賣――現金賣。
（一八）天下の入込――將軍の膝下で繁榮な江戸だからの意。
（一九）西行被き――西行の行脚姿のやうにあみだ冠りに笠を被ること。
（二〇）のみつくさぬ――「飲み盡くさぬ」と、「野見つくさぬ」（廣い野原――武藏野）とに掛く。「武藏野之言野見不盡之意也」（節用集大全）

捨心に成けるは、近年世間に佛道を聞入、自然と氣力うさつて、只當分の暮しをたのしみ、すゑ〳〵の事までの願ひはなかりき。此心底からは富貴になるべき子細なし。福德祈る商人の家に世の無常を觀じ、人のなげきにかまふ事なかれ。商賣に付ての僞りは言葉をかざり、跡からはげる塗物店、江戸に軒をつゞけ門をならべし中に、大森小川此兩見世は、すぐれて諸道具念を入る事聞傳へて、其家名次第に榮へける。そも〳〵小川屋のあるじ、正直を本としてわづかの世わたりなりしに、はんじやうに成けるはじめは、正月に閏のある年元日に大雪降て、通り筋人馬のかよひ絶るほどのあけぼのに、大釜に湯を沸して我門の雪を消して、慈悲の道をすこしの間なれども付置きけるに、往來の人爰におのづから立とまりて、年玉の遣ひ物、火箸間鍋または餅あぶり網など、買よる人蓬萊の山をなして、一日五十兩あまりが當座賣、まことに天下の入込なれば、近付の外人同じ貌にあらず、其夕暮に五十ばかりの法師、麻の衣の袖まくり手して、竹笠を西行被きに雪打はらひ、彼店下に立寄り、盃ひとつ望みのよしいひける程に、色色取出して見せける。此御坊酒好と見えて、さかづきちいさきをなげき、我常住のたのしみに、是を呑より外はなし。むかし上戸ののみつくさぬとて名を付し、武藏野といふ大盞はないかといふ。二合入につもりた

る盃を見せけるに、いづれを見ても蒔繪に菊水立田川、又は伊勢ゑび、是らは目にしみてふるし。新しき仕出しもあるに、當流の物好なるを見せよといふ。手代あぐみて、扨もしれたる御坊かな、漸盃壹枚賣とていかい手間入なれど、此見世に望の盃なしといはれんも口惜さに、切子の灯籠、上に釣、下に節季候、爰をせんと舞所を、高蒔繪にしたるを見せければ、法師うなづきて機嫌なり。法師のいはく、それがしは唐土浔陽の江に住猩々也、今此朝に化身せり。わがたよる所は必家さかへ繁昌するぞかしと、云捨て立歸るを、手代まことしからずおもひて忍びてしたひみれば、築地の邊にわづか成庵をむすび、おこなひすましたる道心者也。先猩々の事は僞にしてから、此坊主の言葉少しもたがはぬは、亭主正直なるを天のめぐみ給へると見えたり。

（一）目にしみて――見驚れて。
（二）物好――趣のある。普通と異なつたものの意。
（三）しれたる――癡れたる。たはけた。
（四）切子の灯籠――切籠の形に枠を組み四方の角に花を附け、紙・帛を細く切つて垂らしなどして飾つたもの。
（五）節季候――年末の物貰の一。毎歳臘月中旬比より非人乞食等二三人、各々紙の頭巾を冠り、白紙の前垂に松竹梅などを畫き小形の太鼓をうちさゝらをすりせきぞろめでたい〳〵ハアせきぞろでされや、ハアと最も喧く戸前に呼びて乞錢也」（守貞漫稿）
（六）爰をせんと――とゝを專と、第一に、即ち一生懸命に。
（七）浔陽の江――「所は浔陽の江のうちの酒盛、猩々舞をまはうよ」（謠曲「猩々」）をこゝに採入れたのである。
（八）したひ――あとをつけてゆく。
（九）築地――今、京橋區。明暦大火の後、海濱を埋立てた土地。
（一〇）僞にしてから――僞にしたところで。

西鶴織留世農人心

目錄　三

一　引手になびく狸祖母
　　算用なしの預り手形
　　御前に正月の夜あそび
二　藝者は人をそしりの種
　　六月に雪ふらすも不思義にあらず
　　今の世のはやり俳諧も一興
三　色は當座の無分別
　　三夕惜みの千貫目しらず
　　かなしき時のうり物
四　何にても知恵の振賣
　　毎年師走のはたらき男
　　猫の蚤取手がはり

西鶴織留世の人心

一　引手になびく狸祖母

(一)御代ちとせ山松は古今不易の名木。春の風しづかにして四つの海に立波もなく、今本朝の風俗しだゆづり葉を賣山賤、ほだはら數の子を賣海人までも、其心(二)ざし皆和歌になつて、八百日(三)行濱の眞砂はつきぬ道廣く、かゝるゆたかなる時世に住める萬人仕合ぞかし。されば近年人のありさまを見るに、(四)いづれか愚かなるはひとりもなし。むかしは十人(五)寄れば皆物毎にうとく、我身の上の事斗も、埒明る者稀なり。ましてや人(六)の事請取出(七)入の曖ひ、又は内談などに、言葉ならべて物よくいふ人もなし。殊更公事(八)だくみして筋(九)なき事を書求め、相手に迷惑いたさせ、我利慾にする事、思ひもよらず。自然(一〇)と義理につまれる言分にも、一つ〳〵ありのまゝに書付る筆者は、五町七丁のうちにもなき事なりしに、今時は物かかぬといふ男はなく、何事にても外の智恵をからず、面々に諸事を濟さぬといふ事なし。是ゆへ惡心も思ひ付人の難儀をかへり見ず、商賣あるひは借錢の事までも我非分(一一)とはわきまへながら、云事(一二)の種をこしらへ、油斷のな

(一)御代ちとせ云々――天下泰平を謳歌した詞。
(二)心ざし皆和歌になつて――優雅な心持になること。
(三)八百日行濱――「八百日ゆく濱の眞砂もわが戀にあにまさらじか沖つ島守」(萬葉集卷四、笠女郎)を原歌として、第三・四句を「君が代の數にとらなむ」としたのが「新古今集賀」にある。
(四)いづれか云々――例の語法。
(五)十人寄れば――「寄れば」の意にとる。
(六)人の事請取――他人に起きた問題をひきうける。
(七)出入の曖ひ――もめごと(悶着)に關係する。
(八)公事だくみ――訴訟事を企むこと。
(九)筋なき事――謂はれのない事、理由のない事。
(一〇)自然と義理につまれる――眞に道理に叶ふ。
(一一)非分――不條理。
(一二)云事――紛擾、ごたごた。

らぬ人ごころや。以前は借請たる金銀などに、(一)とかふの出入する事なし。仔細はそれ〳〵の家業に付、一商ひすればかならず利徳を得る事を見極め、此資のために其分際相應に借て、(二)思ひ入の商賣の後、其まゝ元利そろへ濟しける。此程の人は何の分別もせず、はじめから相濟する合點なく、奢の心より遊興所へつかひ捨る銀にかりければ、此かねの出所なし。然れば借かたに難儀をかけ、言事の種を作りぬ。此善惡明白に御掟あればこそ、おそれて我まゝいふ事なし。(三)たとへばいかなる惡智惠をもつてとやかくいへるにして、借たる物一たびは取ずにをく事なし。是をおもふに、元日の祝儀しまひ袴ぬぐといなや、又くるとしの大晦日も、(五)月日の立は今の事としばしもわするゝ事なかれ。世に何がこはいぞといふに、酒の酔も道をよければ別の事もなし。氣ちがひのぬきたる脇指にてあやまちをせぬ物なり。夜道ありかねば追はぎにもあはず。おもひの外なる欲を離れければ、かたりにもあはぬものなり。皆人々の覺悟にある事の中にも、第一身體を持崩して、借錢こはるゝほどおそろしくかなしき物此外に又なし。さてもさてもうたての世や、身過に仕合ありて屋造も人がましくせし人のいへることは、ずいぶんと愚なる事にても、人皆耳をすまして聞届け、又手前淺間敷なりくだりたる人の一言に、利のせまりたる事を申にも、誰か聞入れける

(一)とかふ――とかう、とかく。あれこれと。
(二)思ひ入の商賣――目あての商賣。
(三)たとへば云々――こゝは「たとへいかなる惡智惠をもつてとやかく云つたにしても、借りたる物は遂に返さずに置く事はできない」の意。「云ふにしても」の意であり、「取ずに置く事なし」は貸方から敍したのである。
(四)ぬぐといなや――ぬぐや否や。
(五)月日の立は今の事――月日の立つは早いものゝ意。次の大晦日も今の事の意。
(六)別の事なし――大した事はない。
(七)脇指にて――「にても」の意。
(八)おもひの外なる欲――定まつた家業以外の儲。
(九)離れければ――離れたらば、はなれるなら。
(一〇)人がましく――一人前の人間らしく、即ち相應に立派の意を含む。
(一一)利のせまりたる事――理の迫りたる事。切實な意見のこと。
(一二)誰か聞入れける人なく――誰とて聞入れる人がなく。
(一三)心にもなき事――身に覺えもないこと。
(一四)居ながれ――座りこむ（もと、多人數の並び座するをいふ）
(一五)亂錢――ばら錢。
(一六)りちぎ――律義、正直。
(一七)此下心のはづかしー――先方の心底に對して此方が恥づかしい。
(一八)貧にしてうき世に住める甲斐なし――「貧しくては生ける甲斐なし、富めるをのみ人とす」（徒然草）
(一九)貧福のふたつ有――「貧福の二つ有るやらん」の意。
(二〇)願ふに――富裕を願ふに、
(二一)大書院――武家屋敷の客殿、表座敷。
(二二)家久しき者――永年の家來。
(二三)寶引――正月の遊びの一で、品物をくじ引にすること。「數多の繩を一人が摑り、その一本の端に寶

人なく、萬につけて口惜き事のみ、(一三)心にもなき事にうたがはれぬ。世を富貴に暮せし人は、人の金銀取亂せしほとりへも、何心なく居ながれ、又貧者は我と身を引て、わづか成亂錢のそばへも寄かね、心にやるせなかりし。何程りちぎに生れ付ても、まづしき人には先より油斷せずして、手元に有合ける小道具なども、目に見えて取直しける、此下心のはづかし。申ても〳〵貧にしてうき世に住める甲斐なし。いかなる前生の約束にて貧福のふたつ有。福者はまねかずして徳來り、貧者は願ふにそんかさなり、さりとてはまゝならぬ世上沙汰、見るに付聞に付うとまし。其身仕合は町人にかぎらず、武家にありける事ぞかし。さる大名がたに御吉例とて正月三日の夜、大書院にて家久しき者ばかりめしよせられ寶引を仰付られける。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋なげ出して、手毎に一筋づつ引取、此緒のすゑに付置れし物をくだされける。小性引出す繩に桑の木の鐘木杖おかし。家老職の人引出す繩に銀錢一貫文、あるひは唐織の卷物を引出すも有。又は御物ごしらへの脇ざし、かたはしには春臼のふるの證になるものを附け、大勢の者に引きあてさせる）
(一四)銀錢――銅錢と同形の銀貨、元和三年鑄造。重量は一匁二分。
(一五)唐織――「有稱唐織者、以五色糸織成花鳥或菱花等雜品紋、倣蜀紅錦者也」（雍州府志）
(一六)御物ごしらへ――御所風の作り。

（一）日傘――彩色した絵日傘で、乳母が子供を抱き歩く時用ふ、天和貞享の頃流行。（我衣）
（二）ふりしやくし――不明。古杓子か。
（三）知行取――祿高の多い士。
（四）からざけ一本――干鮭一本であるが、坊主である呂にも通ずる。
（五）よこめ役――横目付の役人。
（六）かろき者――身分の低い者。
（七）重き物――よい品物。
（八）年男――年末年始の諸儀式を勤める者。その年の干支に當る者）であつた。
（九）大ふり袖――大振袖を着た若い娘。
（一〇）出頭人――君側に侍する權臣。
（一一）鳥臺――蓬萊飾の臺。
（一二）古人の言葉――未詳であるが、かゝる意見は徒然草を初め、近世では長者教、爲愚痴物語などに見える。
（一三）鄒燕――正しくは騶衍。周代臨淄の人。初め梁

きに取あたるも有。提重箱・なぎなた・印籠・さんちやく・日傘、純子の夜着ふとん・ふりしやくしを取も有。知行取は黄金に引當、茶道坊主はからざけ一本のぬしに成、よこめ役の人に自然と目がねのあたるもおかし。ひとり〳〵の果報を見るに、かろき者の重き物に取合けるは一人もなかりき。爰に嘉例の年男として八十六歳になれる人、手をひかれてことぶきを勤めけるが、我も物の數とて人まかせに取てくれたる繩を引出しけるに、奥上蔵の中にも梅垣どのと申て、都より吟味をあそばしおかせられたる、大ふり袖をくだされ、是は〳〵と興をさまし〳〵観念して引たぐりければ、大殿様の時さへ古狸と名に呼し百三つになる祖母を引出せば、一度に春のはじめの大笑ひ有て、御機嫌の上、島臺の酒事、万歳樂とぞうたひける。

二　藝者は人をそしりの種

諸藝を鍛練する事、それ〳〵の家業の外は、ふかう其道に入る事なかれと、古人の言葉ひとつもたがふ事なし。唐土の鄒燕といふ人、筆に五十年來の心をつくし、七十餘歳にして妙を得たり。六月に冬の調子をふきて庭前に霜をふらし、萬人此音律に目をよろこばしける。かくのごとく學び得て程なう世をさりしに、身の一大事の覺悟もなく、子孫に傳へ難くわづかの遊樂何の益なし。此外左慈道人我朝の果心居士これらが技術の法は亂のもとゐ。年月しゆれんして、何か世のたすけ身のためにもならず。人間の第一は筆道執行の後、學文の外なし。今の世の人心、分限相應より高うとまり、鞠場の柳陰に日を暮し、九損一德に早足がきけばとて別の事なし。闇き夜は挑灯もたせて靜に行ば、溝へはまらぬ物也。殊更楊弓官女の業なり。いかにしても大男の慰み事にはぬるし。なをまた諸職人の鎚鋸を持たる手には似合はず、よし又百筋ながら當り、あるひは大金書の看板に付てから何。此矢自然の時の用に立、せめて盗人を射るめるにもあらず、肴引猫にあてゝも更におどろく事なし。十炷香はいよ〳〵福德そなはれる隙人の花車あそび、是聞分る鼻にて食のこげるを聞出し、釜の下の薪をひかすれば始末の種にも成ぞかし。茶の湯は道具にたよれば、中々貧

（一四）冬の調子――「十月は陽數の水、勝絶、十一月は陰數の水、盤涉、十二月は弱數の土、一越」（糸竹初心集）
（一五）左慈道人――支那三國時代の道術家。字は元放。
（一六）果心居士――室町時代の幻術家。果心の幻術のことは「醒醐隨筆」（中山三柳、寛文十年刊）に見え、後には「玉帚木」（林文會堂、元祿九年刊）、「虚實雜談集」（恕翁、寛延二年刊）にも見ゆ。
（一七）執行――修行。
（一八）學文――學問。
（一九）九損一德――何にもならぬこと。「鞠は九損一德」は諺。「ある數寄者の曰く、鞠ばかり益なきものあらず、昔より賢き人の九損一德と云へれども、我は十損無德と思ふ也（中略）その德と云へるは早足のきくと云へるにやいとをかしく鞠を稽古せぬ人も溝へはまりて死したかぶり堀へはまりて死した

（二〇）楊弓――楊弓は。
（二一）大金書――（前出）大弓に云ふ詞。
（二二）看板に付てから何――看板に書きとめられたところで何だ。「何」は「何ぞ」
（二三）十炷香――（前出）香合せの語。
（二四）花車あそび――風流華美な娯樂。
（二五）道具にたよれば――道具のよしあしによるもの故。

（一）万事あるにまかせて、佗たるをよし――利休の詞。「花をのみまつらん人に山里の雪間の草の春を見せばや、利休はわびの本意とて此歌を常に吟じ云々」。（醒醉笑）「佗び」は清寂閑適の趣。
（二）利休――千宗易。通稱與四郎、茶道の大家。天正十九年歿、年七十一。
（三）ことのたりたる宿――豁闊な家庭であつて、趣味から閑寂な風情ある構へにするのが適切なのである。
（四）はやし――演藝に用ふる音樂。ここは能樂のものづみを用ふ。横笛・太鼓・つゞみ・小つゞみ。
（五）亂――歌謠の伴なはぬ能樂の舞の一種。能の鷺と猩々に舞ふ。
（六）道成寺――安珍、清姫の日高川傳説。こゝは謠曲ので、長唄のではなからう。
（七）傳受して――傳受してからがの意。
（八）太夫に望みなく――太夫になるだけの伎能がなく。
（九）地狂言――素人の演ずる狂言。
（一〇）罷出たる者は――「罷り出でたる者は」とて狂言者の成がたし。（一一）万事あるにまかせて、佗たるをよしといひ傳へり。是利休の言葉にもせよ、貧家にてはおもしろからず。（一二）ことのたりたる宿にして、物好をさびたるかまへにいたせる事ぞかし。しかし世に住めるからは巧者の中程に居て、人並に呑ほどの事は知るべし。又能はやし（四）亂道成寺（五）（六）まで傳受（七）して、其身太（八）夫に望みなく素人藝には用なし、耳ちかきこうたひ覺えて、近所の祝言ぶるまひの間にあはすれば濟事なり。地狂言（九）は子ども時也。髭のはへたる口から罷出（一〇）たる者は、大いうつけの沙汰して、見る人汗をかきけるに、此男の母親ばかり（一一）嘆ける。立花は宮御門跡（一二）がたの御手業なり。野邊遠き四季の草花品々を見給はぬ人のために、深山木の松柏、しば（一三）人の手にかゝるを集めてあそばされしに、近年いづれも奢る心より用捨（一四）せず。繼木の椿をもぎ取、鉢植の梅もどきを引切り、靈地の荷葉を折せ神山の椙をとりよせ、我まゝのふるまひ、草木心なきにしもあらず、花のうらみも深かるべし。是只一日の詠め世の費なり。扨又小商人の碁將棊、侍の三味線、町人の兵法、出家の淨留利、百姓の諸禮（一五）がた、是皆よしなし。世間に比類あまた有。されば（一六）和歌は和朝の風俗にして、うぐひす（一七）蛙までも其聲其すがたなり。いはんや生ある人の此心ざしなくて有べからず。時に（一八）連歌の掟をゆるがせにして、（一九）俳諧といふもこれ歌道の一體なり。むかしは世（二〇）を隙になす人、あるひは神主又は武士のもてあそびにして有けるを、ちかき年世上にはやり過、人のめしつかひの小者下女までもいたさぬといふ事なし。惣じて藝事、するゝ〳〵の手に渡りて捨れるためし有。昔日の俳諧師は歌書を大かたに見わたり、道しる人に禮式を習ひ、貴人法體の下座に付、諸事宗匠の下知にまかせて心にまことあれば、自然と神慮に叶ひぬ。いづれの連衆（二一）にてもよろしき付句をいたされし時は、座中肝にめいじ我をおぼえす同音に譽て、持扇のはしに書付、好る人に是を聞せける。また點取（二二）の卷してつかはしけるに、其頃の點者は百韵一句々々、聞かた（二四）を脇書にして明白也。又作者も俳道のわきまへあつて、すこしのさし合（二五）ひ同字見（二六）おとしの吟味をとげて、たがひの執行（二七）になしぬ。今時の點者といふをみれば、昨日まで馬（二八）は生類になりまする、牛（二九）は闇に二句嫌ふかとたづね、はなひ草（三〇）口から四枚も覺えぬ者が、菓子袋に押やう成印判をこ

を演ずるはの意。
（一一）御門跡――皇子、皇族、攝家の子弟の入室する寺院。又はその院主。
（一二）しば人――柴人、柚。
（一三）用捨せず――捨てておかない。
（一四）繼木の椿――大切にすべきものである。
（一五）諸禮がた――諸禮式。
（一六）されば――さて。
（一七）うぐひす、蛙――古今集序「花に鳴く鶯、水にすむかはづの聲きけば、いきとしいけるものいづれか歌をよまざりける」。
（一八）時に――此頃。
（一九）ゆるがせ――緩やか
（二〇）世を隙になす人――世捨人。（宗鑑、貞徳は武士、守武は神主）
（二一）連衆――連句を吟ずる仲間の者。
（二二）付句――前句につける句。
（二三）點取の卷して――點取は多く秀句を吟じて點をとるやうにする連句。點法には長（二點）・珍重（一點半）・平の三種があつた。
（二四）聞かたを脇書にして云々――解や評を傍書してあるから明白だ。
（二五）さし合――連歌俳諧で禁じてある用語・用句。所謂去嫌の法則にふれる。
（二六）同字――同じ文字を使ふ事。これは五句去、三句去の規定がある。
（二七）執行――修業。
（二八）馬は生類云々――「生類になりまする」は「なりまするか」と尋ねたやうに解したい。即ち馬云々は分りきつた事を口にする事、牛云々も愚問を發する事で、昨日まではかゝる男が、はなひ草の初めも知らないで宗匠になりすまし、今日は「菓子袋に」とつゞく。
（二九）牛は闇――「暗闇から牛を引出す」の諺があるから闇と牛とは二句去りか等馬鹿な事を尋ねるの意。
（三〇）はなひ草――俳諧の方則を書いた本。野々口立圃著。

しらへ、軒號(一)にびくりさせ、一句一錢の點取に讀めぬ所は、評書なしに付墨(二)し、鹿のうちこしに紅葉鳥をしらず、有馬の湯は水邊(三)に成事も、鴉(四)は俳諧やら、烏は連歌やら、何をひとつも聞分る事なし。作者唐人(五)なればこそ其まゝに濟事なれ、此點者に成て諸國に名をしらるゝ程の人は、先廿年をへて八百八品のさし合を中(六)に覺え、是より見合文臺(七)に當座の了簡かぎりなき物ぞかし。かりそめながら此程の宗匠達、せめて席振(八)成とも見習ひ給へ。此僞りの心からは住吉(九)へ參詣し給ふとも、神(一〇)は見通し、ないぢん(一一)からまことなき俳諧師がまいつたと、御貌をふらせ給ひて請たまふまじ。此時の一座(一二)を見るに、たとへよき句をいたしても氣に入らぬ貌つきして居は、をのれがよろしからぬ句をいたせる時のためなり。扨下座より宗匠をさしをき、平連衆(一三)よりさし合の吟味、是法になき事なり。つら〳〵おもふに點者愚にして德のなきゆへなり。作者の貧福にかまはず、まことをさばくをまことの宗匠なり。まことに和歌のはしくれなる俳諧さへかくすたりゆけば、まして外諸の藝の師匠も是になぞらへてしるべし。さりとてはかしこ過て、今うたての人心にはなれり。

三　色は當座の無分別

（一）軒號――何々軒といふ俳諧宗匠の家號。

（二）付墨――墨で評價の記號をつける。

（三）うちこし――連句で一句距てた所にある句。鹿の異名を紅葉鳥といふ（焚灯庵袖下集）。こゝは秋の句作するに鹿の打越の句に紅葉鳥とすれば使つてもいゝといふ事を知らないの意。

（四）水邊――俳諧では水に關係ある詞（岸・泉・津など）を云ふ。

（五）鴉は云々――鴉は俳諧の詞、烏は連歌の詞などとでたらめをいふのを嘲る。

（六）唐人――何もしらぬ者。

（七）中に覺え――諳記する。

（八）見合文臺に云々――當座の問題を即時に判定して自由に裁量する力ある人でなければならぬ意。「文臺」は懷紙など載せる机。

（九）席振――俳席に於ける宗匠の態度。

（一〇）住吉――和歌三神の一であるから、俳諧にまで擴けたのである。

（一一）神は見通し――諺。神明の威力をいふ。

（一二）ないぢん――內陣。

（一三）一座――俳諧席の連衆である。

（一四）平連衆――何の役柄もない、只の連衆。

（一五）人間一日の遊樂――人の一生は一日の遊樂に等しくの意。

（一六）あけぼのに生じ云々――蜉蝣朝生而暮死」（淮南子）

（一七）遊君――遊女。

（一八）楓橋ノ夜泊――張繼の詩「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」を連想せしめ、場所柄から琵琶かき鳴らしとつゞけたのである。例の白樂天の「琵琶行」を示唆してゐる。

（一九）なげふし――投節。（前出）

（二〇）死なざやむまい――「憂きもつらきも世に住むうちよ、死なざやむまいわが思ひ」（當世なげ節）

（二一）一日暮――その日暮し、先の事は考へない。

（二二）からりちん――財布の空しくなる譬。喩。

（二三）石車――動かぬといふ詞をうけて、石から銀とつゞけたのである。

（二四）思ひはかゆかず――思ふやうに事が進捗しない。

（二五）取亂さぬといふ事ひとりなし――「取亂さぬ（ず）」

（二六）居宅も賣殘し――田地や外の屋敷は賣放しても自分の居宅は殘すの意。もは「取亂さ（ず）」といふ事なしは「商賣物も」のもと相對す。

人間一日の遊樂、あけぼのに生じ夕に死す、おもへば夢のかり枕、よろづに心を移す中にも、遊君のたはふれは和漢に古今やむ事なし。楓橋の夜泊に客絕えず、琵琶かきならして唐人歌をきけば、和朝の色里都の島原にうたふなげふしに同じ。死なざやむまいと聞しが、いづれ生て息の通ふうちは、中々人の異見我分別にても留り難し。諸國其所々の遊女にほだされ身體をつぶし、さまざまの難義にあへるを、眼前に見およぶ事數限りもなし。かゝる事皆人の身の上のやうに覺へて、一日暮して遊びて有程はからりちんなし、からるゝ程は借集めてつかひ捨、跡へも先へもうごかぬ時、石車を銀にしてほしやと願ふに、思ひはかゆかずして、自然ととまらねばならぬ首尾になつて、彼里がよひをやめける。其時は男の魂ゐといふ脇指一腰もなくて、物の見事に身を丸腰にておさめけるもおかし。されば人間一生のうちに、一たびは傾城ぐるひに取亂さぬといふ事ひとりなし。何とぞおもしろき中程にて、神佛の御ひかへあつて、此遊興をやめさせ給へば居宅も賣殘し、商賣物も小體にして渡世に取つゞき、身を

（一）むかしかしこき親仁―傘好を指すか、「世の人の心惑はす事色欲にしかず」、まことに愛着の道、その根深く源遠し」など（徒然草）に見える。
（二）さくとく――作徳。地主の得米。
（三）しはき――吝き。
（四）玉ふり〳〵――玩具の名、柄に色糸を絡んだ六稜形の槌で、木製の玉を打つて遊ぶ。
（五）こしける――年を越しける。
（六）義理をかきて――世間づきあひをしない。
（七）されば――「されば」とて」又は「されど」の意にとる。
（八）替り行定め難し――替り行くこと定めがたし。
（九）氣のばし―氣晴らし。
（一〇）蜆川――大阪堂島と曾根崎との間を流れてゐた川。
（一一）此旦那――上に「茶屋の者」を補ふ。
（一二）お首尾はともあれ―若い者に暇を出す出さぬの御成敗はともかく。

捨てはたらきければ、町内世間の人親類のすゑ〳〵までも、今迄は若氣と了簡してゆるしぬ。人としてつゝしむべきは此道、今更いふまでもなし。（一）むかしかしこき親仁達が諸書に此事を殘しぬ。其比難波の津に、二代つゞきて隱れなき人、銀が銀をもうけし兩替見世を出して、ひとつも替つたる事にかからず、仕付たる家業ばかりして、段々に分限に成て、所のよき大屋敷とも求めて、此宿賃ばかり三十貫目一年に取て、大和のうちに慥成田地を買置き、此（二）さくとく壹年に八十石おさめ、財寶有銀三千貫目惣領に相渡し、すゑ〳〵の兄弟は世間に笑はぬ程に身體をわけとらせよと、書置は一枚にして此親仁は相果られたり。此跡取親の心ざしにまさりて、萬に（三）しはき生れ付、五歳の春着初の袴を我手にかけて、皺延しておもふまゝに（四）盤置、（四）玉ふり〳〵の箔のはぐるを惜み紙に包てこ（五）しける。是より親もあんどして、一生身を持そこなふ者にあらずと、手代どもにすゑ〳〵たのもしくいひ渡されしに、いよ〳〵十七八の比、世の人に替りて兎角外へまじはる事なく、義理（六）をかきてこまかなる算用ばかりして暮せば、大勢のめしつかふ者も、一日物見遊山に出る事もなりがたく、晝夜商賣の事のみ油斷なく、此家の長ぐおさまる事をよろこびける。（七）されば世の人心何時となく（八）替り行定め難し。此跡取二十一の年までついに色の道をしらず、只一日の慰みには金箱の數を内藏に入てよみあそびしに、有時草履取あがりの若い者、折々の氣（九）のばしに蜆川（一〇）にあそび巾着銀をつかふと聞て、其茶屋にたづねゆき、吟味仕出してこと〳〵しく異見して、當座に暇出すといへば、此若い者面目うしないてにげて歸りし跡に、此旦（一一）那を引とゞめ、お首（一二）尾はともあれ、酒代をかずに御ざりまして、こなたさまより申請るといふにぞ迷惑して、此座敷其まゝは立難くなりて、迚（一三）も銀出すからは、只歸るは一代のそんと分別極めて、此男はじめて分（一四）ある女の手におもしろき物といふ事覺へ、是より毎日かよふ程に、出合（一五）がしらに貧なる太鼓（一六）が付て、風呂屋者（一七）をすゝめ、是もさもしき所ありとて、をし出して十五女郎（一八）を買初又各別とおもふ時、禿のもめん布子（一九）目にしみ、又はゑりあかの付たる衣裝も、後には氣（二〇）の付折ふし、天職（二一）のゆたかなる道中を見て、又是に心を移し、次第に奢つきて、人も名をしる程の買手になれば、はや天神（二二）などまだるくなつて、太夫職（二三）になじみて、此道にしやれる（二四）ほど、揚屋の下々（二五）までも、かゆき所へ手の行やうに、ぐはら〳〵と嬉しがらせ、太夫を手に入、自慢して外の男をせきて（二六）金銀の費をかまはず、無理なる口舌（二七）を仕出しても、一

（一三）迚も云々――どうせ銀を出す以上は。
（一四）分ある女――情味を解した女（手管ある女）
（一五）出合かしら――偶然の機會。
（一六）太鼓――幇間。大盡の金盡の金持（鉦持）に對して太鼓持と云ふ（紀州雜賀踊に依ると）
（一七）風呂屋者――風呂屋女、湯女。私娼の一。
（一八）十五女郎――かこひ（鹿戀）閑（島原及新町で太夫天神に次ぐ。「十五」とはめくりかるたの語に據る。
（一九）目にしみ――目について、見すぼらしい氣がする。
（二〇）氣の付――氣にかゝる。
（二一）天職――天神のこと（揚代が二十五匁なので天神漆の緣日にかけた酒落である。）太夫を上職といふに對して天職といふ。梅女郎とも。
（二二）ゆたかなる――豪奢な。
（二三）太夫職――最上位の遊女。
（二四）しやれる――「人の氣のものに馴れて、いさぎよきさまをいふ」（色道大鑑）
（二五）下々――下女・下男。
（二六）せきて――堰きて、遮はせない。
（二七）口舌――痴話の上のいさかひ。

（一）おそらくは――はじかりながら（自負する意味合）
（二）いせぬ――いせひ、威勢。
（三）請取――買取、續けて買ふ。
（四）御内證――こゝは入費。
（五）正月の男――正月買の男。「正月買は物日の内大會也、是を請取を客の矩模とす」（大鏡）とあるやうに正月仕度の出費をしてくれる男である。正月買を取きめるのは十二月十三日であつた（島原大和暦）
（六）もやう――模様、染模様。
（七）眠たくと――眠たくとも。
（八）のまされて――飲ましてくれても。
（九）氣をつけて――氣をきかして。
（一〇）はしりを喰て云々――「はしり」は季節早の食物。こゝは八九月の頃、うるめのはしりを食べてゐるから、普通の季節の寒に食べさせるのはもう古い。
（一一）しやくであてがはるゝ客――待遇の粗末なこと。

度もまくるといふ事なし。世界廣しと申せども我にはりあふ買手あらば、おそらくはいせぬくらべ、今日から十万日にても慥に請取此大じん、今の世の御の字の客。其仔細は、若うて無事で銀を持て親がなうて其身利發でしわうなう、情がふかうて酒のまいで、一年中隙で何がひとつふそくなし。揚錢は先銀わたして買まする。女郎さまは斷りなしに毎日なりとも御出なさるゝ。御内證の御用は、何程にても是の内義に申付ておきまする。外の太夫達は、師走の廿四五日比まで正月の男のない事をかなしみ、迚も物にならぬ男のかたへまで、讀ば泪のこぼるゝ程の文やられしに、そんな事はひとつもくにせず、皆我に打まかせ、いそがぬ事を冬から來年の盆の踊ゆかたを染させ、菊の節句の袷のもやうまで、御申付なさるゝを、御好みの通り、京都へ申つかはしける。是程たしかなる客には、眠たくと目を明て別れ惜む貌をなされたがよし。かゝも酒の吟味してのまされてとがにはならぬ事。亭主もすこしは氣をつけて寒のうちに鰭の燒物、是は八九月の比はしりを喰て世にふるし。しやくしであてがはるゝ客とは違ふべし。追付分散と見えすきたる人の、紋日に出ようといふを、宿屋御無用と留て、酒吸物を喰れそんにして歸し給ふ人と、同じ口には迷惑なり。又女郎も、家質置て借たる銀で、節季拂ひを仕てもらひ給ふも、心のようはない事。隨分たらして取給へ、誰におそれず此里の銀を千貫目にても、我宿で拂ふ大じんは、我等が外には御座るまいと、おもふまゝなる事いふにも、銀がかたきの世わたり。皆御尤にしてうけたまはりしに、此道に奢ればはかのゆく物かな。十四五年見およぶうちに、いかな〳〵百錢も殘らず、是程までではようもせんかうして朝夕の煙ほそく、ひとりの母に手なれぬ賃綿をくらし、妹はわけもなき所へ奉公に出し、取替銀を嬉しく、しのび〳〵にはし女郎ぐるひして、夜見世過て霜月の比、よし原町の五分女に虎之助といふつぼねに、火鉢移りに人の見しるもかまはず、我もむかしは日に一筋づつ下帶かきかへたる男、今古妻もめんもはづかしからず、人はしれぬものよ。あなづり給ふなとたはふれける。ひとつの心から女郎買のなれの果、此男ばかりにはかぎらず。

（二）紋日云々――物日に買ひに出よう。
（三）宿屋――揚屋。
（一四）心のようはない事――いゝ氣持はしない事だ。
（一五）たらして――我をだまして。
（一六）銀がかたき――金銀萬能。（生活上、金のない者には敵同然）
（一七）はかのゆく――消費の度の迅速なのを云ふ。
（一八）わけもなき所――何とも云へぬ所、水商賣の所。
（一九）取替銀――妹の身代金か。
（二〇）はし女郎――端女郎局女郎ともいふ。「閨」の次位。
（二一）夜見世――「延寶三年、依許命、元日より十月晦日まで夜見世相續侍る。霜月朔日より極月までは晝ばかり云々」（廓中一覽）
（二二）よし原町――新町遊廓内の南の町。
（二三）五分女――下級の遊女。五分は揚代。
（二四）火鉢移り――火鉢映り。火鉢の火が光り映ること。

四　何にても智恵の振賣

大海の底に尾閭（二七）といふ穴あり。諸川の水日々夜々に入れども、彼穴のうちに

（二五）古妻もめん――豫問木綿。同じ。勝間は攝津東成郡か。
（二六）ひとつの心――迷心。
（二七）尾閭――「莊子」、秋水篇に「天下之水、莫大於海、萬川歸之、不知何時止、而不盈、尾閭泄之、不知何時已、而不虛」と見ゆ。

て失するがゆへに増事さらになし。人間にひとつの口あり、此尾閭のごとし。一生のうち朝夕喰物かぎりもなし。身過(一)は八百八品、それ〳〵にそなはりし家職に油斷する事なかれ。今時は正直をもつて其身の骨をくだけば、天理に叶ひそれ〳〵の渡世いたさぬといふ事なし。惣じて諸國の城下又は入舟の湊などは人(二)の足手かげにて、さま〴〵すぎわひ(三)の種もあるぞかし。されば山城の伏見の里は七八十年も見およびしに、通り筋の脇々はむかしはんじやうの時の町並殘りて、次第々々に物の淋しくなりて、何商賣するともしれず、年月をおくるものは其數しれず。是をおもふに、千軒あれば友過(四)ぞかし。近年は人の心さかしうなつて、大かたのはたらきにては中々身過に成難し。すぎし年の師走に、竈(五)の上塗を仕にまはるを、手まはしのよき事と思ひしに、又ことしの暮には達者なる男が釜みがきにありきける。大釜五文其外は大小によらず貳文づつ也。又餅米あらひ賃壹斗貳文にて埒の明事、手前に人をもたぬ(六)者勝手よし。また表具屋の隙なる細工人と見えて、定木竹べらはけ糊迄を持てお座敷の腰張一間を一文、あかり障子一枚二文、何行灯にても壹文にてさうぢまでいたしける。年德(七)棚を買ければ釣木釘まで持きたりて、惠方をあらため釣て歸りぬ。何にても自由なる世時になりける。是等は世帶(八)の事にて、中より下の人のためにもなり

(一)身過は八百八品―諺。生業は種々雜多の意。
(二)人の足手かげにて――人が多く集る所なので。
(三)すぎわひの種――すぎはひ。生活のたつき。仕事。
(四)友過――共過。相互に綠り合つて、自然に暮してゆく。
(五)竈の上塗――「此月民間改三塗竈土一故巧者擣レ土巡二市中一、取價塗竈」（日次紀事、六月）
(六)手前に人をもたぬ――人手の足りない家族の者。
(七)年德棚――歲德神を祭る棚。
(八)世帶の事――生活上の實用向。

ぬ。又五十ばかりの男、風呂敷をかたにかけて、猫の蚤を取ましよと聲立てまはりける。隱居がたの手白三毛をかはゆがらるゝ人、取れとて賴れけるに、一疋三文づつに極め名譽(九)に取ける。先猫に湯をかけて洗ひ、ぬれ身を其まゝ狼の皮につゝみてしばし抱きけるうちに、蚤どもぬれたる所をうたてがり、皆おほかみの皮に移りけるを大道へふるひ捨ける。是程の事にも、そも〳〵何としてか分別仕出し、身過の種とはなりぬ。今程諸人かしこく物言ずして合點する世の中に、年がまへなる男、仔細らしく小脇指に大巾着さげて皮立付(一〇)を着て、何にはよらず世間に合點のゆかぬ事あらば問て見給へ、隨分人の身上にむつかしき事の談合、相手に成べしと口廣(一一)くいひまはりぬ。心有人は耳にも聞いれず、大かたの人は肝つぶして、いかなる虎落大明神(一二)のおとし子にてもあるらんと、つらつら貌を眺めける。すぎにし秋の比三軒屋川口(一三)へ砂魚釣舟に出し人、酒に亂れて後、釣たるはぜを丸燒にして、數喰事を手からにおの〳〵あばれける(一五)中にも、殊更一疋一口にせし人餓に咽をくるしめける。是はいかにと見るに、此砂魚の腹に二寸ばかりの糸付て釣針あるを咽に立てさま〴〵してもぬける事なく、此難義すべきやうなく、船中鼓三味線も鳴をやめて。つれ〳〵(一六)に書殘せし法師のあしかなへのごとく迷惑して、命もあぶなく宿に歸り醫師に見せてもは

(九)名譽――思付よしとの評判。
(一〇)年がまへ――相當の年輩。
(一一)皮立付――皮の立付立付は旅行用の半袴で、脛引と脚絆とを合せたもの。（嬉遊笑覽）
(一二)口廣く――大言壯語。
(一三)虎落大明神のおとし子――大詐欺師の意。虎落を神樣扱にし、その落胤と云ふので、並々でない「もがり」である。
(一四)三軒屋川――大阪木津川の川口。勘介島在家・三軒家在家の東を流れた川筋（「雜波丸綱目」の挿圖に據る）。今の西區三軒家、上町、下町に沿ふ。
(一五)あばれける――暴飲暴食。
(一六)つれ〳〵に云々――「徒然草」に書殘された「仁和寺の僧の鼎の話」である。

かどらず、とやかく内談する折ふし、彼工夫者の通りける程に、此事をかたりければ、是は即座にぬく事ぞと、こまかなる珠數の玉をときてかの糸へひとつ〳〵通しかけて、其後糸をしめてしづかにしやくりける程に、何の仔細もなくぬきける。いづれも此才覺をかんじける。其座に物言堪忍せぬ男の有けるが、我等もすこし御無心有、近年商賣ひだりまへにて、立所居所にてそん銀かさなり、此様子大かた世間にも見および聞傳へて万事賣掛せねば、次第に手づまり、此行先の節季何と分別いたしても、差引算用して貳拾貫目餘もたらぬに極まりける。爰の談合相手に頼みたきといへば、女房衆の親もと分限か又は銀持の出家に弟はないかといふ。それはもちませぬといへば、此談合は埒が明ぬと申て歸りける。

（一）物言堪忍せぬ男――一理屈云ひたい男、一言居士。
（二）立所居所――する事なす事。

西鶴織留世の人心

目錄　四

㊀ 家主殿の鼻柱
心から九度の宿替
別れをなげく中の喧嘩
㊁ 命に掛の乞所
心を付る繪馬醫者
我も人も子に迷ふ世上
㊂ 諸國の人を見知は伊勢
千人まへの鱠燒物
うたがはれたる長崎の心根

西鶴織留世の人心

一　家主殿の鼻ばしら

商人職人によらず住なれたる所を替る事なかれ、石(一)の上にも三年と俗語に傳へし。世帶道具の釜鍋ぬくもりもさめぬに、又宿替の荷物程見ぐるしき事なし。惣じて類(二)をもつて集り、商賣見世も、二條(三)通りに、鮫木藥書物屋ありと諸國の人も見および、烏丸(四)に烏帽子折は年ふりたる事にて、伊勢神樂のくわんしん(五)禰宜鹿島(六)のことふれ、あたまにゑぼし被ほどの者はしらぬといふ事なく、ありきやうがり舞まひ(八)までも、入用の時は爰に行て是をとゝのへければ、聲なうて人をよびよせ居ながら渡世の種とぞ成ける。下京七條通りに小家をかりて、春夏に女房に扇子を折せ、秋のすゑより冬中は、男手(九)もみの紙子をこしらへ商ひけるに、六條(一〇)まいりの道者國みやげに買調へ、手前次第に榮へすこしの資を仕出しける時、隣あたりの茶呑物かたりに、家主の内義の鼻は人にすぐれて、阿太子(一一)山の天狗の媒鳥(おとり)に見立たと、扇子やのかゝが笑はれけると、其座より追從につげ口する人あつて、屋ぬしの内義わめき出し、親の產付て置しやつた鼻なれば、

(一)石の上にも三年――諺。辛抱つよきを喩ふ。
(二)類をもつて集る――諺。
(三)二條通りに――此の通りに書物屋・木藥屋のあつた事は諸書（京雀・京羽二重）に見える。
(四)烏丸に――これは烏帽子と烏丸との酒落で、この町にその店があつたといふのではない。
(五)くわんしん禰宜――勤進彌宜。來錢の寄進を請ひ歩く。
(六)鹿島のことふれ――正月その年の吉凶を鹿島明神のお告として觸れ廻る物貰の一種。烏帽子狩衣の姿、
(七)ありきやうがり――萬歳のことか（「ありきやう」とは萬歳の唄ふ詞である）
(八)舞まひ――扇拍子だけで唄ふ幸若舞。一種の乞食藝人。
(九)手もみの紙子――手製の紙子。
(一〇)六條まいり――京都の本願寺に參詣すること。東西の本願寺ともに六條にあり。
(一一)阿太子山――愛宕山。「梅本紀僧正は日本第一の天狗と成つて、愛宕山の太郎坊と申す也」（源平盛衰記）

（一）貌のとりあひ――顔の道具の調和で、格好の事である。
（二）よい程に――この下に「直してくれ」の意を補ふ。よいやうにしてくれの意。
（三）ねだられ――強請られ。
（四）舌長――おせつかい、饒舌。
（五）ゆづり――なすりつける。
（六）さげおだれ――庇のこと。「かまひ」は「構ひ」で、支障の意。こゝは鼻が高くて庇へ邪魔をする。
（七）おかた――人の妻をいふ詞。
（八）末摘――末摘花。源氏物語に見える一女性。常陸宮の姫君。末摘花は紅花の事で、この女性は實は鼻が赤かつたのである。
（九）いふての后――と申し上げた后様。
（一〇）御所車――牛車。
（一一）ありさま――お前、汝。
（一二）あらためて――穿鑿する。
（一三）上氣――赤くなる。憤怒の貌。
（一四）言分――喧嘩口論。
（一五）もどく――口ごたへする。反抗する。
（一六）首尾――事情（こゝは何か秘密があるらしい語氣）
（一七）我女房と宿替云々――女房を離緣するといふ重大事と轉宅位の何でもない事とを一緒に出來るものか。
（一八）勿體――勿體ぶる、威張る。
（一九）醒井町――西本願寺北屋敷の東の町。
（二〇）六角堂――頂法寺、京都誓願寺通烏丸にある。
（二一）逆ばしら――材木の木理（モクメ）を逆さに用ひた柱。
（二二）虹梁――柱と柱とに渡した曲つた梁木。

おれがまゝにはならぬ、借屋中のかゝさま達にまかせます程に、何とぞいたまぬやうに貌（一）のとりあひよく賴ます、わたくしの鼻柱を遊女のごとく賣物にはいたさず、一代養ふて置男さへ堪忍して十九年添てゐますれば、外に別の事はないとおもふたに、どうした事に皆さまの御やつかいにはなりますぞ、兎角けふのうちによい程（二）にとねだられ（三）けるに、いづれも是にめいわくして、一日もお家のはしに居ますからはお主同前、お口が廣いといふも舌長（四）な事、お足のひらたいもお着物を長ふめせば誰見付る事はなきに、日比口がすぎてすぎてと皆扇屋のかゝにゆづり（五）ければ、いよ〳〵内義は腹立して、是あふぎや殿、我等が鼻が高いによつて、こなたのさげおだれ（六）へかまひまして、出入に難儀をしまする程に、家を早々明てくだされといふ。女房げら〳〵笑ひして、是お内義京は廣ふ御座る　家賃さへ月々に濟しますれば、雨ももらず鼻もたいていの所へ宿替ますといふ。是おかた（七）、むかしも鼻の高い人に末摘（八）といふて（九）の后さまがあつた、そなたがいやしい人で源氏物語を見やらぬによつて、物の合點がゆかぬといふ、わたくしも内裏様の娘に生れましたれば、御所車（一〇）にも乘ますといふ。是輿車にのりつけぬ者は腰がおれます程に、そなたは桶屋の娘なれば、親仁殿の手細工の棺桶にのりやれといふ。いやありさま（一一）に人の先祖あらためてくだされいといふ

か。こなたも出雲の神主の頭のひとり子といはしやるが、何として貧な所へ緣はむすばしやつた。日本國の事さへ相應に取合せ給ふに、神も意知のわるい事ぢや。世間にはようにたものが御座る、此前嵯峨の筆屋といふ旅籠屋に天狗のこまんといふ人たらし女があつたが、どこやら家の持のお内義に生彩しと見しらぬものはないが、今は京のどこにか御座るぞと、同じ事ばかりいへば、内義上氣（一二）して此方の家さへあけてくだされば、言分（一四）する事も御座らぬと、裏の戸はづしてかへられける。扇屋の男迷惑して、おのれが口ゆへ住なれたる所を立のく事身體の沒落なり。爰は家主殿へ詫言しよといへば、女は氣色かへて思ひもよらぬ事といふ。男のこと葉をもどく（一五）からは暇をとらす程に裸で出てゆけといふ。いかにも出てゆくべし、我追出さるゝからはそなたの姉御の頓死なされた時の首尾（一六）を、世間へ沙汰しておいとま申と、身ごしらへすれば、男手をさげて、我女房（一七）と宿替る程の事がおもひかへらるゝ物か、内々大屋の女の勿體（一八）に見あいた。此次手に爰を替んと五條通醒井（一九）町へやどを替しに、南どなりの女房年月亂氣して時ならず刄物ぬきて、近所かけまはるにおどろき、爰をも又かへて六角堂（二〇）の前に住けるに、此家むかしから逆ばしら（二一）のわざといひて、夜々虹梁（二二）の崩るゝごとく寢耳にひゞきて魂ひをうしなひければ、爰にも又居かねて千本通り

（一）野墓――火葬場。千本通りの西方の最勝河原の墓地か。
（二）今と云ふ今――今度こそは。
（三）専修派――眞宗の一派。専修寺派のこと。伊勢一身田のその寺を本山とする。高田派ともいふ。
（四）五器箱――御器箱・食器を入れておく箱。「かぶる」は嚙むこと。
（五）むさき事――糞をする。
（六）家に油むし云々――徒然草、第九十七段に「家に鼠あり、國に盜人あり」と誌したのを聯想したので、古人は兼好を指す。永代藏にも「用心し給へ、國に賊、家に鼠、後家に入婿」と見える。
（七）新玉津島――「存五條松原通室町東」雍州府志。
（八）鬼門――（前出）東北隅。
（九）金神――陰陽家で祭る方位の神。金氣の精で萬物を枯殺すると云ふ。年によつて方位を異にする。
（一〇）紙子四十八枚――紙子は四十八枚の紙で作ると云ふ。「身は紙子四十八枚哀れなり、彌陀の願ひにもれぬ牢人」（俳句）
（一一）面々かせき――各自が稼ぐ。
（一二）白石――陸前國刈田郡。「白石。片岡小十郎居城此所より名物の紙絹紙子出る」（一目玉鉾）
（一三）平戸――肥前國北松浦郡。
（一四）いつかめぐりあふべし――「心にかゝらぬか。意は「以後心にかゝらぬやう」であらう。
（一五）心にかゝぬ――「心にかゝぬ」。
（一六）暇の狀――離縁狀。
（一七）乞つめて――無理に請求する。
（一八）おのれもひとりは云々――お前はとても男なしでは辛抱できまい。
（一九）銀盜人目――目は奴嘲る詞。
（二〇）のけば――退けば。
（二一）絵馬醫者――前出。
（二二）歩行カチ――乘物なしの醫者。
（二三）自身番――町の四辻におく番屋、町内の家主自身が交代して守る。當時の自身番の内規として老人・幼少・後家及び醫者、法體は名代でよかつた。
（二四）夜咄――自身番の夜咄と「の」の字を入れて見る。

に越て、物閑成所とよろこびしに、西風のたび〳〵に野墓（一）のけぶりかよひ、夫婦ともに嫌ふむしあつてわづらひ出せば、此所にも住憂、また新町の上へ引越けるに、家新しく然も一軒屋にて、北どなりは椀屋の御隱居とて、表は格子作りにして物にかまひ給はず、南のかたは酒屋麹屋歷歷の御かた、今（二）といふ今、おもふまゝなる所へまいつたと心いはひせしに、其後から御隱居に專修流（三）の長念佛申出され、明がたまで枕にひゞき物いふ事も聞えず。又かうじ屋から蟬の大きさしたる油虫ども數千疋わたりきて、五器箱（四）をかぶり茶の水に飛入、衣類を喰割、米だはらに穴をあけ、屏風扇をばら〳〵になし、肴かけを荒し醬油の徳利にはいり、鹽籠にむさき（五）事どもして、人のしらぬ世の費也。古人も是をしらば、家に油むし（六）國に酒の醉と書べし。さても〳〵一夏を暮しかね、爰も程なく立のきし。二とせにもたらぬうちに九の所住替、すこしためたる金銀殘りすくなく、其後は松原通り新玉津島（七）のやしろ立せ給ふほとりに、女房のために腹がはりの弟が住けるが、此ものがさし圖にまかせ其町へ替ける。此家鬼門（八）角なる事を氣にかけ、殊更當年の金神（九）にあたるといへば、此末世に何の方たゝりこつちへまかせ給へと無理に移らせしに、萬心にまかさず日夜におとろへ、身上は紙子四十八まいばら〳〵（一〇）となつて、それからは面々（一一）かせき、男は奥州の白石（一二）といふ所へ紙子屋が下人と成、女は扇折る事を身過のたねとして、平戸（一三）の島國へつれゆきける。東西へいきわかれする事も、此女の無用の口のすぎたるゆへぞかし。總じて女たしなむべきは言葉なり。夫歸のわかれをしばらく惜みて泪に袖をあらひ、又いつかめぐりあふべし（一四）、さらば〳〵といふ時、此女分別しかへて、是男何をいひかはしたればとて、數百里へだてゝ益なし。心にかゝぬ（一五）暇の狀と乞つめて（一六）、其跡はいさかひ仕舞に、おのれも女もたずにおらうか、姉の銀盜人目（一九）とわめき別れぬ。まことにのけば（二〇）他人、さてもおそろしの人こころや。

二　命に掛の乞所

世間に絵馬醫者（二一）といふ事仔細をたづねけるに、歩行（二二）いしやの田舍より大坂住居を望み、すこしのたくはへして身體かためざるうちは妻をも持ず、借宅の軒に竹の菱垣ゆひまはして、名苗字を筆ぶとに張札はしらにあらはし、近所に急病あれかし一手柄して見せんと、明くれ時節待ども、よびにくる人なければ是非もなく、宿にばかりも居られずして、難波の寺社をまはりて日を暮し、有時町内の自身番（二三）夜咄（二四）しによばれて、今宵けしからぬ風は、霜月朔日なれば諸國の

（一）神歸り――十月、出雲に集つた神々が十一月になつて、それ〴〵歸るのである。
（二）大森彦七――名は盛長。足利尊氏の臣。曆應五年春伊豫國金蓮寺の能樂の歸路川を渡る際、道伴の美女を背負ふと、それが鬼女となつたといふ傳說がある。それを繪にしたもの。
（三）山本文右衛門――未考。
（四）十面――澁面。
（五）掛烏帽子――打かけ烏帽子のこと。折烏帽子を小結（コユヒ）も頂頭掛（チヤウヅガケ）もかけずに頭を入れて後の針だけで留てあておく。掛緒を頤でくくぶやうになつたのは、堅い塗烏帽子になつてからである。
（六）しのびの緒――忍び元結のこと。見えないやうに髪に括りつける緒である。
（七）長谷川藏――長谷川派の畫家、等伯の二子。長谷川長藏信春の事であらう。
（八）五郎朝比奈――曾我五郎時致と朝比奈三郎義秀と

（一）神歸りのあれなるべし。天おそろしや、化物の出そうなる黑雲といひける次手に。何と天滿天神に掛たてまつりし大森彦七が繪馬、山本文右衛門が筆勢大きに出來物と沙汰しければ、彼醫者十面作りていづれもはお氣が付ますまい、あの彦七にひとつのあやまり有、掛烏帽子の緒を書落したりといふ。皆々手を拍て、さりとはこまかに見とがめられし事ぞと、此評判やむ事なく、其後さる大醫にたづねしに、畫師も物をしらねばならざる事かな、彦七が時代までは髮にしのびの緒を付て留ける、かけゑぼうしに緒を付初しは百年此かたと、物語いたされしに、是は〳〵と各々又手をうちける。總じて繪馬は万人の目にかゝれば、かりそめながら大事の物なり。都の清水に長谷川長藏が筆にて五郎朝比奈が力くらべを書り、此袴のまちのひだ折たる上に、心もなく舞鶴の紋がら書たる所、猪熊の染物屋の下女が見出して洛中是沙汰になり。長藏一生是をわづらひけるとなり。又祇園のやしろに、火ともしの大男雨の夜麥わらの笠着てかよふを、化物といひふらせしを、平忠盛くみとめ給ふありさま、別所權右衛門が書ける。大男の手より取落したる土器の割ども、取集めたらば四五枚ほどもあるべし、是はあやまりと、稻荷の前なる土鈴の細工人が見出して、是も沙汰せし時、物に心得有人のいへり、紋鶴とは各別の僉議なり、其火ともしの男かはらけ五

（九）心もなく――不注意にも。即ち紋のつけ所を誤つたのである。
（一〇）舞鶴の紋――朝比奈の紋所。兩翼を張つた鶴の羽、紋がらは模樣。
（一一）猪熊――猪熊通京の町名。堀川通と大宮通りとの間の通り。
（一二）是沙汰――大評判。
（一三）わづらひ――氣にかける。
（一四）別所權右衛門――狩野派の畫家。名は則房。雪山と號す。延寶頃の人。
（一五）稻荷の前なる土鈴――稻荷は伏見稻荷。土鈴は小さな鈴を多く繋いたもの。
（一六）各別の僉議――格別で、同樣には批評できない。
（一七）合法が辻――天王寺にあり。「相坂為水の西の辻なり、閻魔堂あり」（摂津名所圖會）
（一八）すぼつた――すぼつた事とかの意。すぼつたは萎んださま。
（一九）新地――川岸の妻町。
（二〇）じやうこん――土根。立派な根氣（努力）
（二一）醫は聖人のまね――

枚持たる事もあるべし。むかしの事を今其男に問れもせずと、大笑ひして果しける。最前のくすしも病人をこまかに見立る事は成がたし。年中隙なるまゝに何の用にも立ざる事ども、合法が辻の石のゑんまわうの肩のすぼつた、新地の中の町に公家の弟らしき人を見立て置たなど、ひとつも役に立ぬ事ぞかし。此隙に見わたらぬ醫書を才覺して、寫し本にする程のじやうこんなくては、此道の出世は成難し。醫は聖人のまねながら、今の世は自然の道理をもつて、我名をよびくる時もあるべしとはまはり遠し。爰は方便なくて萬人思ひ付べからず。むかし入殘の目藥屋の根元わづか成事なりしに、此人才覺にて夏蛤の一升を三文づつの時、毎日一斗買て、近所へ是をつかはし、身を煑てまいりて辛は此方へといひける程に、さてもさても此目ぐすり大分に賣けると所よりいひはやらかし、それ世に廣まり分限に成けるを見て、今何軒か出來ける。又あるくすしは年玉に埒のあかぬねりやくをこしらへ、金德丹と銘を打、諸病によしと書ち

「醫は仁術」ともいひ、「上醫醫國、其次救人、固醫官也」（國語）ともある。
（二二）思ひ付――たよりにする。
（二三）入殘の目藥屋――「日藥屋。根本（北渡邊町北御堂のうしろ西がは門のきは）入殘妙珍。並かけ藥あらひ藥あり」（難波丸）。膏藥の目藥らし。
（二四）根元――もとで。
（二五）辛――殼。
（二六）いひはやらかし――評判を立てる。
（二七）今何軒か――「入殘の目藥屋が一である。
（二八）金德丹――金德妙功丸（攝州府志）の名が見えるが、それに似せた腹藥か。丹は練り藥。

（一）十德――素襖に以て脇を縫ひつけた衣。法體の人が着る。
（二）唐へのなげ銀――諺。反應のなき喩。
（三）此禮請たる――「此禮物を貰つた人達は」の意。
（四）人のおもひ入――世間の人の「感じ」評判。（この醫者に對する）
（五）仕付所――嫁入の口。
（六）やとひ轆杓――臨時雇の六尺（船舁人足）
（七）棒を呑て――驚くさまの喩。こゝは威勢に壓される氣味。棒は乘物の棒と掛けた詞。
（八）當にせしも――豫定してゐたのに。
（九）神農――醫療の神。「神農氏始嘗百草、始有醫藥」（史記補三皇本紀）
（一〇）手まはし――「手まはしが惡いから駕乘物はやめた」（下りるは乘物だからいふ）といふのは……」の意。
（一一）治部輔亂（ヂブノシヤウラン）――治部輔は石田三成。即ち關原の戰（慶長五年九月）

らし、十德の借着して、正月二日の夜のうちから、近付のかたは申におよばず、伏見のくだり船で咄ししたる人、あるひは旦那寺で參り逢たる人、又は舞鶴の芝居で同じ莚に居たる人、風呂屋へひとつに入たる人までも、所をたづね置、一目しる人殘らず年玉を唐へのなげ銀とおもひて二三年も勤めければ、此禮請たるきのどくに思ひながら、後には心にかゝり、下人の風引込程の事にはよびにつかはし、いつとなく時花出、花色ちりめんの長羽織を武士の具足と思ひて拵へ、草履取の外に男を置て、すこし勿體を付れば、人のおもひ入もよろしく、其内に浪人の娘などの仕付所のなく、すこし敷銀あるをよび入、此勢にちいさき駕籠こしらへ、壹人は手前の男又一人は毎日八分づつのやとひ轆杓、かたもそろはず舁れて息杖は見ぐるしながら、先乘出してかけ廻れば、世の人のり物の棒を呑て、養生ぐすりの一服貳分當にせしも、はや五分づつの算用してお禮申ける。隨分爰を大事と神農を祈るべし。又むかしのごとく歩行にてまはり、乘物では療治の手まはし惡敷下たとは言分もむつかし。そも〳〵駕籠に乘時一代の思案所なり。歩行の時は繪馬見ても日を暮せしが、のり物にのり出て行所のないは迷惑して、座敷楊弓の見物、又は治部輔亂の長ばなし、病人もなき所の茶を呑あらしぬ。然れども世間ありさまを見るに、四五年目にはかならずは

（一二）三人まはし――三枚肩とて、三人で舁ぐ駕籠。
（一三）退屈して病人を取れける――「取られける」で、他の醫者の方に病人をとられるのである。退屈は待遠しくて嫌氣がさすのである。
（一四）氣をこらし――氣を痛める。
（一五）年をよらする――心配で年が寄る。
（一六）朝脈――朝の往診。
（一七）もやつき――不快の感じである。こね〳〵する。
（一八）まゝ――飯。「飯をまゝと云ふはうま〳〵の上意也」（旅路加於比）
（一九）上言――噂言。
（二〇）勝手――臺所。
（二一）ぶら〳〵――ふら〳〵であらう。「つい、うつかり」
（二二）名譽――有名な。（普通でないのである）
（二三）中の島――堂島と土佐堀川とにはさまれた地。

やり病有事なり。此時老醫上手の直しかけたる跡を請取、心の外の仕合めぐりて、是より名をあげ三人まはしに乘つゞくる事ぞかし。まことに藥師のうたてき事は、いますこしの所に退屈して病人を取れける。又取事もあればたがひ事と思ふべし。只醫者の氣をこらし年をよらする事は、宵に藥出し置、朝脈に見まへば、きのふのお藥たべさせますと腹にもやつきが出來まして、目まい心に足がひえまして、兎角物を申ませぬといふ。又そこへ見まへば、いよ〳〵くだりも留りませず、大ねつがさしまして、佛樣の所へまゝ喰にゆかふ〳〵と上言を申まして、夜の明ますを待兼ましたと、母親なみだぐみてかたる。又爰へ見まへば、胸がいたみ出まして口中がはれまして、もはや寢かへる事も成ませず、是程俄によはりましよとは、ぞんじませなんだといふ。是さへきのどく成に勝手に親類あつまりて、今時は藥が人をころす、はじめから無用といふたに、ぶら〳〵と掛て置て、寺へ人をやるばかりといふ聲、骨身にこたへ。やう〳〵爰をにげのき、何の因果に此身には成けるぞ、渡世は八百八品といふに、醫者は其中のより屑なるべし。殊更むづかしき病生あてがはれ、すいりやうの療治をするも心おそろしき事なり。されば大坂の廣き事は名譽の病人あまたあれども、いづれの手にかけても直らぬはなをらぬなり。中の島に年十七に成ひとり

（一）玉造――大阪城の南方。
（二）取立――物につかまつて立つ。
（三）分限なれば云々――金持だから恥が外にあらはれないやうにする事もできるけれど何とかして癒したいと歎いた。
（四）銀五百枚――丁銀五百枚。小判にして三七五兩。
（五）藥師――藥師如來。衆生の苦を醫す佛である。
（六）御夢想――夢の御告。
（七）世の寶は云々――「よき友は智者・醫者・福者・老者には近くよりそひ親みをなせ」（慶長見聞集）
（八）たへさず――たやさず。
（九）身をはたらかし云々――「心をば使ふことなく休みおき身をばひまなく使ふべきなり」（爲愚痴物語）
（一〇）他人のあらはれ――薄情な樣子をいふ。
（一一）あぐむ――倦み飽く。
（一二）自然の事――死を指す。

娘生ながらに白髪あたま形美女にしてさりとては惜し。又玉造[一]に十六に成むすめ、四年此かた大べんおりずして喰物はつねのごとし。又長堀に十九に成娘あり、誕生日に取立[二]しての此かた、晝夜横寢をしたる事なく、我家を年中ありきて計暮しぬ。唐の書物にはかゝる事もある事にや。此親皆分限[三]なれば恥を隱してなげきぬ。此内ひとりなほせば銀五百枚[四]は取事なれ共、無念なり。あはれ藥師[五]の御夢想[六]にて、此なるを妙藥もがなと願ひぬ。藥代程高下のある物はなし、八十ぱくもりて銀五匁取に、三服にて銀五枚に樽肴を取人も有、世[七]の寶は醫者智者福者といへり。中にも醫者のなき里に住事なかれ、ふたつなき命を賴む事ぞかし。一切の人間、無事堅固になくて世に住る甲斐はなし。常々灸をたへさ[八]ず、鰒汁大酒をやめて身[九]をはたらかし、氣をなぐさめ養生はつねの事なり。されば世の人の付合日比のよしみ、病中の時しるゝといへり。兼ては賴みにいたし置ても、それ〳〵の家業のさはりなれば、はじめの程こそ日夜に行見舞もすれ、月をかさねてのわづらひになれば、いつとなく他人[一〇]のあらはれける。身をわけたる親子の中さへ、かんびやうにあぐみ[一一]て、たがひにあいそをつかし、さもしき心の見えすきける。身を賴みたる男の病中、女程大事にかくるもの外になく、自然[一二]の事あらば死人と一所と思ひ込しも、後には心ざし替りて、かさね

（一三）湯水――湯水の世話で、看病のこと
（一四）埒の明――こゝは死期をいふ。
（一五）おろか――おろそか。
（一六）あとしき――跡式。遺産のこと。家督を相續すること。
（一七）死光り――生前に善根を施こして立派な往生をすること。
（一八）火宅の門――火宅は佛語。現實世界の苦しみは燒亡してゐる家に住むと同樣の意。こゝは子の死んだ家を指す。
（一九）横に車――「横車を押す」といふ諺から出て、正しい道でない意から「心の鬼になつたやうな男は、他人の愁嘆には一向平氣だ」との意であらう。
（二〇）さる程に――しかしながら
（二一）人々もたねば云々――誰でも子を持たなければ子供の病氣の時の親の心勞は分らない。
（二二）大師の二たび――弘法大師の再來。
（二三）年中買ぬる――年來買ひつけの商人。
（二四）どんな――「鈍な」か。馬鹿な事云つて來るなの意か。

て持男は、此人のごとくよは〳〵としたるにうんじはてたと、いまだ息も引とらぬうちから、後の事を分別して、我手道具の外に男の物までも取集め、其後は湯水[一三]もそこ〳〵に取あつかひ、埒[一四]の明のを待ける。男も又女の長病にはあぐみて、一日もはやく最朝願ひける。死さまに看病おろか[一五]にいたさぬは、あとし[一六]きの望みゆへなり。親でも子でも欲に極る世の中なれば、死跡に金銀を殘すべし、是を死光[一七]りといふ。死別る中にも、親より妻はかなし、妻よりは又子は各別にふびんのますものなり。一子などころせし時は、世にながらへては居られざる程におもふ物なりしが、ふたりも三人も死せて後は、心鬼のごとく成て中々なげきもうすく、人の愁も心にかゝらず、火宅[一八]の門を横[一九]に車と出ける。さる程に子のわづらふ程、世に物うき事はなし。人々[二一]もたねばしらぬなり。有人五十過てたま〳〵男子をもふけしに、然も生つき百人にすぐれ、是を見る程の人、かゝる貧家にてそだつる子にはあらずといふ。はや三歳にて習はずして花鳥風月の大文字書は、大師[二二]の二たびと是をおろかにせざりしに、其春より虫を發して、幾藥かあたへけれども更に甲斐なく、けふをかぎりと目を見つめ、とやかくなげく所へ、年中買ぬる[二三]此中の銀子を、今濟してくだされいとせはしく使を立る亭主腹立して此なかへ[二四]どんなといふて歸しける。此使又來て、そなたの子

が死ば銀取まいと約束はせぬとわめくうちに、此子おち入ければ皆々泣出す中に、亭主は彼米屋をさしころして置、我も果ける。

三　諸國の人を見しるは伊勢

(一)神風や伊勢の宮ほどありがたきは又もなし。諸國より山海万里を越て、貴賤男女心ざし有程の人、願ひのごとく御參宮せぬといふ事なし。殊更春は人の山なして花をかざりし乘掛馬(二)の引つゞきて、在々所々の講まいり(三)、一村の道行(四)も二百三百人の出立。同じ御師(五)へ落着ける程に、東國西國の十ヶ國も入亂れて、道者の千五百二千三千、いづれの太夫殿(六)にても定りのもてなし、勝手(七)いかなる才覺(八)にて此ごとく成ける事ぞ、本膳ばかりか二の膳の品々居られける。臺所に人の貳百もはたらく者のなくては、二千三千のまかなひ(九)なる事とおもへば、わづか貳十人ばかりにて手まはしなり。先椀折敷に箸まで(一〇)うつて皿小道具までを、三人の請取(一一)にて出せば、飯は煮湯に籠をしかけ、何の隙も入ぬ事、汁の魚をまなば(一二)しまな板なしに大鍋へすぐに切込、切目とかういふ事(一三)なし。中にも鱠はむつかしき物なるに、年の寄たる男ども袴を着て、手毎薄刃一枚づつ布きれにつゝみて、鱠(一四)のちん刻(一五)にまはりけるが、壹斗を貳分づつに極めて、壹人して一日に一

(一)神風――伊勢の枕詞。
(二)乘掛馬――道中馬。
(三)講まいり――伊勢講の參詣人。
(四)道行――同行。
(五)御師――(前出)下級の神職。參宮衆の宿所をなす。
(六)太夫殿――(前出)御師。
(七)勝手――勝手元・臺所。こゝは「勝手をいかなる才覺に」ての意。
(八)才覺――勘考。(どう智慧を働かしたのか)
(九)まかなひなる事――賄が出來ない事と思はれるのに。
(一〇)手まはし――手配り。
(一一)箸までうつて――箸までつけて。
(一二)請取――請負ひ。
(一三)まなばし――眞魚箸。
(一四)とかう――とかく、かれこれ。
(一五)鱠のちん刻――鱠の貨刻み。こゝの鱠を原本「鯰」に作る。

石づつきざみける其見事さはやさ。つねの庖丁(一六)人十五人斗しても是程は出來まじ。扨是をあへる(一七)事、大半切(一八)に入鍬にて此手ばしき(一九)事見て居るうち也。これらはかくなるべき事なりしが、肴は何によらず二千人の燒物、然もやき立を出す事あまり不思儀(二〇)なり。火鉢五十も有か、又は廣庭に二十間も溝を掘て燒事かと思ひしに、是も三人して鼻うたにて埒をあけゝる。壁ぬる小手(二一)のやうなる物を十枚ばかり火鉢にて燒置、扨大釜に湯をたゝせ、四角なる籠に肴二十枚づつ入て。ざつとゆであげて長板の上にならべ置、最前の小手にて片身ばかりざらざらと撫て其まゝ出しける。伊勢の燒物を兩方やくといふ事なし。よろづ此手まはし、さりとは(二二)〳〵世間各別なり。此所は大神宮のお影にて、年中さま〴〵の身過有。諸國へ初尾(二三)くばりの狀、大椙原(二四)一束(二五)を銀壹匁八分の書賃。中すぎはらのざつとしたる狀は一束壹匁三分にて、隙成(二六)醫者浪人の是を書ぬ。惣じて神職のかたはいふにおよばず、萬の商人までも、伊勢は人にかしこき所を見せずして、皆利發なり。是ほどの人心にて、何者かいつの代にはじめて、鳩(二七)の目の蒔錢百といふを六十つなぎ、壹貫に付て、やう〳〵壹匁四五分づつに賣て、宮めぐりに是をまかせける。雨(二八)の宮より風(二九)の宮へぬけ、又是はむすぶの神、すなはち是が腰抱ものなしに子安(三〇)の宮、是はしうとめと中をよく守り給ふ神と口を

(一六)庖丁人――料理人。
(一七)あへる――和へる。
(一八)大半切――半切は底の淺い盥形の桶。
(一九)手ばしき――手ばしこき、手早き。
(二〇)不思儀――不思議。
(二一)小手――鏝。
(二二)さりとは〳〵――意想外なことを感嘆する詞。
(二三)初穂くばりの狀――初穂くばりの祝儀狀。
(二四)大椙原――杉原紙の大判。
(二五)一束――十帖。一帖は四十八枚(萬金產業袋)。
(二六)隙成――隙なる。暇ある。
(二七)鳩の目――鉛製の薄い小錢。十目で錢一文に當る。
(二八)雨の宮――雨を司る神、こゝは炙の風の神にかけていつた詞。
(二九)風の宮――別宮の一で五十鈴川の南にある、祭神は級長津彦命。級長戸邊命。弘安役に神風を起した神といふ。
(三〇)子安の宮――安產の神。

たゝき、若い男を見かけては是成が久離切られさしやる時、親達の堪忍なさるやうに後神に立給ふ宮と、其道者の風俗貌つきを見合、宮雀壹人して小宮五つも六つも請取り、壹文に千貫の入替よきを、くはつとなげ給へとよくぼりける。新錢をなくる人は稀にして、年年伊勢中のそんつもり難し。是ぞ智恵ない神參に無用の智恵を付ける。近年は鳩の目法度になりぬ。又問の山の乞食、むかしは遊女のごとく小袖の色をつくして、味噌こし提たるもおかし、其すがたには似ざりき。中にもおたまおすぎとてふたりの美女あつて、身の色を作り三味線を引ならし、あさましや女のすゑと伊勢ぶしをうたひける。毎日の參詣あだぼれをして爰に立とまり、前なる眞紅の網の目より、貌のうちをねらひすまして錢なげ付けるに、一度も當たる人なし。自然と顏をよける事を得たり。有時江戸より參りたる人、百錢をなげつけしに、お玉が貌にあたり、額にすこしの疵を付てよしなし。諸國より隨分大氣成人參りけれども、錢百文なげ付しは是がはじめなり。大かた世の人の心、さのみかはらぬ物ぞかし。又明野が原明星が茶屋こそおかしけれ。いつとても振袖の女、赤根染のうら付たる木綿着物を、黑茶にちらし形付ぬはひとりもなし。扨日本に爰の女程、白粉を付ける所又もなし。同じお茶屋の女の風俗住吉とは是各別の事也。所によりて伊勢難波

（一）久離切られ――舊里切られ、勘當うける。（二）後神――護り神。（三）宮雀――琴詣人を案内する下級の神官。（四）小宮――別宮を除く末社。内宮に八十、外宮に四十あるといふ。（五）壹文――一文のお賽錢を上げて千貫目の御利益を得るやう、くはつと投げて下さいと懲ばつて宮雀が云ふ「よくぼり」は「よくばり」。（六）新錢――新鑄の錢。（七）智恵のない神參に――「智恵のない神に智慧つける」といふ諺をきかせて、無心の者に惡智恵つけるの意。（八）鳩の目法度――貞享二年十月禁令（宇治山田市史）。（九）問の山――内宮外宮の中間に位するから名づく。妙見町の東の坂で、尾都坂といふ。（一〇）其すがたには似ざりき――今ではその儀はない。（一一）おたまおすぎ――「相の山、お杉お玉が庵、前に紅の網を張り、三味線を引いて小歌云々」（好色旅日記）。（一二）伊勢ぶし――問の山ぶし、伊勢節は同じものらしい。問の山でうたった俗曲。（一三）よしなし――つまらぬことをしたの意。（一四）明野が原――廣き野なり、海道筋に絞莫人屋あり（伊勢道中細見記）。（一五）明星が茶屋――多氣郡明星村の茶屋、參宮の人に清めの茶をすゝめた。（一六）住吉――是各別の格別の相違があるの意ではなく、同じお茶屋の風俗として、明星の茶屋と住吉の茶屋とは特別に人の情を爛るの意らしい。それは「住吉の出茶屋はどうも動かれぬ」（兩吟一日千句）。また「明星が茶屋の女は都四條河原の風俗してつやらしく」おはします」（旅日記）。「伊勢參人の面のしろ〳〵と、事缺の色明星が茶屋、袖引けばあなたへちろり此方にも」（大矢數）など見えるからである。（一七）伊勢灘波の替り――「物の名も所によりて變りけり　難波の葦は伊勢の濱荻」（つゝば集）。尤も物によつては所々で變りがあるの意。（一八）錢掛松――安濃郡（今の河藝郡）豐久野にある松。

の替りあり。爰に心を留るにもあらず、旅のしばしの慰ぞかし。此廣野錢掛松のほとりに三十四五年此かた、道者に取つきて世をわたりたる歌ひくに二人ありける。所の人異名をつけて、取付虫の壽林、ふる狸の清春といひて、通し馬の馬士駕籠までも見しらぬはなし。歌もうたはず立寄て、是伊豫の松山の衆樣、是播磨の書寫の御出家さま、これ備前岡山の女中さまと、人を見立て國所の違ふ事、千度に一度なり。有人隙にまかせて遊山參りなれば、此びくにども茶屋によびて、いかに此道になれたればとてあまりに名譽なり。我等は何國の者とおもふぞ、何かして世わたるぞいふて見よといへば、こなたは唐人に見せても見る事、長崎の人といふ。此男びくりして何とした目じるしありや、物いひ聞てかといへば、お言藥は其まゝ出雲のことばなれども、内衆二人ながら長崎なり。こなたの年の程五十五六にも見えて、肌着に白りんず、殊の紋びろうどのゑりをかけ、金拵への大脇ざし、我まゝに見ゆる所長崎でないかといへば、い

（一九）歌ひくに――歌念佛を歌ふ尼。「もとは清淨の立派にて熊野を信じて諸方を勸進しけるが　いつし衣を略して齋をみがき頭を仔細に包みて、小歌をたよりに色を賣るなり。功齡歷たるを御寮と號し、山伏を夫に持ち女童の弟子數多取りて仕立つる也」（人倫訓蒙圖彙）。（二〇）通し馬――宿々で馬をかへず、雇ひきりの馬。（二一）書寫――播磨の名刹書寫山圓教寺、（源空開基）。（二二）名譽――褒め詞、不思議・奇妙の意。（二三）唐人に見せても――誰に見せても意。唐人は長崎に緣ある語。（二四）内衆――伴の者。（二五）りんず・びろうど――倫子・天鵞絨。共に舶來品。（二六）我まゝ――豪奢、贅澤。

（一）辻の事に―ついでに。
（二）卒爾ながら―こゝは失禮ながらの意。
（三）龜腹―龜のやうに扁平な腹。
（四）たて駕籠―たては「立」か「伊達」か不明。立ならば問屋から仕立てた駕で、辻駕に對する詞となる。こゝは伊達であらう。
（五）乘ちらして―威張つて來るさま。
（六）其まゝ―そつくり。遊女そつくりの者の意。
（七）よせ事―口實、かこつける事。
（八）ばちあたりども目―目は奴、め。

よ〳〵興覺て、我若年の時雲州へ養子に行しが、歸る首尾あつて此仕合、さりとては〳〵。扨商賣を辻の事にいへといふ。それはいひかねまする仔細ありといふ。是非にいへといへば、卒爾ながら傾城町の人では御座らぬか、さきほどよりこなたの目づかひを見るに、十五より内の美女しみ〴〵と氣の付事、戀にはあらずといふ。此人樣子を聞て肝をつぶし、さても〳〵はづかしき見立かな。天照太神を何々せいもん、我女郎屋にはあらず。よき娘の子に目の付事は、我只一人娘を持けるに、いかなる前世の因果にや當年十三に成けるが、今に足立ずして、然も龜腹とか申て見ぐるしく、その上兩眼見えねば、緣に付べき沙汰絶て明暮是をなげき、同じ年程の娘を見ては我子のあれならばと思ふからなりと、泪をこぼして語られける、さもあるべし。其折ふし京女と見へし廿二三の風俗、人の目だつ程なり。たて駕籠ならべて男さかりの若い者乘ちらして通りける。二人のびくにはしりつき、是都の大じんさま、此春中にあんなお姿は見ませぬといへば、此男目を細ふして世界もせまいなどいひさま、ちいさき白銀を一粒づつとらせ通りける。あれは何者ぞと問ければ、あれは其まゝ祇園八坂ものと見えて、人のむすめなり。今の若い者が參宮をよせ事に、いたづら參りといふ所へ、三十六七のかゝが此茶屋までやう〳〵あゆみて腰かけて、

（九）おばた―度會郡小俣。山田へ一里半。宮川の西岸。
（一〇）ぬけ參―父母主人などの許可を得ずして參宮すること。こゝは夫に内密で出たものらしい。
（一一）三ぼう荒神―馬の中央に一人乘り、左右に枠を結びて一人づつ乘る「これを三方荒神と云つた。
（一二）出來心の云々―ふと思ひついて、因てに伊勢神宮へ參詣して來ようと思ひから道を折れて來た、との意。
（一三）關―東海道と伊勢路との追分驛。關の地藏ある所、鈴鹿郡にあり。
（一四）本海道―こゝは東海道を云ふ。
（一五）道中扇子―道中付の扇で、宿驛の里程名所を一覽のできるやうに描いたもの。
（一六）手のよき―風體のよい。
（一七）歴々に見えてから―立派な身分の人々ではあらうけれどの意。
（一八）錢拂の男―會計の男。
（一九）貫ざし―錢一貫を通した緡。

さきへ通りし駕籠の事をたづねて、人の問ひもせぬに、あのばちあたりとも目が、大人の神參りに、宿々で夜のあくるまで物語をしをつて、おばたとやらから駕籠の者ばかりを代まいりをさせて、おのれらふたりは參らぬ談合。男ある女房をぬけ參りをすゝめ、親かたへ聞えたらば追出さるゝはしれた事、ひよつとやとはれて足のいたむに、三ぼう荒神に乘ともいひおらずに先へと、にくげにしかつて行ける。又三人つれてひとり〳〵風呂敷包みをかたにかけ通る。またびくに一錢くだされといへば、下向にとらしようといふ。此道へは歸らぬ衆といふ。それは何と見立ていふぞ。そなたたちは次手に參宮して、江戸へかせぎに行るゝ職人衆じやといふ。三人一度に立とまり、是は仔細を聞たしといふ。出來心の關からの參りなればこそ先下の帶ふるし、其上三人ながら本海道の道中扇子持給ふからは、江戸への初くだりといふ。皆々あきれはてゝ跡をも見ずして行ける。其跡から手のよき一連、あれどこ衆といふ。あれは奈良からの參り、皆歴々に見えてから、それは〳〵始末なる參りなり。何程口乞にしてもあの中間から一文よりはもらはぬといふ。あんのごとく跡から錢拂の男貫ざしよりぬきて、ふたりが中へ一錢とらせて、そのまゝ腰より矢立の筆染て、明星が茶屋のびくに七八丁もつきてさま〳〵口をたゝき、ひかれぬ首尾になつて

中でも薄き銭を一文とらせましたと、小づかひ帳に付ける。是は氣(一)のつまりたるせんさくなり。又角前髪の若い者、同じ心の飛あがりども四人。揃へ浴衣の染こみに氣(二)をつくし、道筋を我物にして參りける。あれはどこものぞ、大津の濱邊の者どもといひもあへず、勸進を乞けるに、無理に所望して歌をうたはせ、此あたりの名所を語らせすまして、びくにも我々の貌をよく見しつて置て、石山寺へ參りやつたら寄りやと云捨て、ひとり〳〵にげて行。是申々と呼かへせば、御緣が座らばかさねてといふて、はや其人影はなし。びくに大笑ひして鬢鏡(三)おとした程によびかへせば、勸進壹文に替て行ける。太神宮の即座に息盜(四)どもに罰を當てさせたまふと、最前の長崎の男と長物語して別れける。何もわすれなし〳〵。

(一)氣のつまりたる――こまかい。錢勘定の微細な。
(二)氣をつくし――氣を張る。氣取る。
(三)おとした程に――「落ちましたよ」と呼びかけたのである。程は擧の程度ではない。後に「壹文に替て」とあるのに注意せよ。
(四)息盜――たゞで歌はせたからである。

西鶴織留世の人心

目錄　五

㊀　只は見せぬ佛の箱
　丹後の國切戸の文珠に參詣
　世につれて替るは人の美形
㊁　一日暮しの中宿
　世のさだめとて三月五日九月五日
　猫は仕させなしの奉公の身
㊂　具足甲も質種
　葬まじりの伏見の里
　心なき商賣人の普請

西鶴織留世の人心

一　只は見せぬ佛の箱

丹後の國切戸(一)の文珠堂に金童子(二)といへる脇立(三)あり。是を開帳(四)する事、錢百文に極め置て諸人に拜ませける。此童子智惠の箱といふ物を抱きて立せ給ふ。愚なる參詣の人々拜めば、佛のちゑをもらふてくるやうにおもひぬ。其身生れ付ての無分別は、文珠のまゝにもならぬ事ぞかし。智惠の箱と名付て見せさせ給ふは、諸商人其家々の帳箱なり。年中請拂(六)ひをゆだんなく心に掛よとの見せしめなり。萬の事に付て帳面そこ〳〵にして、算用こまかにせぬ人、身を過るといふ事ひとりもなし。かならずじだらくもののくせに、人間百年の榮花なし。わづかにしれたる(七)此世界、子孫の事まで案じ置するは是愚痴なる人心なり。其身に仕合そなはれば十分成世を渡るなり。たとへ(八)親より財寶請取ても貧者となれる事、當座(九)さばきにけふを暮して、かゝる不覺悟の親、相應の借錢わたすと又子の代に家普請に手のかゝらぬやうにとて、石井筒に鐵瓶釣、あるひは軒口に銅樋諸道具も、一度(一〇)の大願に末代物にして封付の銀箱わたす、此ふたりの親

(一)切戸――丹後宮津附近にあつて天橋立の南。
(二)文珠――原本「文殊」。文殊は智慧を司る菩薩。
(三)金童子――善財童子の俗稱。
(四)脇立――本尊の脇に立つ佛。
(五)開帳――厨子の戸帳を開いて中の佛像を衆人に親しく拜せしむること。
(六)請拂――金錢の收支。
(七)わづかにしれたる此世界――僅か五六十年と分つてゐる此の世。
(八)たとへ親より云々――「たとへ親から財産を讓られても貧乏となるのは、行當りばったりの家計で暮すからで、かゝるだらしない親は、その子に相應の借錢しか渡せない。」
(九)當座さばき――行當り主義の遣繰り。
(一〇)一度の大願に末代物云々――こゝは一費用の多くかゝる事を關はず、石井筒、鐵瓶など、銅樋など、の末代物(永久品)を作り、且封印付の銀箱を子に讓る。」

（一）多賀――近江國犬上郡多賀村にあり、祭神は諾冊二神。或は犬上縣主の祖神と云ふ。壽命の神として信仰せらる。
（二）椙燒――（前出）杉板の上に魚肉をのせて燒いたもの。
（三）ぶん――身分。
（四）つかみ取り――大儲。一攫千金の利得。
（五）買置――物資を購し蓄へておく。
（六）寺同行――お詣りの仲間。
（七）千枚――銀千枚。
（八）あやかり物――羨望すべきもの。
（九）鰤のはしり――鰤は正月のもの。「はしり」はその季節に先んじて出る物。
（一〇）どこで年のより所なし――どこで年寄る所があらうか、それはない。
（一一）見ましけるに――見優つてゐたが。
（一二）内證せはしき世――經濟逼迫の家庭、「世」はこの家の渡世狀態を指す。
（一三）白うを――白魚、季節陰暦正月。

心各別違ぞかし。其比泉州の堺より、分限にて樂隱居せし年寄友達二人、天のはし立の松見物にくだりし次手に、此もんじゆ堂にまいり、かいちやうの事分別して、其智惠の箱百もんにて見る事、さしあたつて百文入るなり、是を出さぬ所が第一の智惠とて、是を拜まずに歸りぬ。惣じて始末より身體よろしく成ける親仁ども、すこしの事もぬけめはなかりし。此人の子ども江州の多賀大明神へ長命いのるためとてまいりけるを。此親ども參詣する事、無用と色々異見申せし。神を賴むまでもなし、人の命をながう望みならば、婬酒の二つをひかへ、椙燒のある世の中に鰒汁をやめて、ぶんに過たる人づきあいせず、世間並に夜をふかさず、人よりはやく朝起して、其家の商賣をゆだんなく、たとへつかみ取りありとも、家業の外の買置物をする事なかれ、只朝夕のもてあそびには十露盤置て見て、節季〳〵請拂ひ大事にすべし。人の物を借込さいそく請る程、人間壽命の毒はなし。其證據には我等寺同行の人、十六十四に成娘二人もたれしが、世盛のこしらへ何にひとつふそくもなく、美をつくしたる衣裝、敷銀千枚づつ付て婿は願ひのまゝの所へ仕付けられしに、姉むこ次第に家榮へければ、世につれて委も若やぎ、三十にあまる年も娌入時のすがたの今に殘りて人皆女仙と名付、是はあやかり物といへり。此女不老丸も呑ず人魚も喰ねど、

（一四）飯鮹――形小く、體長長五六寸。頭の内部の肉白く、煮れば蒸飯の如し。故に飯鮹と云ふ。季節は春。
（一五）三月のすゑに――季節外れの遲くなつての意。
（一六）そふからは――添ふからは、夫婦となつた以上は。
（一七）落め――落目、下り坂（經濟上）。
（一八）人づかひのきのどくさに――人遣ひの大げさなのをいやに思つて。
（一九）作病――假病。
（二〇）すぼり――狹い。
（二一）女房いゑぬし――主婦。
（二二）身體――身代、財產。
（二三）娑は作りもの――女の容姿は作りやう次第だ。
（二四）此姉より妹の――原文は、「かうあるが、此妹より姉の」でないと意味が通じない。
（二五）世をかせぐ――家業にせいを出す。
（二六）いのる事あらず――祈る事は要らない。

鰤のはしりを十月比より喰、正月の事ども霜月中に仕まはせ、當年も又五拾貫目はのびたる白銀の花を見て、目出たき事ばかり耳に聞し、嬉しき事を目にみて暮せば、どこで年のより所なし。又妹は三十にもたらずして、姉には年の七つもふけて、衰れむかしの形はなかり、風俗心ざしともに姉よりは見ましけるに、内證せはしき世につれて、おのづから物毎いやしげになりぬ。白うを飯鮹もやう〳〵三月のすゑにくふ事になり、年々たらぬ世帶に氣をつかし。男の心ざしもむかしに替り、かりそめの事も無理なる腹を立るを、そふからはかゝる落めの時こそ人の大事なれと、さま〴〵に機嫌を取、すゑ〳〵の女の手業の絹張までも手づだひ、物見花見に出るにも駕籠といふ人づかひのきのどくさに、何の心もなきに作病を發し、おのづから一門の付合にもかた身すぼりて、物いふ事も人よりあとに付て、ふだんの身だしなみも自然とそこ〳〵にして、いつとなく小袖のうちかけをやめ、帶もほそきをして、心から年をよらす事のかなし。惣じての女房いゑぬし身體の仕合にひかれて、娑は作りものといへり。此姉より妹のわかうなるといふも、命を長う持も、皆是其家はんじやうの心のいさみよりなれば、只世をかせぐ事をもつはらして、まはり遠い神佛をいのる事あらずと、年ふるき人のしらせける。いづれの醫者の手にさへ叶はざる人間か

（一）心ざしければ――心ざせば。
（二）日にみへての貧乏神――早速貧乏神にとりつかれる。
（三）すかさぬ人――ぬけめのない人。
（四）人あしらひ――應待。こゝは特に人の機嫌をとるやうな態度を云ふ。
（五）知行寺――寺領を持つてゐる寺。この上に「然しながら」と補つて見る。
（六）しらばけ――じやうだん。ざつくばらんの冗談口。
（七）氣のさへたる――氣の輕い、さつぱりした。
（八）十念――淨土宗で六字の名號を信者に授けて佛に結緣せしめること、もとは阿彌陀佛の名を十回唱へること。
（九）窺く――原本「眈く」。
（一〇）道心――道心者。
（一一）鹽町――長堀川筋の東方の北側。

ぎりある一命を、何れの神に賴みかけたればとて、それは〳〵一日もいきのぶにはあるまじ。人は四十より内にて世をかせぎ、五十から樂しみ、世を隙になすほど壽命くすりは外になし。何程にお多賀大明神を祈り、はる〳〵の江州に歩行をはこべばとて、此次手の道寄に京の島原へ心ざしければ、目にみへての貧乏神なり。命も身體も宿に居ながら祈れと、万事にひとつもすかさぬ人のいへり。近年世間に後生を願ふ貌つきすれど、まことの信心まれなり。皆名利にかゝはり、旦那寺の塀瓦の寄進にも定紋を付、法の道を作れる石橋に名を切付、兎角願主の世にしるゝを第一にいたせり。本心の後世のためならば、貧僧に齋米をほどこし、奉加帳に町所をあらはさずとも心ざしすべし。今時の人心、ひとつも佛の道に叶ふ事にはあらず。諸々の手法師、世わたりの人あしらひ、在家に替る事なし。知行寺の外は、かく旦那の機嫌とらるゝ事、出家に似合ざるとも申難し。外に身過の種なし。酒宴の中程に立て踊、精進腹では酒が呑ぬとしらばけのかる口、さりとは氣のさへたる長老と、是は世の人好り。不斷珠數をつまぐりて參詣のともがらに、十念の外は無言にして殊勝千万なる御坊のかたへはいかな〳〵窺者もなかりし。殊更此程の道心のむすびし新庵、氣を付て見るに皆おかし。東高津に毎日薄おしろいをする出家あり、鹽町に常住ひりん

（一二）内衣（ユゲ）――湯具、腰卷。
（一三）しのびかへし――堀の上に木竹又釘など逆に斜に立て列べて、人の入るを防ぐもの。
（一四）鉢坊主――托鉢坊主。
（一五）とせい――渡世。
（一六）藤の棚――谷町にある。獨子の溺死した紀念に植ゑた池畔の藤が繁つたものと云ふ。（蘆分船）
（一七）きよらをつくし――綺羅をつくし、極美の狀態。
（一八）世間のかしこき――世渡りが上手。
（一九）中宿――奉公人宿。
（二〇）飛鳥川流れて――「昨日といひ今日と暮して飛鳥川流れてはやき月日なりけり」（古今集卷六、春道列樹）
（二一）半櫃――長持の小さいもの、衣類などを入れる。
（二二）出替――僕婢の交代する日をいふ。
（二三）奉公人宿――雇人の受宿。
（二四）無心なる――情義のない。
（二五）取あはす――偶然に取りあてる。

ずの内衣（一二）して居る尼有、長町に魚釣針して賣坊主あり、道頓堀にしのびかへし（一三）うつたる草庵あり、玉造りに年中仲人をして身過する法師有り、天王寺に鉢坊（一四）主に衣の日借をとせいにする出家あり、又藤の棚（一六）近くに十日切の借銀して明暮（一五）十露盤に心をつくす坊主も有。あたまを剃墨衣着て形は出家になれども、中々内心は皆鬼にころもなり。鉦たゝきて念佛申て、そればかりにてすむ世の中にはあらず。今寺々の次第にきよらをつくし（一七）、ひかりかゞやき、はんじやうする事、佛のまねき給ふ人寄にはあらず、住持世間（一八）のかしこきゆへぞかし。

二　一日暮しの中宿（一九）

飛鳥川流れてはやき月日の立事夢ぞかし。此春寢道具入て半櫃（二一）を持せ行しが、程なく九月五日になりて、出替（二二）りせし男女の奉公人宿（二三）こそさま〳〵（二四）におかしけれ。むかしいかなるかしこき人の半季とは定め置けるぞ。親かたの氣に入ざるも、半年の事とおもへば大かたの事は堪忍して、うつくしう出替りまでつかふて暇出さるゝは、其家の内義の利發なり。又無心（二五）なる主を取あはす（二六）とも、半季の事なれば、一日暮しにしてお定まりの五日の朝飯くふてから、手まはしはやく身拵へして、機嫌よく笑ひを作り、何かたにをりましよとも、今までの

（一）網の手の鉢――網模様ある鉢。
（二）廣敷――臺所の上り口についた板の間。
（三）梅花の油――女の髪油一香すいしく艶にやさしき故に梅花と名づけ給ふとかや、或御所方の名方なり」（女用訓蒙圖彙）
（四）おむつかしながら――御面倒ながら。
（五）替りに――わが替りに。
（六）女郎衆――女、下女。
（七）述懐心――名殘惜しい漆子。
（八）俗生――素性。
（九）追出すまでも何の仔細なく――暇出す位は何でもない事であるが。
（一〇）一門衆云々――「一門衆から」以下「惜しい人を出す」までは主人が下女に云ふ詞。
（一一）年切――年季奉公の女。
（一二）心をしつて云々――氣心を十分知つた惜しい人即ちお前に、まだ居て貰ひたければ出すとの意。
（一三）御勝手づく云々――「御都合のよいやうに」で下女の詞。
（一四）立鳥あとを濁さず――

通りにおぼしめしてくださりませい、お乳母どの今朝の松茸の燒ましたが、（一）網の手の鉢に入れまして膳棚の中のだんに置ました。見へませなんだかたしのまなばしも、（二）廣敷の疊の間よりたづね出しまして、庖丁箱に入て置ました。（三）梅花の油やがまいりましたらば、此三十貳文（四）おむつかしながら濟してくださりませい。又曝かゝがいつぞやあつらへましたもめんぎれ、さらしてまいりましたらば、請取つて置てくださりませい、どうでも四五日のうちにはお見まいを申あげましよ。皆お若い衆今迄の通りに、道であいましたとも見ぬ貌してくだされますな。久三此あたりで雨にあふたらば、傘借てたも。（五）替りに風のよい女郎衆（六）を置て見せ給へと。すこし（七）述懐心をふくみて出て行ける。兎角（八）俗生いやしきものなれば、追出すまでも何の仔細なく、（一〇）一門衆から年切（一一）置けとあれば、いやなれどもまゝにならぬ事なれば、心（一二）をしつて惜しい人を出すといへば、下女も氣にいらぬ心を合點して、御勝手（一三）づくになされましたがよう御座りますと、（一四）立鳥あとを濁さず、壺洗ふて水まで汲入て歸る。又内義はしたなく、氣に入ざるすこしの所を見かねて、母親むすめを相手にして、此夏季（一五）は飯燒が流れ（一六）ありき、（一七）まへだれかづきの雨に泪こぼすを見るやうな、（一八）播磨路の世（一九）の中が惡うてつかひ盛（二〇）這出が、口（二一）の世で置いてくだされませいと詫言（二二）いふべし。布織て碓ふんで子

誘。後から非難のないやうに始末し去ること。
（一五）「此夏季は」から「いたづら女になるぞ」までは内儀が母と娘とを相手に下女へのあてこすりの詞。
（一六）流れありき――流れ歩きは人澤山のこと。
（一七）まへだれかづきの雨――「前垂かぶり」に同じく、出替りの頃に降る雨を云ふ。傘なきために出替の男女が前垂を被つて行く故である。新撰併諧辭典
（一八）播磨路――大阪へ出る下女の產地。
（一九）世の中が惡うて――不景氣で。
（二〇）這出――田舍のぼつと出。
（二一）口の世で――食はして貰ふだけでよろしい（給金は要らぬ）。
（二二）詫言――泣言、嘆願すること。
（二三）すりがらし――すれつからし。
（二四）右の手にしやくし――下女として劫を經たもの。
（二五）ひとつもある着物――一張羅の衣服。
（二六）夜るうたを云々――

守して、木を割て是程置德成ものはなし。大坂中の水呑ふでまはりしすりがら（二三）しの、右（二四）の手にしやくしの柄の跡の付たる女。置人なうてひとつ（二五）もある着物を賣喰にしをつて、後には夜（二六）るうたをうたふてありくいたづら女に成ぞと、にくげに當言（二七）をいへば、下女も又聞ては居ずして、灰猫が耳を火箸でせゝり、我も耳（二八）の役にいやながら聞よ。飯喰して年中あそばしておかしやるも鼠とらするためぞ、鰹節の盗み喰さへせねば世界に何のこはい事はないぞ、爰の釜の下ばかりが我が寢所にはかぎらぬぞ、お氣に入らいでなげ（二九）うちしられたらば、北濱か中の島か大かま（三〇）へ成内かたへかけ（三一）込、毎日お客があつて鴈の胴辛（三二）鯉のわた（三三）捨所のないお家があるぞ。我が生れ付て仕着はきず、口（三四）ばかりにて御奉公申に、肴とては八十入（三五）の千鰺燒匂ひより外に聞ず。たがい（三六）ひつぎて爰へは來ぞ、よい内かたの万軒もあるに、我が仕合がわるいと當言いひかへし。其後は日毎にすれ

賣笑婦。
（二七）當言――皮肉な面當の詞。
（二八）耳の役に――耳のあるからは、いやであらうが。
（二九）なげうち――投げ・打ち。
（三〇）大かま成――大構なる。大世帶の家。
（三一）かけ込――「かけ込め」の意にとりたい。
（三二）胴辛――胴殼。胴の骨のあるところ。
（三三）わた――はらわた。
（三四）口ばかり――食べるだけ、仕着の衣服は一度も貰はないのである。
（三五）八十入――一籠八十入で、安物。
（三六）いひつぎ――周旋、世話。

あひ、内義は腹立して、(一)主と病ひにはかたれまい程に、(二)ふしやうながら宵から眠らずとも大釜も磨いて置たり千葉もこまかに切て置たり、(三)下子仕事なりよい物じや、蚊屋の破れもつぎ當て置きやといへば、一日も是に居ますうちは、(四)鼻に手を當て見てつかはしやりませい、はたらきさへいたせばお氣に入事ぞと、(五)出尻あらしたる跡にて見れば大鍋にひゞきを入、十枚の挽盆を一枚もそのまゝ置ず、酢徳利は口折て重箱はふちはなちて、日傘は縁の下になげ入、雪踏は湯殿のやねに捨置。此外目に見えぬ事に、大分親かたへそんをかける。下々はいやしき物に定めて、上手につかひなすが奥がたの利發なり。(六)世のつまりたるためしには、當年の春の出替り程、奉公人のあまりたる事なし。(七)一番女房の(八)大所の勝手にあふ者、きう銀四十五匁から五十目に極めて置しに、ことしは四十目をかしらにして次第にさがりて、中の上卅匁又は廿七八匁廿五匁までにして、それよりは二十二三匁十八匁、すこし小作りなる女は機まで織て、十五匁から(九)錢一貫、(一〇)近江縞の帷子ひとつで濟ける。半としの紅白粉あるひは草履錢、こつちから(一一)賃かきて奉公いたすになりぬ。(一二)小宿に居れば一日に一升は降ても照ても口に付てまはり、日數ふる程、後には布子はがれ、(一三)有付ば前銀にて万事を算用しられ、拾匁で壹匁の口錢をとられ着のまゝで出て行けるが、一人も裸で

(一)「主と病ひに」から、「當て置きや」まで内儀の詞。
(二)ふしやうながら――不詳ながら。氣が向かぬであらうが、怠へての意。
(三)下子（ゲス）仕事なりよい物じや――賤しい仕事であつても仕事をすることは好いものだの意。
(四)鼻に手を當て――酷使すると云ふ意。
(五)出尻あらしたる――出替り問際に於けるぞんざいな態度。
(六)世のつまりたる――世間が不景氣。
(七)一番女房――がつちりした大女。
(八)大所の勝手――大家の臺所。
(九)錢一貫――金四分の一兩だから銀十五匁に相當する筈であるが、元祿初頭には十三匁十二匁の相場であつた。
(一〇)近江縞――近江産の縞織。
(一一)賃かきて――錢を費して、自腹きつて。
(一二)小宿――ちよつとした宿（こゝは子宿、即ち寄子屋）。奉公人の受宿ではないが、事實は「中宿」と同じもの。
(一三)口に付てまはり――宿料として入用。米一石の値は四十匁（寛享元年―元祿三年）。四十一匁から六十匁まで（元祿四―六年）と云ふ（大阪市史に據る）。
(一四)有付――就職。
(一五)置綿――綿帽子。乳母やりてなどかぶる。
(一六)居つゞけの奉公――引繼き奉公する家があるにも拘らず。
(一七)小宿ばいり――奉公人宿に出入する。こゝは密會場にもなる。
(一八)中ひく成貌――杓子面。
(一九)やうきひの匂ひ粉――楊貴妃白粉。おしろひは鉛をむして水飛するなり。楊貴妃病みて色青黑くなりしに仙人來りて教へしとかや」（人倫訓蒙圖彙）
(二〇)寒紅――紅花を絞つた汁に梅酢を加へて作る鹽月に製するのがよいので寒紅と云ふ。
(二一)腰居てのぬき足――氣どつた歩きぶり、「居えて」は「据ゑて」。
(二二)ままよさて――まア

奉公せしものもなし。たとへ主取なくて牢人すれども侍の大小と同じ、時花染の袷ひとつ、大幅の絹帶一筋、もめん足袋に、(一五)置綿さし櫛は、三日喰いでころりと死ども身をはなたず、是程せつなくて、(一六)居つゞけの奉公あるにも(一七)小宿ばいりする益をたづねけるに、さりとては何の事もなし。さのみいたづらぐるひを、我まゝにするといふ樂みばかりにはあらず、よき風成美女の當世仕出しを、常に浦山敷、髪かしらの目立程に、(一八)中ひく成貌を無理に鼻つまみあげて、一度の大願にやうきひの匂ひ粉を(一九)ぬりくり、(二〇)寒紅も此時の用に立、(二一)腰居てのぬき足、いかに公義の大道なればとて、我物にして身をひねる事、よほど人の目も恥しき儀なれども、(二二)ままよさて。さる程に寺の下男諸職人の弟子、又はひとり過の(二三)棒手振、あるひは田舍船のかこども、風俗國に變れば、尻に窓の明程見送りける。是をうき世の慰みと覺て、(二四)よもや惡敷ものを人のあのごとく見るはずはなき事ぞと、日々に町ありきしてげり。されども誰(二五)中宿に付込、あれをと戀わたる人もなくて、後には我と我身に不思義立て、世には目くら多し。おそらく我等が身振、けふの彼岸參りの中、三人ともさがらぬと思ひしに、どこか惡うて

(一五)置綿――綿帽子。
(一六)居つゞけの奉公――引繼き奉公する家。
(一七)小宿ばいり――奉公人宿に出入する。こゝは密會場にもなる。
(一八)中ひく成貌――杓子面。
(一九)やうきひの匂ひ粉――楊貴妃白粉。おしろひは鉛をむして水飛するなり。楊貴妃病みて色青黑くなりしに仙人來りて教へしとかや」（人倫訓蒙圖彙）
(二〇)寒紅――紅花を絞つた汁に梅酢を加へて作る鹽月に製するのがよいので寒紅と云ふ。
(二一)腰居てのぬき足――氣どつた歩きぶり、「居えて」は「据ゑて」。
(二二)ままよさて――まアそれも仕方がないが、それでもさ！。
(二三)棒手振――屑屋。
(二四)惡敷ものを――委惡しきものの意。
(二五)中宿――奉公人の下宿。宿元のやうに滯在してゐる家。「付込」は後をつけて來る。

思ひつかぬぞと、鏡横に見たり取直したり笑ふて見たり、ひとり狂言せしうちに、よく〳〵みれば我足ながら、男足袋さへちいさき事にあいそつきて、若二つ三つの時、御祓串[一]を蹈けん仁王のお札や踏けん、物に三寸[二]の見直しとはいへど、たいていに四寸程幅の廣さ足なれば、人の興も覺ぬべし。女はひとつ思ひ[三]所ありてもかなしやさびしやと、ある夕暮に[四]ことのかけたる男に、ふりのよごれたる袖にもたれて、洗ひたがる[五]人のあらうに此まゝにめすはわるいお物好といへば、心のつきたる女がほしやといふ。御堪忍[六]がならばやりたいといふ。是を種[七]として今宵はお隙かといへば、此男しばし分別して、酒買て振舞て、かたひねつてくださるゝならばといふ。口惜ながら是非なく思ひそめましたが因果、お望み次第といへば、此男立歸りて、はじめからいはぬには聞えぬ。もしもの事があらば取あげばゝのさは[九]いは、そちからなさるゝかと小語ける。いづれ此女もよく〳〵むすぶの神の見限り給ふとしれたり。すこししぶ[一〇]りかわのとれたる女には、宿拂ひ請合やら、又小遣銀持てきてやるやら、抓取の世中に、扨も違ひの有事ぞかし。算用して合點のゆかぬ女、半季五拾目に給銀極めてつれ來る風俗を見るに、成程京羽二重の白むく肌に着て、木ぐん[一一]ないのごばん縞に、大森の幅の紅うらを付て、帶はむかしからちや[一二]の繻子の一幅物、氣を付て

（一）御祓串――御祓の祭事の玉串。
（二）三寸の見直し――よく見ると缺點があるものの譬（大工の詞で、「物の長さも見直せば三寸の差がある」と云ふ。）
（三）思ひ所――氣にかゝる所。
（四）ことのかけたる――事の缺けたる。不自由な、即ち獨身。
（五）心のつきたる女――親切な面倒を見てくれる女。
（六）御勘忍ならばやりたい――私でよいなら（この程度で承諾なら）世話してあげたい。
（七）種――口實。
（八）もしもの事――姙娠。
（九）さはい――差配、處置。即ち人費の始末を指す。
（一〇）しぶりかわ――澁皮。澁皮のとれた（むけた）女とは小綺麗な女。
（一一）ぐんない――甲斐の郡内から出る絹、京都できのを京郡内。
（一二）大森――未考。「紅染屋、新町丸太町上ル町、大森屋長左衛門（京羽二重織留）とあるが、こゝの紅絹か。
（一三）むかしからちや云々――唐物の茶色繻子。一幅は一尺二寸幅である。
（一四）飛さや――飛模樣の紗綾。
（一五）虹染――虹のやうに色々染の模樣。
（一六）出立――扮裝。
（一七）今の女房――奉公人宿の女房。
（一八）おりましよは――居ります事になればの意。
（一九）月に六日云々――六齋日には夜隙を貰つて外出する。「八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日を六齋日といふ。
（二〇）庚申參り――庚申堂などに參詣する。
（二一）宵やくし――宵藥師。毎月八日・十二日を緣日とする
（二二）天神――二十五日の緣日。
（二三）朝貌の茶の湯云々――「茶話指月集」に利休の庭の朝顏が見事なことを聞いて秀吉が朝の茶の湯に訪れたら庭には一枝もなかつたが、一輪の朝顏座敷へ入ると床に一輪の朝顏活てあつたので、一同がそのエ向に感心したと云ふ話が見える。
（二四）畫のにしき――「見る人もなき夜の錦」（諺）の

見るに、飛[一四]さやの内衣をすそ長に、べつかうの惣すかしのさし櫛、虹染[一五]の抱へ帶、其外小道具はさし置、ちつと中づもりに銀貳百七十ばかりが物の出立[一六]、五十目の内からあれは何として[一七]いたす事ぞと、物がたい手代の親仁がうたがひける。今の女房が申すは、御緣が御ざつて[一八]おりましよは、月に六日[一九]の夜るのお隙は定まりて、外に二日づつ晝お隙くだされ、其上六度の庚申[二〇]參り、八日十二日宵やくし[二一]天神[二二]へは願が御ざりましして月まいりいたします。くれかたから初夜までのお暇と言[二三]。此神佛參りの信心からあのごとく成衣裝が出來ますといへば、親仁何とか合點して、南無阿彌〳〵ととなへて、此女をはるかに拜まれける。

三　具足甲も質種

都につゞく伏見の里、通り筋の外今の淋しさ。殊更秋は物あはれに、垣根に咲たる朝貌[二三]の茶の湯の沙汰も絶て、手釣瓶の繩をたぐり捨てかけたり。萩は見る人もなき畫[二四]のにしき、玉芙蓉[二五]の枝枝に泣子の襁褓など干ける。むかしの春は日暮[二七]しの御門と眺めし所も、間引菜の畠と成、兩替町といひし所も今は錢が百

（二六）むかしの春――洛山時代。
（二七）日暮しの御門――伏見の越前侯の門と云ふ。「永代藏卷三ノ三」（世は拔取の觀音の眼」の章參照）
轉用。
（二五）玉芙蓉――淮木の花弁。

（一）大佛――京の七條、方廣寺の大佛。
（二）城跡――伏見城趾。
（三）草のたね――渡世のたよりを云ふ。草は蟲の緣語。
（四）大川――淀川。
（五）舟着――伏見の京橋、三十石船の發着場。
（六）手ぐらまぐら――前後の思慮なく、あやふやに。
（七）前置――立花の時の前置で、法式の一。前置には花葉の密なものがよく疎らなものが惡い。こゝは鳶尾草は前置に使用しない事を條件に借金したのであらう（露の條參照）
（八）花の本――連歌の宗匠の家號。
（九）露――連歌師櫻井永仙（名元佐）が窮迫して、ある人に露と云ふ字を質にして百貫文借り、其の後露を詠まなかつた。これも元佐の露の質として世人が賞した。（續草、百二十）これと同樣の話を材料としたのであらう。
（一〇）都の人心云々――都の人はさすがに大樣で保證人もなく期限も定めずに金を貸す。
（一一）切――期限。

ありそふなる家もなく、三文が油壹文づつが鹽賣、あかいわしさへ年越に見るばかり、京へ一里の道なれば、女の足にても夕飯過より行歸る所を、貧にからまれ大かたの妻子は、大佛の貌を見ぬ人ばかりなり。東に城跡の山ふかく、初茸狩せし人も皆遊興にはあらず、二條の八百屋よりたづねさせける。よろづの虫を取て賣など身過は草のたねぞかし。此數千軒何をかして世をわたるとも見えざりしに、朝夕の煙立けるは、せめても大川の舟着にて、艙から艙へ身體の楫を取て、手ぐらまぐらと年浪をわたりける。貧家によらず、人の内證さしつまりたる時は質種也。昔日立花の家より鳶尾の前置を金子百兩の質に入られける。又連歌の花の本より、露といふ一字を黃金貳十枚に置れける。まことに都の人心、請人なしに其一人の手形にて、切も定めず借ける。兎角質にあるうちは花さしに鳶尾をつかはせず。連歌師に露といふ事をいたさせねば、此約束を迷惑して請られけるとなり。又貧ぼう公家あつて質物にことをかゝれ、柿本人麿より此かたは我なりと自慢せられし髭を、銀壹貫目に置れけるに、是は半年づつのけいやく、切が延ると剃刀持ちて請取に來ば、これも才覺して元利算用仕立、請られけるとなり。又撞木町の遊女手づまりし時、誓紙を質に置こそおかしけれ。是は銀借者が分別して、客の手前よりもらひ銀のたまるうち、利を

（一二）柿本人麿――畫像はどれも口髭よりあごひげが長く、こゝは鬚か、髯かの意。
（一三）撞木町――山城伏見の遊女町。
（一四）誓紙――起請文。
（一五）身のうへすぐる――身の上、過ぐる。即ち身過ぎ。
（一六）その方さま――金かした男。
（一七）五分取――下級の遊女。
（一八）天神、十五女郎――（前出）天神は太夫に次ぐ第二位。十五女郎（かこひ）は第三位の遊女。
（一九）かよふ髮――「通ふ神」の洒落。これは文の封じ目にしるす文句。髮は油賣の油にかゝる。
（二〇）身のすたる――面目を失ふ。
（二一）かさの代――笠の臺即ち上に圓座をのせたのか。或は一笠の代りに」の意か。
（二二）圓座――藁蒻などで圓く渦のやうに編んだもの「わらうだ」とも云ふ。
（二三）札書事のむつかしや――賃受の札書くのが面倒だ。
（二四）斷り――事情。

高ふして取替ける。此誓紙戀にはあらず、女郎の身のうへすぐる所をその方さまに見付けられ、然も内證にて年々御合力うけ申候その御恩に、世間の目をしのび念比いたし候。此心ざしかはり申においては、諸神の御ばちにて五分取の女郎におろされ申べしと、ひとつも根のない事を書せ、血判までおさせて、天神から十五女郎まで金子貳歩づつ借ける。是は此里へかよふ髮の油賣が思案して人のしらぬ德を取ける。濟さぬ時は其女郎と我等間夫をいたすと、くだんの誓紙人に見せられては身のすたる事を合點して、約束のごとく埒を明れば、ひとりにもそんをしたる事なし。質屋程世のうき目見る物はなし、氣のよはき人の中々成まじき家業なり。ことに此所は、けふを暮して明日を定めぬ哀れ、さま〳〵の人の多し。何國も質屋は晝際にして夜の取やりぞかし。ある夕暮に時雨して風横ふきにさむかりしに、四十あまりの男かさの代に圓座を被き、身にひとつ着たる古布子をぬぎて、やう〳〵壹匁七分借て。其錢細き帶に持添、丸はだかに成、下帶ばかりにて歸る。又七十あまりの祖母、つえにすがり庭にじりこみ、ふところより東山時代の蚊屋のつり手二筋さし出しける。是にも札書事のむつかしやといひざま、錢十六文かしければ、せめて二十と手合して斷

（一）ならぬ事と合點せねば｜それは出來ない事だと質屋が承知しないので。
（二）わぢ〳〵｜わな〳〵。
（三）たゝき牛房｜牛蒡を叩いて煮て味付けたもの、山城八幡の產が美味といふ。
（四）いひ立して｜理由にして、口實にして。
（五）むかしおどし｜昔誠と昔の功名で威嚇すると兩様にかゝる。
（六）四方髮｜總髮。
（七）請人｜保證人。
（八）むつかしや｜面倒な。
（九）七色｜七種。一種を質札一枚づつにしておくと金目が少いから請出しよい。
（一〇）面道具｜自分をあらはすための裝ひ。

りいへど、（一）ならぬ事と合點せねば、是非も御座らぬとその錢持ながら、わぢ〳〵（二）と身ぶるひしてそこへこけたが最後也。貧者の質とるから、こんな事やなどふびんともおもはず。又船のくだる時（三）たゝき牛房賣に出ける男、關がはら陣いひ（四）立して、むかしおどし（五）の具足甲を置にきたれば。亭主中々同心せず、其方に似あはぬ物なり、取事ならぬといふ。是は人にたのまれましてといへど、その吟味までもなし、相應の物を持ておじやれといふ。時に門の戸明て四方髮（六）の男、にが〳〵しき貌さし出して、是亭主それは身どもが物じやが、いかにしても侍の手から具足は質に置れぬ。慥に請人（七）取からは、たとへば女が置に來るとも埒あけたがよい。殊に其甲は大江山にて、正八幡宮の賴光にくだされたる物、世の寶なりといふ。それならばなをむつかしや（八）、寺へ靈寶によき借物といふ。扨も口惜や、質種にはもめん布子にはおとりけると悔みて持て歸りける。此浪人の町屋住居の身の取まはしに愚か成に付て物詰せしは、惣じて世に落ぶれし人の、質を置事無分別なり。百目かりて此百目に元利そろへて請返す銀の出所なし、兎角當座に賣拂ふものなり。我等も質置事五十度にあまれり、是を一色請たる事なし。其後分別して七色（九）を札七枚にいたし置ければ、自然また請出す事も有。夜着蚊屋の夏冬置かへのせはしさ。定まつて五節句に入、はかまかたぎぬ

（一一）片食｜一食（朝・晝・夕のうち）
（一二）町役｜町内づきあひとしての義理。
（一三）野おくり｜葬式。
（一四）こよる｜小夜。「夜」は夜着のこと。
（一五）ざゝんざ｜一種松の音はざゝんざ・室町頃の歌ひ物、即ち婚姻の祝宴を指す。慶長頃に流行したと云ふ「竹齋」などに見える俗謠「ざゝんざ」ではなからう。
（一六）かたり云々｜詐欺結婚をいふ。
（一七）淺間敷く｜かはいさうに。（弱者であるので）
（一八）著より｜著侈がもとで此の貧乏になつたのである。
（一九）取葺屋ね｜取葺にした屋根。取葺は、そぎ板を並べて石又は丸太などを押へにしたもの。
（二〇）京格子｜荒い格子。
（二一）賣て置ける｜賣つてしまつた。
（二二）女家主｜主婦。

を置て、度々に請る事のやるせなし。いかに小家の日おくればとて、男とあるべき者は、時々の着物に相應の羽織、あさの上下、脇指一腰は、町人の面道具（一〇）なれば、たとへ片食（一一）は喰すとも身をはなつ事なし。いやといはれぬ祝言振舞、町役（一二）の野おくり（一三）には出ぬ事成難し。內證の事は女の取まはしにて、連添男の世間むきをよくすること本意なれ。此所の問屋町より、當世こしらへの衣裝、（一四）こより小ぶとん手道具まで、此程の娌入荷物を質に置、銀七貫目借て行樣子をきけば、すいりやうにたがはず宇治より緣組して、ざゝんざ（一五）うたひしはいまだ廿日も立ぬに、其女の衣類かりて、はや質屋の藏へ入る事、世の中のかたり（一六）にて女房もちけるぞかし。女は淺間敷（一七）、一生をたのむ男次第に成けるものなればなり。おもへば恥かしき身體、人皆奢（一八）より此仕合なりける。此質屋も分限に成て身のむかしをわすれ、いつとなく絹紬を不斷着にして、取葺（一九）屋ねの軒のひくきを作事して、瓦ぶきに白壁京格子（二〇）を付ければ、あれたる伏見には又もなく目に立て、貧者おのづからに恥て質置に來人もなく、次第に資をへらし、後は油屋米屋に商賣替て、つひに此家賣（二一）て置ける。此身過をする人は、住ふるびたる家を普請する事なかれ、女家主（二二）小袖を着事なかれ、內藏火相よく念を入、つらがまへのかしこき男猫一疋飼べし、十露盤をひとり子と思ひて是を抱て寢べし。

西鶴織留世の人心

目録　六

㊀　官女の移り氣
　世につれての姿見の鏡
　若菜そろへるは男おもひ
㊁　時花笠の被物
　世のかしこきときよい事ばかりはさせず
　心のつかぬ所旦那殿の無分別
㊂　子をおもふ親仁
　世の人は笑ふとも竹箒鑓
　乳母いよ〳〵我まゝ云次第
㊃　千貫目の時心得た
　世はみなあはぬ算用して見よ
　銀は家質で借べき事

西鶴織留世の人心

一　官女のうつり氣

世にある物のならひとて、闇がりの鼠、晝盗人絶ず。兼て用心せよと世間氣のかしこき人の言しらせける。かくのごとく万事に氣づかひをせば、小家に火を燒まじや、渡海の舟に乘まじや、一切の人間運は天に有、神鳴落てつかまれけるも、死は前生よりの定まり事といへり。されども用心して身をのがるゝ事にはのがれ、長命の後病死をするは、是人の常なり。されば大名公家がたには地震神鳴の間とて番匠にたくませ、赤銅瓦の三階作り、一重〳〵に天井幕を張て、四方に賀茂の葵つらせて、鈍帳に名香を燒掛、いなびかりの影移るより、奥さま是に入らせ給へば、前後はお局女蔦たち、相つめて觀音經を讀給ふにぞ此難は幾度か子細なし、高人にしきの裃をかさねても夕の煙はのがれず、佛の御迎ひふねには乘まじきといふ事ならず。思へば時刻の息引取には何とも用心成がたし。惣じての人間、爰の大事をわすれ、身の樂みに年月を暮しぬ。殊更高家にめしつかはれし女中は、其筋目もいやしからぬ人の息女にして、若年より

（一）闇がりの鼠云々――其物につきて其物を費しそこなふもの數知らずあり。身に虱、家に鼠あり、國に賊あり云々（徒然草）
（二）兼て――嫌て。
（三）公家――高家。
（四）賀茂の葵――賀茂の祭（四月、中の酉日）のとき用ひた葵、賀茂には別雷神を祀る故に葵は神鳴のまじなひになる。
（五）鈍帳――緞帳、だんだら筋の幕。
（六）名香――降眞香。雷除けになるといふ。
（七）觀音經――「法華經卷八、觀世音菩薩普門品第二十五」を云ふ。その偈は雲雷鼓掣電、降雹澍大雨、念彼觀音力、應時得消散」とある。
（八）時刻の息引取――末期の時。知死期とて各人の末期の時刻は前世の因で決まつてゐるといふ。
（九）筋目――素性。

（一）世のせはしき――生活難。世のせはしき事をしらず。其身のためばかりに、官女の立ふるまひを見習ひ、朝夕のもてあそびとて玉琴和歌に心をなし、花の明ぼの、雪の夕、月紅葉に身をそめ、願ひは戀種の外なく、一生淫酒のふたつの中に、ひとつのすがたを色作りて。夢うつゝのごとく、何罪もなく望もなく、流れをくみて、みなもとをしれる道理。さもしき地下人にあひ見えねば、今時のせちなる事は、女のきやはんはくなどの始末心、かりにもなかりしに、さる御所にちかうめされし鶯の局と申せし人、梅咲初春の二十四日に、上より御願ひ事ありて、北野の神へ御代參申されての下向に、町筋の有さま目にめづらしく、駕籠の窓より小家がちなる西陣のほとりを通られしに、つき〳〵の男、神樂錢の外に上べき初穂をわすれて、今おもひ出し、貌付うろたへて、是にしばらくと言捨て、又神社に行ぬ。今織のはた音せし門に乘物たてゝ、軒下に休みぬ。此内に摺鉢のおときこえて、下女こどりまはしにはたらきければ、いまだ年若なる内義が、つい腰掛ながらうつくしき手して若菜をそろへ、鏡餅の名殘を雜煮して、我夫にもてなす風情、あるじは中敷居枕にして、心よげに足を延て、過にし師季はゆるりとしまふ我宿のおもひ出、公家もあたまにかづき裝束がむつかし、大名も腰にさして袴かたぎぬいやなり、町人ほど心やすき物はなし。君がため春の野に出て

（二）心をなし――心をつくす。

（三）身をそめ――身を打込む、「そめ」は紅葉の緣語。

（四）色を作りて――容色を美しくする。

（五）さもしき地下人――卑しい民衆。地下は堂上に對する語であるが、こゝはたゞ平民の意。

（六）せちなる――せち辛き。

（七）きやはん――脚絆。裾の切れないやうにはく。

（八）梅咲初春――二月。

（九）北野――天滿宮。

（一〇）西陣――北野宮の東。「一條通より北、大宮通より西をさして大やう西陣と云ふ」（京羽二重）

（一一）つき〳〵の男――お供の者。

（一二）初穂――初穗。神への供米。

（一三）今織――當時西陣から織出した金襴。

（一四）はた音――機織る音。

（一五）こどりまはしに――取まはしよく。

（一六）中敷居――中敷居、の意。中敷居は座敷と座敷との間にある敷居。

（一七）ゆるりとしまふ――ゆるりとしまひしの意。

（一八）あたまにかづき――冠。

（一九）腰にさし――帶刀。

（二〇）君がため――「君がためめ春の野に出てわか菜つむわが衣手に雪はふりつゝ」（古今集春、上、光孝天皇）

（二一）爺、ト、）のため――前の歌の替歌。

（二二）しやくし果報――食物の上の果報をうけることと美食にありつく。

（二三）屋形――館、屋敷。

（二四）なぞらへて――これに準じて。

（二五）世上の埒明かざれば――普通の世間的常識に缺けてゐるので。

（二六）さられ――離緣され。

（二七）置看板――妻が美しいので、たゞ店に置つてゐるだけ。「よぶ」は嫁に貰ふ。

（二八）商ひ口をたゝかねば――默つてゐて、賣捌きの言葉お世辭一つ云はないので。

（二九）世にはづかしき所――世間に恥ぢること。

（三〇）東川原――祇園、八阪の邊をいふ。

わか菜摘と讀給ふを、（三一）阿爺がためかゝに若菜をそろへさせ、（三二）しやくし果報の我身といふを、鶯のつぼねも聞耳立て、世の樂しみあれぞと一筋にうらやましく、（三三）屋形に歸りてもなをわすれず、病氣に云立て無理においとま申うけ、其後は我物好にて町屋へ緣組せしに、いかにしても堪忍ならぬは、米が食になる事をおかしがり、油でも火がとぼる物かと不思議を立る。是になぞらへて萬の事ひとつも世上の埒明ざれば、形のうつくしきばかりにても濟ぬ事にして、幾所かさられ戻りて、後には四條通の白粉屋の見世に、置看板ばかりによびけるが、是も商ひ口をたゝかねば、又追出されて、さまざまの恥どもかさなりて、世にはづかしき所を覺へず。東川原の機嫌とる太鼓持を男にして、はじめの程はひとり女もつかひしが、後には貧家の物淋しく、人の手よりもらふ物を、心當にせし身過なれば、（三一）違ふ事ばかりにて、年中買がかり濟す事なく、この男五節句ともに宿にていたしたる事なし。今は鶯のつぼねも音を入て、むかしの形替りて、淺黄の古袷の右の片袖紙子縫つぎたるを、霜月比の風をしのぎ、（三五）觀世こよりの

（三一）違ふ事ばかり――當がはづれるばかり。

（三二）買かかり――賒入の借財。

（三三）五節句とも云々――節句は支拂日だから、いつも出ぬけてゐるのである。

（三四）音を入て――すつかり困るさまを云ふ。音は鶯の緣語。

（三五）觀世こより――紙縒り。觀世又次郎の初りたとも、世阿彌が「桑子」の鳥朝子の懸緒にこよりを合せたとも諸說がある。

（一）ならずまげ――ぞんざいな結び髪のことらしい。「女房あたまはならずまげにして薄汚れたる木綿布子」（眞實伊勢物語）

（二）かね――鐵漿、おはぐろ。

（三）こわつきも舌ばやにうらがれ――聲付も早口で、しわがれ聲になる。

（四）しらぬ男のさらば云々――知らぬ男が色氣らしいさまをすれば、生活のために金を捲きあげる氣になりの意。「さらば」は「さはらば」の誤りかとも思はれる。

（五）女虎落――女のゆすり。

（六）さし足袋――うねざし足袋。

（七）くみ帶――眞田に織つて作つた帶。

（八）世に有時――榮えた時代。

（九）被物――買ひかふつたもの。

（一〇）中通り女――上女中のこと。

（一一）勝手のよきもの――使ひよいもの。

帶して、髪はならずまげ(一)にも結ず、廿日もゆあみせねば、其身毛虫のごとくなりて、爪きらずかね(二)つけず、こわつき(三)も舌ばやにうらがれ、かくもいやしく成物かな。是につれて心ざしもおそろしくさもしく、夜道をあるく事をいとはず、しらぬ男(四)のさらば渡世の種にねだる氣に成、借錢こひの言葉質を取、まんまと女虎落(五)と名に立、人の賃仕事にさし足袋(六)ひねり鬢、あるひは手間ぬひのたばこ入、又はくみ帶(七)、線香の上包み、何にても請取りて返すといふ事なく、賣喰にして年の八九年も世をわたりぬ。そこの女に物を賴むなといひふらせしが、都の廣さは此よこしまにても年を暮しぬ。此女のかくなりぬべきとは、氏神もしり給はぬ事ぞ。其時々の人心、世(八)に有時には定め難し。是をおもふに、かたじけなき宮づかひを捨て、よしなき民家の住ゐをうらやみしゆへなり。世界の男女ともに、其家風をわきまへたる主人の外に、かならず〳〵望む事なかれと、此鶯のつぼねの本末を、よくしれる人の語りぬ。

二　時花笠の被物(九)

中通り女(一〇)とて出合がしらにふたり一度に連て來りけるが、きう銀はいづれにても六拾目が世間の極りとて、置人も是はねぎらず、勝手(一一)のよきものを見合ける。さて中居(一二)の役は、第一に奥様のお駕籠に小袖きてお供申と、御祝儀事の御使勤めければ長口上よく申て、女中(一三)のお客の折ふしはすこしのりやうり(一四)もして、不斷はお膳の取さばき、廣敷より内のはきそうぢ、屋敷(一五)がたにてお茶(一六)の間といふに同じ。壹人は何やかやにつかふためになふてはならぬ女なり。最前の一人の女は、風儀もおもはしからず、貌つきも百人並にて然も出歯にしていやし。又壹人の女は比(一七)ようて、いづれにひとつ難のいひ所なくて、人の家にありたきお内室にも恥かしからず。是を見くらべて同じねだんにては、ふた(一八)つどりにあれよ〳〵と定めて、先二人ともに一夜づつ置て見しに、惡女は作法(一九)の役の外に、物を書事女右筆(二〇)ともいふ程なり。琴も慰みになる程は仕ります、絹紬のあげ(二一)おろしも大かたには織付ますと申て、よろづ聞程心入よく、置て德成ものなり。又壹人の美女はひだりかたの耳うとく、相手になつて歌がるた取事さへならず、角(二二)だらい見て是は何に成物と人にたづぬ程いやし。なを吟味するほど三十日に二度三度發るてんかん病におどろき、人はしれぬもの、追出しければ人置(二三)のかゝ小語は、あれがまんそくに御座れば、茶屋へやつて一年に壹貫四五百めは取ますといふ。尤世の中によい事そろへてはないはづと、大笑ひして暮ける。人は心しらぬは惡敷とて、むかしは十三子(二四)の比に、さもしからぬ形を見

（一二）中居――前條に同じこゝは商家女中である。

（一三）女中のお客――女客。

（一四）りやうり――料理。

（一五）屋敷がた――武家屋敷。

（一六）お茶の間――茶の間女。

（一七）比ようて――顔も姿も程よく整ふ。

（一八）ふたつどり――二つの中の一つを選ぶ。「あれよ〳〵は」綺麗な女の方に決めるさま。

（一九）作法――定つた仕事。

（二〇）女右筆――右筆は祐筆とも書く。秘書役。

（二一）あげおろし――機を織ること。「あげ」は機にかけること。「おろし」は織り上げること。

（二二）角だらひ――角のやうに左右に柄のある小盥。多くは漆塗である。手洗ひなどに用ふ。

（二三）人置のかゝ――口入屋の女。

（二四）十三子――うなゐ（髫髮）兒。十三歳位の女兒。

（一）よろしく仕付――良緣を求めて嫁がする。
（二）事のならぬ者――よい嫁入口のない者はの意。
（三）五年程切て――五年と年期を定めて。
（四）ひとつにあそばし――緣組させて貰つての意。
（五）身體のかたまる――身がおちつく。
（六）仕掛もの――人を欺き金を取るもの。
（七）しやれたる女――淫蕩な女、或はすれつからしの女。
（八）手またく――手全く。實直な風を云ふ。
（九）物とりの腰本――騙り者の腰元。
（一〇）奥――奥向き。夫人その人。
（一一）けがの拍子――粗忽したそれを機會に。「けが」は怪我で負傷の意があるが傷までさせるのではあるまい。
（一二）子目――子め。
（一三）内證――親元の内證。

定て、腰本につかはれけるに、近年町人のせちかしこく、廿にあまるもの置て十色もひとりして埒のあくやうにつかひなしける。是は心やすく世はわたれども、相應の所へよろしく仕付、事のならぬ者五年程切て、四度の絹仕着にて銀百目ばかり借て、すゑたのみに御奉公させて、手代などとひとつにあそばし、身體のかたまる事を願ひける。又同じ姿にて各別の仕掛ものあり。しやれたる女を、成程手またく作りて物とりの腰本、是ははじめの程人のふところ子のやうに見せて、惡事を云含め、先奥の氣に入置て、なじむと旦那へ近寄たよりに、私は髪月代もいたしますと申せば、それはことのかくる時幸ひの事とて、髭など剃とある時、けがの拍手にせなかへ寄添、剃髪を拾ふときお首筋から手をさしこめそこ爰さはりて後、云付もなきに、袖口から手を入れ、そろ〳〵とお腰をひねり、旦那に心を移させ、我も心の移りたる風情して、脇腹をいたく抓は、あまりつよふ當るとて、内から手をとらるゝ時、外へは聞えぬ程に奥さまといへば、だまれうつくしい子目と、たはぶれのはじめとて、首尾に二三度の御意にもれず、程なく青梅をも好て、只の事の腹心にはあらず、兎角内かた樣へしれませぬうちに御分別と、旦那へゆすりかけて、折々うちなやむありさを見せて、たんと氣の毒がらし、扨親もとへ此事いひつかはし、内證から旦那殿へ通

（一四）沙汰なし――表面でない、内密の。
（一五）はうばい――朋輩。
（一六）男襞本――男裝して仕へる腰元。
（一七）一生連添云々――一生連添ふよしみとして、妻の怨嗟を思ひ、世間の人の批判をも、あれこれと考へ合はして、思慮ある人は……。
（一八）道理をせめて――理義の通つた言ひ方。
（一九）いきとせ生るもの――いきとし生けるもの。
（二〇）かならずなかれ――必ずいふなかれ。
（二一）うらむる――うらむ。この上に「親は」を補ふ。
（二二）男はそれじやぞ――男はそれでよい、その元氣なところがよい。と褒める詞。
（二三）大學――書名。一卷。孔子が在上者の道を說いたもの。もと中庸と共に禮記の一篇、單行本としたのは朱子に始まる。

じ、沙汰なし（一四）の合力金を五兩七兩、あるひは身體相應に十兩もやりて、それとはなくに暇出して埒を明ける。又ひとつには此身になりまして、奥樣の手まへ（一五）はうばい衆のそしり、親が聞ましたらば迚もいけて置氣の人にあらず、世にながらへまして益なし、淵川へ身をなげますと旦那をおどし取手も有。親娘と内談にて年中ねだりて金取あり。形よろしければ、男腰本（一六）に出すべき女を、分限を聞立旦那好色成をしりて、其家へ仕着ばかりにて御奉公に出すはくせものなり。されば一生連添（一七）よしみ、妻女の心入のうらみ、世間の人のおもはく、彼是もつて心有べき人は、かりにもめしつかひの者に心かけまじき事と、物にこりたる人の、後よく合點して道理（一八）をせめて云置れし。

いきとせ（一九）生るもの子に迷はざるは一人もなし。何ほど愚に生れ付たる子息にても、惡敷といふ事かならずなかれ（二〇）。惡事かさなりて、異見の杖を振あぐるうちにも。脇から取あつかふ人のおそきをうらむる（二一）事なり。殊更七歳より内の沙汰は、たとへばひだりの手して箸を持、鐵鎚にて茶釜たゝき割とも、氣のつよき所、男はそれじやぞ（二二）、箸も後には我と右にもつ物と云流し、かりにも餘所の子のかしこき事を咄しにもいたさぬ事ぞ。人の子の五歳にて大學（二三）をよむは耳に入ず、我子の十一に成て、竹箒にて鑓持のまねするを、手の振やうがよきとて、

（一）人の事にて――第三者の立場から。
（二）其身に成て――親の身になれば。
（三）うつけたる子――薄のろい子供。
（四）そこ〳〵に育て――氣をつけないで育てる。
（五）かなしき家――富裕でない家。
（六）あれなれば――あの容姿ならば。
（七）堪忍比――十分ではないが、納得のできる程度。
（八）跡のしれる――食つた數のわかる。
（九）盛形の菜――一定の形に盛りあげる食物（刺身など）。
（一〇）しめしやう――おしめ、むつき（襁褓）の類。
（一一）何の因果に今や――「もう子持になつて」と、夫から云はれるのである。
（一二）芝居行――道頓堀の芝居見物。
（一三）天王寺詣――種々の儲し物や法會などが常に行はれた。
（一四）下子――下賤の者。下婢。
（一五）袋提させて――金袋さげさせて掛取に歩く。
（一六）いなもの――異なもの。

客の有たびいたさせける。是等は人の事にて笑へど、其身に成てはうつけたる子、する事ことに利發に見えける。すゑ〳〵の者子のをのづから我まゝに鈍成事、母の親のふところにてそこ〳〵に育てけるうちに、はや三歳の比より惡智惠付て、是八十までもなをらず。民百姓の子にても、付置てそだてさせたきものは乳母なり。諸事物入に是非なく、中分の下の身體までは置かねけるも斷り也。きう銀八拾目、四季着て、上下の帶、ふところ紙、手足の入用まで算用するに、隨分かなしき家の乳母にても、壹人一年に銀三百四十五匁程は、定まつて入物なり。是によつて女房の乳を呑せける。中ぐらいなる人の内義、十七八より緣に付、其一とせ二とせ程は櫻に藤に物見姿を作りて、我男にもあれなれば堪忍比と見られ、跡のしれる盛形の菜は喰もせざりしに、ひとり子をもうけて、我手に掛てしめしやうの物を干て、匂ひをのづからに移り、此子は身の行すゑの樂とは思はず、何の因果に今やなどと、無理成事の口惜く、それからは身を捨、芝居行天王寺參詣もやめける。扨身體を子のためとてかせぐにはあらず、ひとり下子に子を抱せて、袋提させてありく事をうらみける。今の世の女の心奢につれていなものにぞなりける。

定なきは無常、懷胎より身をなやみ、一子を形見に殘して世を去し妻女、其

の。
（一七）ひと道――死といふ一筋の道。
（一八）乳を聞立――乳のある所を聞いて、貰ひ乳をする。
（一九）人間の數にと――人並に育てたいと。
（二〇）摺粉――乳の代りに白米を擂つて粉にしたもの。
（二一）埒あかねば――摺粉を食べる程にも成長してゐないので。
（二二）晝こそ人も云々――晝は他人も、世間の義理で心よく哭れるけれど。
（二三）くれける――禮を哭れるのと、暮れける夜とに掛けた詞。
（二四）ぎよしん――御寢。
（二五）我が命――汝が命の意で子供に向つて云ふ詞。
（二六）難波橋――大和川筋南は北濱二丁目、北は天滿樋上町。（攝陽群談）
（二七）玉綿――まだ種子のついてゐる丸い綿。
（二八）霜夜に門立して是はお隙とります――「お隙とらせます」の意。乳貰ひの男の詞。
（二九）輕薄――追從、お世辭。

身はひと道なりしが、此男の身になりてのかなしさ、世に又是より外に何かあるべし。されども渡世しかねざる人は、相應の付銀して、子のなき方へ養子につかはし、又は乳を聞立一時もそまつにせざりし。貧家のかなしさは、其子が泣度魂ひも消入、母が死貌を思ひ出して、うたてや其子を我ぢやとおもふて捨て給るなと、息引取まで申せし。いまだ三日も立ぬに、此つらさにも人手には渡さじ、まして道橋にも捨難し。身のつゞく程は人間の數にと、思ふは今慈悲の世の人の心ぞかし。いまだ摺粉にても埒あかねば、もらひ乳の不自由さ。晝こそ人も世のふしやうにてくれける、夜はねよとの鐘鳴て、次第にふけ行程に戸を扣くも迷惑ながら、もはや御やすみなされましたかといふては念佛を申、はやぎよしん成まましたかといふては念佛を申、とても我が命のあるべき事にあらねば、夫が抱て難波橋の上からとんとはまつて死るかと、身のせつなさにさま〳〵なげくを内から聞て、今迄玉綿を繰て覺ずうたゝねしましたといふ。何とも御無心なれども又一口と、子さし出せば、今夜は油を買かねましてといふうちに、ともし火消て闇となれば、いかに年寄なればとて男の留守の女房、何とやら心にかゝりて、霜夜に門立して是はお隙取ますと、色々輕薄云て、宿へ油さしを取に行て、先火をともし、庭にくりさしたる綿をしばし繰て、女のす

（一）夜もすがら云々―「起きもせず寝もせず夜を明かしては春のものとて詠めくらしつ」（伊勢物語）
（二）さま〴〵の心――いろ〳〵氣を配り、心を勞する。
（三）世界の緣ふかし――此世に緣がふかい。
（四）墨――横目、監督。
（五）小宿ばいり――こゝは密會宿に入るをいふ。
（六）かうがいさし櫛――子供に怪我させぬために、さゝせない。
（七）さごし――鰆（さはら）の小さいもの。
（八）五香――子供の良藥。（栴檀・鷄舌・沈水香・丁字香・安息香）
（九）手醫者――お抱醫者。
（一〇）つと〳〵――一々。
（一一）馬追船頭お乳の人――人の惡いものを云ふ諺。「元の僧子庭の詩に世間何者最堪憎、頭蚤蚊蝨鼠賊僧、舟脚車夫並娘母」、馬方船頭は荷物を質にとりて途中に強請し、乳母は嬰兒を質として我儘をなす、すべて人を要して勝手を嫌くより云ふ」（和訓栞）
（一二）頤ひなき程――十分にする。

る事心からはづかし。連て歸りて又泣ば、乳もらひ所替て、夜もすがら寢もせで明し、次の日は干肴調てつかはし、さま〴〵の心になりぬ。貧にて乳のなき子をそだてけるは、世に思ひの種ぞかし。

三　子をおもふ親仁

町人にても、世盛の家に出生する子は、前生の定まり事、格別世界の緣ふかし。本乳母抱媼とて二人まで、氏すじやうまでを吟味して、家久しき年寄を墨に付て、かりにも小宿ばいりをさせず。かうがいさし櫛をさゝせず、肌にやはらか成物を着て、食物も朝は白粥に飛魚さごしの外は毎日改め、夜は枕に寢ぬ役人を付、襁褓のぬるゝ數を吟味し、晝夜に三度の五香を用ひ、手醫者間もなく見まはれ、榮花成事、つど〳〵にいふまでもなし。心だての惡敷ものを馬追船頭お乳の人と申せど、分限なる家にては萬を願ひなき程にして、すこしでも奉公にわたくしあれば、明日待ず追出さるゝにおそれ、かりにもすね事をいはず、若子樣を大事にかけまゐらする事ぞかし。此程乳母に出る奉公人を見るに大かたは世帶破り、又は下子共男定めずたはれて、やう〳〵其子を中宿に產捨、乳のあるにまかせて子のとりさばきもうい〳〵しく、口次のかゝに身まか

（一三）世帶破り――自分の持つた世帶をこわして、夫婦別れしたもの。
（一四）口次――周旋屋。
（一五）作法の――お定り通りの。
（一六）祝儀――祝儀に頂く包銀。
（一七）お髮置――小兒の始めて頭髮を蓄へる祝。民間では三歲。多くは十一月十五日に行ふ。
（一八）袴着――袴を着ける儀式。夙く三歲の時行つたが、後には五歲又は十歲の時になつた。
（一九）難儀なる物――「物は」。
（二〇）仕掛もの――ゆすり詐欺。
（二一）こゝろ入――「こゝろ人なり」の意。策略、計劃である。
（二二）忌――產の穢れのこと。父は七日、母は三十五日。（德川實記）
（二三）貌つきおもく――きまじめな顏付。
（二四）かみさま――年寄つた女の敬稱。
（二五）いらはれ――惱れる。

せて、お子五つまでの作法の乳母には出けれども、五月の節句に甲、正月に破魔弓進じて祝儀取事も、お髮置より袴着、兩年は絹物の仕着を取事やら、何のわきまへもなく勤めける、乳母の奉公になれざるものぞかし。

置かゝつて難儀なる物、乳母に年かさねし仕掛ものゝこゝろ入。二三日も溜乳して、人の赤子を借て抱行、いまだ忌も明ませぬと、貌つきおもく素人らしく見せ掛、胸あけてかみさまに乳をいらはれ、四五日はあの子が夫に云分いたし、お食もたべぬ程氣をなやみましてと、鼻を動さず僞いへば、心をしづめて食なと喰れたらば乳もはるべし、ありさまの子は娘か、此方の子は男なればあふたり叶ふたりと、仕掛て來るはしらず、手形極めてきう銀殘らず借取、人の大事の子に夜もすがらたらぬ乳をなめさせ、是は合點がゆかぬと吟味すれば、兎角お子樣に御緣が御座らぬは、瀧のごとく乳のたりませぬからは、お媼どのを置替てくださりませい。お取替の銀は男が暇の狀をくれます禮にやりましと

（二九）手形極め――傭人の證文を書く。
（三〇）合點ゆかぬ――乳が足りないので子供が泣く故である。
（三一）瀧のごとく云々――瀧のやうに出る此の乳でも足りないの意。
（三二）禮にやりまし――「禮にやりまして」もう持つてゐませぬの意。

調べるため乳をなぶるのである。
（二六）云分――喧嘩。
（二七）鼻も動さず――平氣におちついたさま。
（二八）ありさま――お前。

（一）あちらこちら――あべこべ。
（二）人置の相取――周旋屋と相棒。
（三）まことと成世帯やぶりの女――本當に破産した家の妻。
（四）あいたい――相談づく。
（五）あく事ありて云々――飽くやうな事作が重つても、いざ離縁となると。
（六）此かたらひ――夫婦のかたらひ。
（七）世の立ぬ事――暮しが立てかぬること。
（八）あせらかす――おだてる。煽動する。
（九）くはほう――果報。
（一〇）神の折敷云々――貧乏世帯の弱もすゝれぬ狀態を寫したもの。
（一一）奏なかし――貰ひ子に出すのである。
（一二）身のくろみて――「くろみて」は「慕しの立つ」こと。
（一三）ひとつの寄成――一緒に寄合ふ。同棲する。

（一）あちらこちら成事を申て、さま〳〵に難儀させ、何十か軒此手を仕掛ける。此人置の相取、去迚は惡し。まこと成世帯やぶりの女、是非なく男とあいたいにて乳母に出ける。是程世に物哀れなるものなし。夫婦は隨分中あしく、年々一つ〳〵あく事ありて暇やるさへ、すこしは心にかゝる事、いづれの男に聞も同じ貧にも此かたらひをたのしみにして月日をおくりけるに、たま〳〵子をもうけて、嬉しき事は外に成て、子ゆゑに世の立ぬ事となり果、幾度か子をさしころして後、二人ともに手くみ井戸へ逆さまに入て、死ぬべき内談一日づつ延て、其子が我と手を口へはこび笑ひ貌せしとて、隣のかゝだちがあせらかして、くはほうなる耳付、仕合せのそなはりし目の中と、ひとつひとつほめそやせば、ふたりは死んでも、此子が命よ、さて。けふは神の折敷割て素湯わかして暮しければ、子はけしからず泣やまぬに、近所のものども問寄、内證聞ておどろき、それを今まで隠さるゝ事やある。それ程の乳なればよき所へ勤め、其銀付て養なかして、夫婦の人の心さへかはらずは、たがひに身のくろみて後、又ひとつの寄成相事と申にぞ、然らば頼むといへば、中にもかい〳〵敷祖母かけまはして、奉公の口も子のやしなはし所も聞立、二時あまりに埒を明ける。さりとは大坂の廣く、物の自由成事ぞしられける。さる程に、此男今朝まではあひ

（一四）煙の種――吹煙で、生活の種の意。なほ煙は「たばこ」の縁語。
（一五）算用のうち――豫算のうちに入つてゐる。
（一六）さし物――差物、戰場の目じるし。
（一七）非理法權天――この五字を正成が書きしるした故事未詳。「非はもとより理におさる、理は法度におさる、法度は時の權におさる、權は天道におさる云々」（尤の雙紙）
（一八）見付のよき――外見の立派な。
（一九）元其家を――商賣上の資本のみならず家屋敷までも。

見し女房、ふびんにおもふ子にも別れ、夕々の物かなしく、やう〳〵子に付てやりし銀のあまり錢にして、三百七十を資として、葉たばこ刻も煙の種とぞ成ける。惣じて夫婦のむすびなすより、子にそれ〳〵の物入あるは算用のうちなり。何ほどかなしき一日暮しのうら屋住ねせし人の平產にも、米一斗と錢八百は入物にして置しに、此男其覺悟なきゆへに、さしあたつてかゝるひとり身とはなりぬ。

四　千貫目の時心得た

年々根つよき商人を楠の本分限といへり。されば正成が一戰のさし物旗に、非理法權天、此五字を書しるして、義を重く死をかろく、非に理をもつてうち理は法をもつてうち、法は權をもつてうち、權はまた天運にまかせて、數度のたゝかひに理を得ざるといふ事なし。惣じて人間、其家にうまれて道にかしこき事、士農工商にかぎらず。腹の中よりそれにそなはりし家業を、おろかにせまじき事なり。然れども今の世の人心を見るに、親よりゆづりあたへし小米屋は、ほこり碓の音を嫌ひて紙見せに仕替、紙屋は又呉服屋を望み、次第に見付のよき事を好みて元其家をうしなひける。諸商賣は何によらず其道を覺えて渡

（一）商人のつね――商人の常道。
（二）室町――富裕の商家多かりし。
（三）中京――三條通を中心とするその邊り。
（四）世間沙汰――世上の評判。
（五）姉が小路――三條坊門と三條通の間の横通り。
（六）針屋――姉が小路の針屋は古くからある。「あねが小路の針の永日　貞德」（玉海集）
（七）舞錐――廻轉させて穴をあける錐。
（八）耳穴（ミヽズ）――針のめど。「あけくれ」のあけは「穿つ」と「明け」とにかゝる。
（九）分切――長いものを一定の短さに斷ち切ること。
（一〇）御室――京都西郊花園村、仁和寺の櫻。
（一一）通天――紅葉の名所通天橋は京都下京區本町の東福寺にある。
（一二）七日――六月七日祇園會・神幸の日。
（一三）素麪云々――祭の時の貧乏くさい食物。
（一四）十四日――六月十四日祇園會・還幸の日。
（一五）風呂屋――湯女。

世しけるは商人のつねなり。（一）されども古代に替り、銀が銀もうけする世と成て、利發才覺ものよりは、常躰の者の資を持たる人の、利德を得る時代にぞ成ける。今の都室町（二）通に軒をならべて家名のあるじ、いづれか世わたりにうときはひとりもなかりき。又此所の手代、若きものまでも中京（三）に住なれて、世間沙汰（四）もはやく聞付、人の善惡を見及び、誰指南するとはなくに、自然とよろづの道を覺へぬ。是をおもふに、人がらも兎角住所によるなり。同じ京にありても姉（五）が小路の針（六）屋の弟子と成身は、舞錐（七）のせはしく、耳穴（八）のあけくれ分切（九）の仕事に年中いとまなく、御室（一〇）の櫻通天（一一）の紅葉春秋もしらず、七日（一二）の祇園の山鉾の有樣、つゐに見たる事もなく、素麪（一三）揉瓜なますを、祭はありがたき物とばかり、たのしむ事の外なし。同じ年の比の若い者、よき所に主取せしは、けふは十四（一四）日の祇園女郎の物日とて、揚屋極めて呼置、又は茶屋に一日あそびを約束し、あるひは風呂屋素人（一五）をしのび連て、一疊一歩の借棧敷して、山（一七）の渡るを見せける。いまだ年季（一八）の小者あがり、どこでこがね釜を掘出して來て、大分につかふ事にぞありける。同じ奉公せしうちに、紙入に金銀を絶さず、とても貳百目や三百目、私（一九）あきなひにてもうけたれば迚、我代の時のたりにもならずと、つかひ捨ける心と。又、針屋の弟子がお内義の親里へ五節句の祝儀をはこび、包錢

（一六）素人――白人。「京にて妾者を泊人といへり」（好色由來揃）。素人女の賣色。
（一七）山――山鉾。「十四日の祭禮には山ばかり十出る」（案内者）
（一八）年季――年季奉公してゐる小者あがりの手代。
（一九）私あきなひ――主人に内密でする個人の商ひ。
（二〇）我代の時――獨立して商賣をする時。
（二一）たり――足し。補ひ。
（二二）細布――絹布か。
（二三）うちくる――年波の波の縁にて云ふ。
（二四）前巾着――印形や鍵を入れる。
（二五）呼いれて――間もなき嫁としてから間のない。
（二六）親かたにそなはりし人――主人として備つた人。
（二七）ぜんごん――善根。
（二八）算用あい――決算狀態。
（二九）手くらまぐら――（出前）てたらめに、無分別に。
（三〇）銀まはし――金の融通。
（三一）越度――あやまち、落度。

の十文づつを溜て一匁八分に成事もがな、一生の願ひに細布（二二）の赤ふんどし一筋ほしやと思ふばかりの心。各別世界の人ほど違ひのありけるものはなし。近年分限になる人の仔細を聞に、其家によき手代ありて、是等がはたらきゆへなり。又家榮へたる人の俄におとろへるを聞ば、是又其家の手代どもが仕かたゆへなり。むかしは若い者のはたらきに利を得たる有、此比はたしぬるばかりなり。是をおもふに主人の覺悟あしき故、大分の金銀を皆人の物になしぬ。聞べき時の算用を捨置、物見遊興舟あそび、年浪のけはしくうちくるをもしらず（二三）。銀手形の詮義もなしに、手代が云分を慥に、印判押といへば、夢のごとくに前巾着（二四）あけて、世に手廣ふして置たる德には、我印判ひとつで千貫目の事も埒が明ほどにと、呼いれて（二五）間のなき女房に、無用のじまんなり。其家の親かた（二六）にそなはりし人は、其身ばかりの世わたりにはあらず。壹人の心さしを以て、家内の外何人か身をすぐるよろこび、是にましたるぜんごん（二七）なし。以前は盆正月二度の勘定濟たる事成とも、油斷なく爰を改めて、毎月晦日に算用（二八）あいを聞ば、物毎せはしきゆへに、手くらまぐら（二九）の銀まはし（三〇）もならず、尤わたくし商ひの仕掛のいとまなく、をのづから親かたの商賣ばかりにうちかゝりて、ひとつも越度（三一）なく、其身のためにも成事なり。預け銀の先々へも自身の付屆して、慥に借所

（一）つかひなし――使用の仕方。こゝは「奉公人の使ひ方」一つで、どうともなる」の意。
（二）有人――ある人。
（三）道を付――商賣を發展させ。
（四）此銀なく成事云々――商賣する時は此銀も十年と持つまいの意。
（五）わづかの取付――「わづかの取付」、より少しの資本で商賣を始めての意。
（六）たのし屋――樂しき家富裕安樂な家。

をしる事、今時の大事なり。總じて世上のありさまを見るに、其親かた次第に福人に成時は、めしつかひの者どもも、我おとらじと勤め、利德を得る事に油斷せず。主人内證もつれし時、爰はひとつはたらきてもとおもふ手代はなくて、迚もつゞかぬ家なればと、それ〳〵に奢、分散しまひに成事程なし。兎角下々は其あるじのつかひなし（一）とぞいへり。有人（二）商賣おもふままに道（三）を付、銀子千貫目のおよぶ時、其年五十三にて大病を請、死期の近付時、一子十九歳になれり。我相果ての跡にて、何によらず商ひ事やむべし。此（四）銀なく成事十ヶ年はたもつまじ。十貫目より上の家質より外に、何方へも借す事なかれと、手代どもにそれ〳〵の銀子とらせ、家はんじやうの最中にかくしまふて渡されける。此家惜みけれども、わづかの取付（五）千貫目にする程の人心、よろしき極め成べしと沙汰してするを見しに、子の代に金銀の置所なき、たのし屋（六）とぞ成ける。

元祿七甲戌年
三月吉日

江戸　万屋清兵衛
大阪　鴈金屋庄兵衛
京　上村平左衛門板

附錄　西鶴の町人小說

天和二年一代男を初作として小說界に入り來つた西鶴は、嬌樂物から奇談集・武家物と云ふやうに、絕えずその作風に新彩を示してゐたが、元祿期に入るや、新たに筆を町人物に染めたのであつた。しかしこの推移は全くの異境を開拓しようとしたのではなく、むしろもとの畑に歸つて來たのである。その所以は町人物なるものが元來、嬌樂物(好色本)と共に當代町人の全生活を成す、謂はゞ楯の兩面であつたからである、

飜つて武家物と町人物とを並べ、更に作者を添へて考ふる時、西鶴がよく自己の本領を了解して居た事を思はずには居られない。かれが武家物に臨むや凡てが傍觀的態度であつた。階級意識が峻烈に動いて、その差別相が嚴存する時代にあつては、二本差の世界に素町人の覬覦は免されなかつた。平民は武士の優越を讃美する事は出來てもその境地を踏む事は不可能であつた。從つて、その墮落頽廢を認めても、悲憤して積弊の打破を絕叫するやうな事は夢にも考へ及ばない。士分階級の生活諸象には、たゞ「見て過ぎよ」の態度を强要されてゐた。同じ時代の空氣を吸つてゐる以上、彼此の間に多少の交涉は否定

できないけれど、作者の內生活から云へば、武家を圍繞する種々相は、薄紙幾重を距てた彼方の消息に外ならなかつた。然るに町人の世界を見た西鶴の態度はこれと選を異にして居る。こゝは自己の世界である。活々とした現實である。眼前にちら〳〵する凡ての人間は、同じ大氣の下に生息して居る。興味はこれに伴ひ實現が後に隨つてゆく。作者は此世界に入浸つて、その情意の活動を十分に汲みとる事が出來たのである。心臟の鼓動を同じくする程、密接な牴觸はない。元祿町人の胸の響きは、西鶴の最もよく了解し得たところである。彼がこの方面に於ける作品が特に光つてゐる所以は玆にあると思ふ。

町人物として彼の述作は、こゝに收めた三篇、即ち「日本永代藏」(元祿元年)「世間胸算用」(元祿五年)及び西鶴歿後の出版にかゝる「織留」(元祿七年)である。解說は各々の項に於て本文に先つて記述したから、こゝでは其作品に關する批評感想を誌すだけに止めたい。

一　日本永代藏

峻嚴なる階級制度の下に壓伏せられて、しかもその地位に滿足して居たのが當代町人の一般狀態である。彼等の中にはたとへ武士の壓迫と掣肘とに多少の不滿と憤慨とを感ずる者があつたにせよ、現狀打破を絕叫するには餘りに無力であつた。絕對の服從と仰望とを武士に拂つた彼等は、更に自己の進むべき路を他に求めた。彼等は社會制度の改革に憧憬する代りに、町人としての出世、即ち分限長者たらむ事を熱望した。この經濟力の獲得が町人生活に絕大な權力把握の結果を招來した。「日本永代藏」の三十話も商機の利鈍を說き貧富の流轉を語つて居るが、要するに長者分限に向つての處世法に外ならない。失脚して師走の寒空に紙子着る者も、時を得て千兩箱を並べる者も、所詮は町人としての處世方策の當否如何によるのである。

「煎じやう常とは變る問藥」(第三卷第一話)に於ける長者丸の處方は、まさしく當代町人の理想鄕たる分限に到達する指針である。

△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩

此五十兩を細にして胸算用秤目の違ひなきやうに手合せ念を入れ、是を朝夕呑込むからは長者にならざると云ふ事なし、然れども是には大事の毒斷あり。

○美食・淫亂・絹物不斷着○內儀の乘物・全盛娘に琴・歌がるた○男子に萬の打囉子○鞠・揚弓・香會・連俳○座敷普請・茶湯數寄○花見・舟遊び・日風呂入○夜步行・博奕・碁・雙六○町人の居合兵法○物參詣・後生心○諸事の扱・請判○新田の訴訟事・金山の仲間入○食酒・莨好・心當なしの京上り○勸進相撲の銀本・奉加帳の肝入○家業の外の小細工・金の放目貫○役者に見知られ揚屋の近好○八より高い借錢

先この通りを斑猫砒霜石より怖ろしく口にて云ふも侘置心に思ふ事勿れ

われ〳〵はこれに依つて時代の處世的觀念を大凡推察し得ると共に、蓄財の經濟的意義を了解して居

なかつた事にも想到し得るのである。唯溜る貯へるの一點張である。貨殖の道とは千兩箱と家藏との數量そのものゝ如く感じて居る。家職の大切なる敎へ、始末大明神の託宣と崇めたのは、此消極的方針の蓄財主義を標榜したのに外ならない。財政と金融との關係によつて生ずる諸問題とは全く風馬牛である。此のためこみ一方の處世法には悠々たる世相の一面が覗はれる。せつぱ迫つた生さんとする努力でなくして、たゞ分限たらんとする望み、即ち財慾の上に築かれた望蜀的努力である。

かゝる蓄財主義が處世法の一大信條のやうに描かれて居るが、紛糾した幕初のどさくさまぎれに一攫千金を贏ち得た成金の所作は、秩序が整齊の途についた元祿の世に見出す事は出來ない。さりとて守成的儉約と云ふ消極的方針によつてはその目的を達する事は不可能である。こゝに於いて新事業發明の積極的方針によらねばならぬ破目となつた。西鶴が繰返して云ふ「才覺」とは、此難關に處して蓄財の本旨を明らかにする唯一の方策であつた。然らば才覺とは何う云ふ意義かと云ふに商機把捉と云ふ才華の活躍を中核として、よく人情風俗を了解するのである。人心の推移と社會の風尙とを明察する事である。相場の上下は勿論、天變地異に對してさへ豫知するだけの能力が必要である。即ち、經濟生活に於ける智識技能の上に鋭敏なる觀察力と明確なる判斷力とを供へ、常に社會から一歩進まんとする努力そのものを云ふに外ならない。しかしその半面には正しき道からはづれた詭計術策の權道をも是認してゐる。

要するに「才覺」なる言葉の內包するところはかなりに複雜である。

永代藏に現はれた分限長者と呼ばるゝものは程度の差こそあれ、幾分なりともこの「才覺」を有した者である。藏前のこぼれ米を拾ひ集めて身代を興した女も、當座帳に迅速な商賣振を見せた三井（三越の祖先）も、死犬を黑燒にして肝の藥と賣歩いた男も、等しく彼の所謂才覺の所有者であつた。又若者二三人が町內で評判の才覺爺の許へ身過の方法を聽きに行つたところ、いろ〳〵御談義の末

偖宵から今まで各々咄し玉へば最早や夜食の出づべき所なり。出さぬが長者に成る心なり。最前の摺鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を摺らしたと云はれし（第二卷、「世界の借家大將」）

の如き、ある家の養子が舅姑の樂隱居するのにすゝめて

まづ夫婦衆は今日より毎日談義ある寺詣りし玉へ、其下向に納所坊主に近より散錢ある程買ひ玉へ、世帶佛法二つの德あり、供の丁稚は道の間の外聞なれば浮世山椒をうけて小袋に入れ行き法談初まらぬ先に諸人の眠りさましにこれを賣るべし、偖又供つれぬ參り衆の笠杖草履を談義はつるまで一錢づつに預かれ云々（第六卷、「見立養子が利發」）

と云ふ。これらはいづれも商人の心機を穿つたものである。かくの加く、或は勤儉節約を生命として粒々として仕上げてゆき、或は目から鼻へ拔ける機敏を以て巧妙に立廻つてゆく。

これらを一面として更に他の一面がある。それは目的を邁進せんとするの極、目的のために手段を選ばない、經濟界に於けるマキアベリズムが描かれて居る事である。これは商業道德の發達しない時代に

あり勝ちの事で、現代にあつてもむしろ家常茶飯事として認められて居る。まして此觀念の幼稚な頃として、西鶴は少なからず、此方面に深刻な穿ちを行つて居る。

例へば、菊屋と云ふ男、多くもない身代でありながら、初瀨觀音の開帳を三度までして坊主共を籠絡し、遂にその戸帳を得て茶入の袋、表具切に賣拂つて莫大の金をもうけ（世はぬき取の觀音の眼）。惠比須樣の風體して朝茶の店を初め大當りを取つた男、つい蓄財をあせり、茶の煎殼を買集めこれを交へて賣廣める（茶の十德も一度に皆）。而して前者は惡錢身につかず、元の杢阿彌となり、後者は天罰で狂死する。西鶴が此場合かゝる後日談を添へたのは一方教訓的意義に掛念した結果と思はれる。しかし大體としての情趣は、かゝる商賣上の掛引、才氣に多大の趣味と同情とを以て取扱はれて勸懲的氣分は單なるつけたりの如く感ぜられる。作者自身の嗜好風尙が、その說話の上に最もよく現はれて居るのは「心を疊込む古筆屛風」の一篇であらう。

筑前國博多に住みなす金屋とか云ふ人が、海上の不仕合、一年に三度までの大風に遭つて商品を藻屑とし召使には悉く暇出して、その日暮しの佗しい生活をして居た。ある日「見越の大竹より杉の梢に、蜘蛛の絲筋はへて、これを渡れば嵐に切られて中程よりその身落ちて命も危かりしに、又も絲かけて傳へば切れ、三度まで難儀に遭ひしに、終に四度目に渡り終せて間もなく蜘蛛の家を作りて、飛ぶ蚊のこれに懸るを己が食物にして猶々絲を繰返す」を見て、奮起して家藏を賣拂ひ長崎に下つた。しかし思通りにもならず「はかどらぬ算用捨てわざくれ心に」なつて丸山の遊女町に行き、ある女に逢初めたが、ふと枕屛風に目をとめ「わけて定家の小倉色紙名物記に入りたる外六枚、見る程時代紙正筆に疑ひなし」とてこゝに慾心起り、この魂膽によつて明暮通ひ遂に貰ひ受け、上方に急ぎ上つてさて大名に献上し、大分の金子申請けて大分限となつた。かの遊女はうけ出して願ひの男に緣づけてやつた。

この筋書の示す如く、前半の蜘蛛はかの西歐傳說の語る蘇王の決意を聯想する題材であるが、それはともかく、一旦決心して鄕を離れ遠大の希望を以て、當時の殷富の海市長崎に出掛けるあたりは如何なる才覺で如何樣なる大活動をなすかと瞠目して俟たるゝところである。然るに一轉しては、すぐ自暴自棄となつて遊女狂を初め、再轉しては、詐欺的行爲を遂行する。永代藏が純教訓物として取扱にくいのはかう云ふ點にある。もしそれ最後の粹な仕打に至つては、作者自身の嬉びそうな事實である。

かくの如く、永代藏に現はれた處世法は、所謂「才覺」を中心とする商人の活動舞臺である。長者になる心持を說き、世渡りのさま〳〵を描き、さては掛乞の仕方や借錢の魂膽を語るのも、一にこの才覺によつて蓄財の目標に邁進する道程の背景であり餘色である。從つてたとへ道念に抵觸するところがあつても、甚だ寬恕な態度を以て眺めて居る。この點は永代藏の把握せる、極めて廣義な意味での教訓、

即ち町人の處世上必要なる條件の提撕、たゞこれだけの意義を指示するものに過ぎないのである。

しかし中には、眞率にして謹直なる教訓も絶無ではない。ある夜更、酢屋の門口を叩くものがある、下男眼を覺して何用と聞けば「一文がところ酢を」と云ふ。そこで空寢入して了つた。翌朝主人がその下男に門口を三尺計り堀れと命ずる。不思議に思ひながら汗水になつて堀ると、錢がある筈だがないかと問はれる。「小石貝殼より何も見えませぬ」と申す。「それ程にしても錢が一文もない事、よく心得て重ねて一文商ひも大事にせよ」と戒めた。又伊勢海老橙の高價なる年、「高直なる物買整へて是を飾る事何の益なし、天照大神も咎めさせ給ふまじ」とて車海老と九年毋にてすまし「民家の女は琴の代りに眞綿を引き、伽羅の煙よりは薪の燃さしをばさしくべたるがよし」と云ひ、或は「隨分世渡りに粗略をする事勿れ、或長者の言に欲しきものを思はず、惜しきものを賣れとぞ、此心の如く稼ぎて奢のやむればよきに極る事なり、されば商ひの心ざしは根を收めて太く持つこと肝要なり」と諭す。さりながらこの教訓も、亦道念を基調とするものでなく細心なる實用的處世法に過ぎぬものではあるが、西鶴が絶えず繰返す信條であり且不易の箴言でもある。

然らばこの蓄財的努力を續けてゆく最後の目的は何であるか、それは富貴に憧るゝ念と、更に富貴によつて歡樂を克ち得んとする心に外ならぬ。換言すれば町人としての理想に到達した後は、好色の世界に遊ばんとするのである。即ち町人の二面生活を味得せんとするのである。かゝる理想境に進む徑路としてある點までは、ためこみ主義となり更に一轉して享樂のための散財となるのである。この間に財界の流轉と榮枯とが走馬燈の如く幻影を投げる。西鶴の町人物は、この世界に浮動する盛衰種々相を取扱つたものである、但し二面生活の道程と意義とに就ては後節に述べる。

要するに「日本永代藏」の中心基調は、實用的處世法の解說にある。具體的例證を以て才覺を敎へ、分限に至る方策を說いたのである。而して敎訓的色彩が稀薄ながら全幅に滲透せるのは、この作品の本質が然らしめたものに外ならない。

この一篇は町人物として世を刺戟する事最も著しく、正德三年に「日本新永代藏」(六卷)、同年「商人職人懷日記」(五卷)の類本を出した事を附記して置く。

二　世間胸算用

「世間胸算用」の主題は大晦日を背景とする町人生活の一面である。この生活狀態は自から二樣の風趣を呈してゐる。即ち一は利發才覺によつて悠々と年越しをするし、他はとかく福の神と緣が薄くて遣繰算段に靑息吐息の體である。而してその取材の分量から云へば殆んど後者に屬するもので或は生活難を

訴ふる嘆き話となり、或は掛乞を追ひ戻す魂膽となるのである。

第一に擧げた利發才覺による蓄財家の大晦日は、一面から見れば吝嗇と强慾との結果である。從つてその因果過程に何等かの破綻を生じた時、一種の哄笑を喚起する。例へば次の樣なのがある　類を以て集る慾深い連中が寄つて朝から晩まで身過ぎ始末の話ばかりして「借銀の確なる借手を吟味して一日も銀を遊ばせぬ思案」をめぐらすうち、何の某はどの位の身代だらうかと云ふ詮議が話題に上つた。或者は金持と云ひ或者は借金だらけだと云ふ。いろ〳〵穿鑿の末無財產と云ふのが確らしいので、金持だと信じてゐた男の一人は大聲あげて泣き出す。仔細を聞けば大分貸金があるとの事。大弱りに弱つて足腰のたゝぬ程に嘆いたが、一座の利口者が紬一疋くれるなら取返す秘法を授けようと云ふ。そこで「中綿まで添へて御禮申さう、何とぞ賴む」と泪を流して拜む。この計略うま〳〵と當つて「その年の大晦日にかのおやぢ門口より、笑ひ込み御蔭にて右の銀子元利ともに二三日前に請取りました。こなたの樣な智慧袋は銀貸仲間の重寶々々と頭を叩き、扨その時は紬一疋と申せしがこれにて御勘忍あれと白石の紙子二反差出して、中綿は春の事と云ひすてゝ」歸つた(銀一匁の講中)。この說話にはおやぢが驚いて泣き出す所と最後の禮物の場とに滑稽味が溢れてゐる。かゝる輕い可笑味の中に人生の深い趣を暗示するのは西鶴が獨得の壇場で、彼の作品の隨所から拾上げる事が出來る。

その他にも、伊勢海老一つが四匁五分と云ふ年の暮、主人が紅絹を張拔にして海老を作り二匁五分で出來たと得意になつてゐる處へ、此家の婆で、九十二になつたのが、此月の中頃に四匁で二つ買つて置いたとて出される。皆々感心したが二つは奢つた事と云へば、こちに當所のない事は致さぬ、定まつて畑牛蒡五把太ければ三把くれる人がある、それ程の物を返すその所へ、海老にて一匁が午蒡四文がもので濟ます合點ぢや」と云はれる。その上親子でも算用合は急度したがよい。此の海老欲しくば五把持たして取りに來いとの說話がある(伊勢海老は春の紅葉)。又ある家で年玉銀が一包紛失した。いろ〳〵詮議したが出て來ない。その翌年煤掃の折、屋根裏から發見したので鼠の仕業と一決したが、祖母は承知しない。多分頭の黑い鼠の業とて疊叩いて喚めかれるので種々云ひ聞かしたが目前に見ぬ事は實にならぬと云ふ。そこで鼠使ひの藝當を見せて鼠が包金を引くまじき物でもない事を證明させた。「さて疑晴れました、さりながら、かゝる盜心ある鼠を宿しられる不承に、まん丸一年此銀を遊ばして置きたる利銀を急度おもやから濟まし玉へ」と云ひかゝり一割半の算用にして十二月晦日に受取り、本の正月をすると云はれた(藝鼠の文づかひ)。

これら三つの話には誇張の痕もあるけれど、この金錢に執する心持は、とりも直さず分限者たるに必要な修業であつて、世人のやきもきする大晦日に平然と何喰はぬ顏をなし得る素因となるのである。作

者が滑稽的色彩を交へながら、しかも町人の處世要訣を說いてゐる事は永代藏に於けると同一の敎訓的臭味が窺はれる。

次に生活難を訴ふるものゝ方面を見るに、之は又千差萬別であつて當代世相の縮圖たるの觀がある。程度の差こそあれ、いづれの世もせち辛いのが本來の姿である。擊壤鼓腹の大御代と見える元祿にもこの慘めな聲を聞く。「古き傘一本綿繰一つ茶釜一つ、かれこれ三色」で銀一匁を借りるもあれば「木綿頭巾、蓋なしの小重箱、五合桝、湊燒の石皿、筬一丁とり集めて二十三色」で一匁六分借りるもあり、さては梨地の長刀の鞘一つに錢三百黑米二升を强請する、小質屋の店先から見たさま〳〵の年の暮、極月二十九日、夜の伏見の下り船に乘合の繰言を聞けばいづれも身過話、これまでは姨の助力で年越して居たが當暮は合力ならぬと云ひきられた男があれば、四條の役者子に弟を賣らうとしたが耳が小いとて本子に仕立られぬとて斷はられて歸る者が居る。先年日蓮上人の筆蹟を望まれて賣らなかつたが今年は金が入るとて望みの人に持つて行けば、いつの間にか淨土宗になつてゐて、思はくの違つたなど、「晝の中は寺社の繪馬を見て暮さうが夜に入つては行く所もないと、さし迫つての嘆き話が多い。又夜市のさまを覗けば、こゝも又大方は行處のない借錢負ひの顏色ばかりで、せり出す品々も「今宵になつて賣る程のもの、よく〳〵の事」と思はれる。こゝに現はれた淚と笑との交錯に、自らなる悲喜劇の人生の活圖が、まざ〳〵と繰り展げられてゐる。而しかゝる貧乏の破目に陷つた原因を考ふるに、近代の痼疾たる物質的文明の壓迫とか、よつて起る貧富の懸隔とか云ふものではなく、たゞ贅澤・放縱・怠惰・暢氣など所謂「無才覺」に因るもので、即ち各自の勤勉努力によつて十分免れ得べき性質のものである。

この生活難に關聯して一年の總仕舞、年の瀨を越すか越せぬかの胸算用にも、大晦日の遣繰のつかぬ折掛乞に對する方策は切實なる焦眉の問題であつた。西鶴の見た町人はいかにこの難關を切拔けやうとしたか。

或者はお茶屋に逃げこんで酒に入浸つてゐた。或者は狐つきの眼して庖丁逆手に切腹と見せかけて追つ拂つた。更に惡辣なのは納戸の隅に隱れてゐて、女房に今に歸つて參りませうと云はする中、豫め丁稚に云ひつけて駈込ませ「旦那殿は助松の中程にて大男が四五人して松の中へ引込み、命が惜しくばと云ふ聲を聞捨てにして歸りました」と云はせ、掛乞を欺くのがあれば、「互に懇なる亭主入替りて留守を致し、借錢乞の來るを見合せ、御內儀私の銀は外の買掛りとは違ひまして、亭主の腸をくり出して埒を明くる」と怒鳴り、外の掛乞どもに、これは仲々濟みさうもないと諦めさせるのがある。これらは窮すれば通ずの非常手段で、いづれこれに類した窮策が弄せられた事であらう。これに對して掛乞の方でもこの猾手段にうかと乘らず、門口の柱を大槌で打外して持つてゆくなど一層高飛車に出るのもある。

要するに胸算用の一篇は、大歳の夜を頂點として借方も貸方も智慧袋を絞る惡戰苦鬪の記錄で、町人生活一面の照魔鏡である。この世相を裏から見れば即ち貨殖への指針で、かの永代藏を引つくり返せば直ちにこの胸算用となるのである。

翻つて此作の構成を見るに、結構を無視する點に於て他の諸作のそれよりも著しくなつてゐる。一物語の中に核心的說話と思はるゝもの以外、或は斷片的叙述が臚列され或は挿話の多くが入り込んでゐる。例へば「餅花は年の内の眺め」の如きは先づ拂方の變遷を述べ當世手代氣質を說き、漸く忠六なるものゝ話を持出してゐる。又「奈良の庭竈」には鮹賣八助の話から一轉して京の富、大阪の厄拂、三ケ日の賣物を叙し、再轉して奈良の晒布の事から牢人强盜の話に終る。たゞ聯想によつて、次々と現はれ來るところは所謂連歌的小說で西鶴特有のものである。かの標題の下に「小見出し」を誌してゐる用意を、こゝで看過してはならない。しかし胸算用の長所はこの種のものになく、むしろある中心を點出してそれを圍繞する世界を叙したものにある。即ち質屋から見た貧民生活（長刀はむかしの鞘）、下り舟の世間話（亭主の入替り）、夜市の狀況（つまりての夜市）を初め、手習師匠から眺めた小兒の才覺のいろ〳〵（才覺の軸すだれ）等いづれも町人生活を描き出すに於て鮮明なる印象の下に當代世相の一端を最もよく髣髴せしめてゐる。

三　織留

西鶴が世を辭した元祿五年の胸算用から二年遲れて、遺稿として「織留」が刊行された。その前半「本朝町人鑑」二卷九話はいづれも「機會」を覗つて居る。而して第一卷と第二卷とには、明らかに區劃が認められる。即ち第一卷に現はれたものは現實生活上、鋭敏な觀察と細心な用意とによつて、寄せては再び歸らぬ刹那的の「機會」を迅速に捕捉して逃さぬのにある。「品玉とる種の松茸」の主人公は七ころび八起きのせち辛い世の鹽に揉まれたが、ある時、宵に燒きたる鍋の下に、朝まで火の殘りしこと、これは不思議と燒草に氣をつけ見しに茄子の木、犬蓼の灰ゆゑに火の消えぬ事を知り、こゝに懷爐と云ふ物を仕出して何萬兩とも藏入の奥は知らぬ身となつた。これは唯「機會」の前額に垂れ下る髪をよく捕へ得たのである。緻密な省察によつて、至るところに存在する事實を敏捷に活用したのである。又「所は近江蚊帳女才覺」の内儀が、その初め米商賣せる折、わづか一升買する程の貧者には利德かまはず斗よくして手廣う見せた。これがために評判となつて繁昌を克ち得、遂に分限の域に入り、近江蚊帳の大商賈となつた。前者とはその道程に差異があるが、根柢に於ては同じく商機を見るの明があつたのである。これに反して、「古帳より十八人口」に於ける塗物屋が、親の代と比較して收入が激增して居るに拘ら

ず、その家計が甚だ振はぬ。これは家政上の細心の用意と實直なる內省とに缺陷があつたゝめである。先代と當代との萬事に就て對比しつゝ、諄々として說く老母の繰言は、とりも直さず處世上一般の方策であり、現實生活に對する作者が峻烈なる批判である。

第二卷に入ると、この機會なるものに異つた調子が加つて居る。即ちいづれも偶發的事件としての色彩が强烈になつて居る。一家夜逃せんとする折、助けた猿が口中から虎のかたし目貫を吐出したゝめに、身代を持直した「保津川の流山崎の長者」。物詣の途中ある小娘が、母を養ふたよりとて差出す絹を不愍と買とつたが、それは唐織と云ふ珍寶であつた。賣主を尋ねても分らず、それより運が向いた「五日歸りにおふくろの異見」の後半。又ある鹽商人が踊の覗見した歸りがけ百二十兩入の財布を拾ひ、落し主のさる手代に渡し、五兩の御禮と差出すを「それはそなたの金子にあらず主人の物、我に分けらるゝ故なし」とて見向きもせず、手代は後から定まつて鹽二斗づゝ買つたので、だん〳〵仕合つゞきになつた「鹽賣のらくすけ」の話。孰れも慈悲、正直などの善根の應報として描かれて居る。こゝに於て比較的露骨な敎誨の意味が現はれて來た。

更にこゝに動く商人の群を眺めて見ると、大雪の元日に大釜の湯を沸して我門の雪を消したので、店に買よるもの山をなして、一日に五十兩あまりの當座賣した「當流の物ずき」の江戶の小川屋があり、「寐てからは五文十文がのは賣らぬ」とその聲を聞いて、五文の餅賣らぬからは、商事あり餘ると見えた、此處かせぎて見たき湊と思ひつく大阪のさる町人があり、二人の手代を分家さして、その一人が十年經つても、わけ分の二百貫より延びないので多くの者が譏るのを、年寄や年頃の娘を持つた彼が、あれだけに持こたへて居るのはよく〳〵えらいのだと道理をわけて衆愚を戒めた「今の世の楠木分限」の主人がある。これらも亦ある機會を把持して、これに留意し研精し細緻なる心づかひの下に、活き甲斐ある生を送らんとした努力そのものである。

要するに町人鑑は、商賈として一日も忽緒に附すべからざる必要條件を體得し、幻滅定めない機會を敏活に把握して、最後の目的たる長者分限に到達した實證をあげ、以て保導訓誡の資に供せんとした敎訓的色彩の著しい作品である。

「世の人心」の四卷十四話には「町人鑑」のやうに諸篇を一貫する中核は判然と認められない。しかしその雜然たる市井生活の種々相の中に、自らある契機が存在する。もし町人鑑の題號を「人皆見及び其身一代のはたらき是れ町人の鑑ぞかし」(卷二第二話)に所據を求めるならば、世の人心の標題は「されば世の人心何時となく替り行定め難し」(卷三第三話)から拾上げる事ができよう。事實「世の人心」の